嘉 徳 遺 跡

1974

大島郡瀬戸内町教育委員会

嘉 德 遺 跡 土 器

嘉　徳　遺　跡

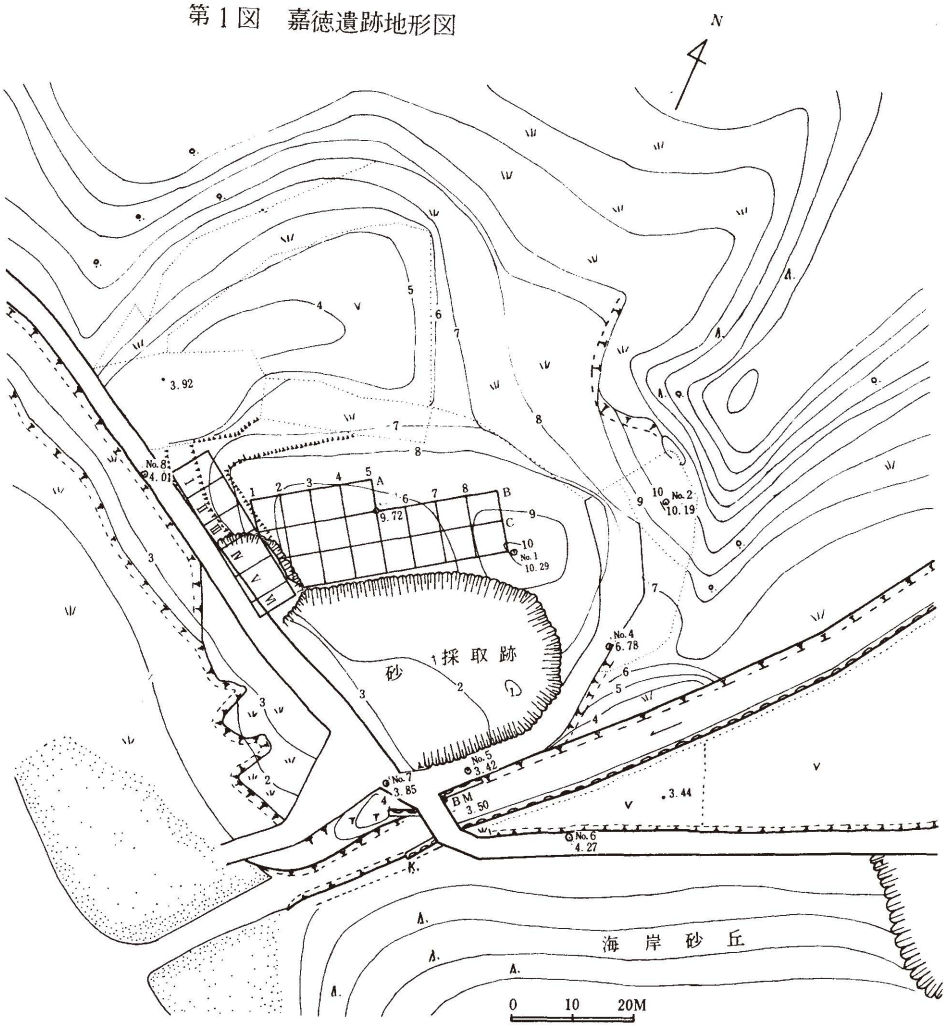
二重口縁土器出土のピット

嘉 徳 遺 跡

大島郡瀬戸内町嘉徳砂丘遺跡の調査

河口貞徳　上村俊雄　多々良友博
平島勇夫　肱岡隆夫

第1図　嘉徳遺跡地形図



図版目次

図版第 1	嘉徳式土器	49
図版第 2	面縄前庭式・嘉徳工式土器	50
図版第 3	西斜面地区の調査	51
図版第 4	第1，第2地区の調査	52
図版第 5	第1，第2地区の調査	53
図版第 6	第2地区の調査	54
図版第 7	第2地区の調査	55
図版第 8	第4地区の調査	56
図版第 9	第5地区の調査	57
図版第10	第5地区の調査	58
図版第11	第2・第5地区の調査	59
図版第12	第2地区の遺物	60
図版第13	第1地区の土器	61
図版第14	第1地区の土器	62
図版第15	第1地区の土器	63
図版第16	第1地区の土器	64
図版第17	第2地区の土器	65
図版第18	第2地区の土器	66
図版第19	第2地区の土器	67
図版第20	第2地区の土器	68
図版第21	第3地区の土器	69
図版第22	第3地区の土器	70
図版第23	第3・第5地区の土器	71
図版第24	第5地区の土器	72
図版第25	第5地区の土器	73
図版第26	第5地区の土器	74
図版第27	西斜面地区の土器と第2・第3地区の石器	75
図版第28	第1地区の石器	76
図版第29	第1地区の石器	77
図版第30	第1地区の石器	78
図版第31	第2地区の石器	79
図版第32	第2地区の石器	80
図版第33	第1・第2地区の石器	81
図版第34	第2地区の石器	82
図版第35	第2地区の石器	83
図版第36	第2地区の石器	84
図版第37	第2地区の石器	85
図版第38	第2地区の石器	86
図版第39	第2地区の石器	87
図版第40	第3地区の石器	88
図版第41	第3地区の石器	89
図版第42	第3地区の石器	90
図版第43	第3地区の石器	91
図版第44	第3地区の石器	92
図版第45	第4地区の石器	93
図版第46	第4地区の石器	94
図版第47	第5・第1・第2地区の石器	95
図版第48	西斜面地区の石器	96

挿　図　目　次

第 1 図　嘉徳遺跡地形図 ---------- 1
第 2 図　嘉徳遺跡発掘画図 ---------- 7
第 3 図　西斜面地区地層図 ---------- 23
第 4 図　第1地区東地層図 ---------- 11
第 5 図　第2地区東地層図 ---------- 14
第 6 図　第4地区地層図 ---------- 17
第 7 図　第4地区A1，A2グリッド北地層図 ---------- 18
第 8 図　第1地区B2グリッド石組遺構図 ---------- 10
第 9 図　第2地区B4グリッド石組遺構図 ---------- 12
第10図　第3地区C51層下部ピット図 ---------- 16
第11図　第5地区C82層下部ピット図 ---------- 20
第12図　第5地区出土土器図 ---------- 28
第13図　第3地区出土土器図 ---------- 29
第14図　嘉徳遺跡出土土器図 ---------- 30
第15図　嘉徳遺跡出土・錘飾・小形石器 ---------- 34
第16図　第1・第5地区出土石器 ---------- 37
第17図　第1・第5地区出土石器 ---------- 38
第18図　第1・第2地区出土石器 ---------- 39
第19図　第2地区出土石器 ---------- 40
第20図　第2地区出土石器 ---------- 41
第21図　第2・第3地区出土石器 ---------- 42
第22図　第3地区出土石器 ---------- 43
第23図　第3・第4地区出土石器 ---------- 44
第24図　第2～第5地区出土石器 ---------- 45
第25図　第2地区出土石器 ---------- 46

例　言

1　層　位

上部遺物包含層を第1包含層又は第1層，中部遺物包含層を第2包含層又は第2層，下部遺物包含層を第3包含層又は第3層と称し，それぞれ上部下部に2分した。各包含層は自然堆積層としては細分される部分もあり，第1層と第2層の間には1m以上の無遺物層がはさまっている。

2　図

現地実測図は森浩有，屋昭二，旭慶男，上村俊雄が担当し，土器実測図は河口貞徳，石器実測図は上村俊雄，旭慶男，多々良友博，平島勇夫，肱岡隆夫が担当した。

以上各図のトレスには森・屋を除く全員が当たった。

3　区画の呼称

第1地区～第5地区では「A．1，1」等と記述したものは「A．1グリッド第1包含層」の意である。

I　序　説

1.　遺跡の環境

大島郡瀬戸内町は奄美大島の南端にあり，大島海峡によって2分され，南に加計呂麻島・請島・与路島などがある。大島には長さ60Km，南部に幅が広く最大幅は約28Kmを示す。

山地は地層の走向に従って東北より西南に走り，北部はやや低平であるが南部に至るにしたがって山岳が重なりあい，絶壁となって直ちに海に入っている。本島最高峰の湯湾岳も南にかたより，大和村と宇検村の境にあって標高694mを示す。海岸線は水平的肢節に富み良港が多く，古仁屋港は台風時の避難港としても知られている。

嘉徳は瀬戸内町の北東部に位置し，大島海峡・伊須湾と並んでその北東に嘉徳の湾入があり，20戸余の嘉徳部落は湾頭の砂丘の内側に分布し，かつて80余戸を数えた屋敷跡が空地となった中に家屋の点在するのがみられる。部落の周辺は直ちに金川岳（528m）などの山地に囲まれ，外界から隔絶した孤立集落となっている（鹿児島考古9号，14頁付図参照）。

遺跡地は集落の南西端に当たり，嘉徳川の河口左岸，集落の背後を南流する小流が嘉徳川に合流する地点に形成された孤立砂丘である（第1図，グラビア参照）。

従来大島の先史時代遺跡としては宇宿貝塚が知られているほか，用貝塚，アヤマル遺跡，高又遺跡，ヤーヤ洞穴遺跡，ナビロ川遺跡，明神崎遺跡などがあるが，すべて北部に集中し，南部地域には遺跡の発見が見られなかった。ところが最近本遺跡の発見を機として，皆津貝塚，安脚場遺跡，与路遺跡などが続々発見され，今後も増加する形勢にあり，先史時代における南部地域の状況が次第に明らかになってきた。

大島の遺跡の中で嘉徳遺跡は最も古く発生し宇宿貝塚がこれに続き共に南九州との交易を行なっ

ており，アヤマル遺跡・ナビロ川遺跡・安脚場遺跡・与路遺跡等においても引き続いて弥生時代に交易を行ったとみられ，その痕跡が残されている。現在発見された遺跡はほとんど太平洋岸に分布し，種子島における先史時代遺跡の分布にも同様の傾向がみられる。

嘉徳遺跡においては南九州との交易の外に島嶼間の交通の痕跡もあって，奄美諸島が海上交通によって一つの先史文化圏を形成していたことの証左を与えている。（河口貞徳）

2. 調査の経過

嘉徳遺跡発見の原因は砂利採取業者による砂丘の採掘である。昭和４８年８月，採掘によって砂丘崖面に包含層が露呈し，遺跡の存在が判明した。瀬戸内町教育委員会は直ちに鹿児島県文化課に連絡し，文化課職員の視察を受け，更に昭和49年1月，県文化財専門委員河口貞徳を招聘して，嘉徳遺跡の調査を求め，その処置について意見を聴くところがあった。以上の経緯を経て瀬戸内町教育委員会は嘉徳遺跡の発掘調査を行なう事にし，県文化課に申請を行なった。

昭和４９年度文化庁並に県教育委員会の補助事業として瀬戸内嘉徳遺跡の発掘調査が決定し，昭和４９年８月３日より仝月１６日至る１４日間，河口貞徳を調査担当者として発掘調査を実施した。

調査団の構成は次のとおりである。

調査主体

瀬戸内町教育委員会

調査責任者

瀬戸内町教育委員会

　教育長　稲田忠孝

調査主任

　河口貞徳　鹿児島県文化財専門委員

調査員

　上村　俊雄　　ラサール高等学校教諭

　寿　　国一　　瀬戸内町中央公民館職員

　登山　　修　　瀬戸内町古仁屋中学校教諭

　旭　　慶男　　鹿児島大学法文学部学生

　多々良友博　　仝　　上

　平島　勇夫　　仝　　上

　肱岡　隆夫　　仝　　教育学部学生

　調査補助員

　古仁屋高等学校郷土研究クラブ学生４０名

連絡本部

　責任者

　誉田　原吉　　瀬戸内町教育委員会社会教育課長

担当者

森　　徹　　瀬戸内町教育委員会職員

森　浩有　　瀬戸内町建設課職員（測量担当）

祝　義輝　　瀬戸内町職員（車輌担当）

屋　昭二　　瀬戸内町職員（測量担当）

発掘期間中連日晴天に恵まれたが，一方南島の真夏の日射はきびしく，作業能率に悪影響を与え，加えて調査員はもちろん，補助員のほとんどが１７Kmを隔てた古仁屋から，町のマイクロバスと委員会のライトバンで，名代の悪路を通わなければ，他に交通の手段がないという条件のために，通常の場合よりも作業時間を短縮せざるを得ない状況であった。

一方限られた予算と期間に残存した全遺跡の調査を終了しなければ，残された遺跡の保存は困難であり，破壊されることは必死という客観情勢があった。

調査員は以上のようなきびしい条件のもとで調査を実施したが，調査開始後３回に亘って砂利採取業者の作業中止申し入れがあり，その都度，町および教育委員会が業者と協議しなんとか調査を続行することができた。

このような状況のもとでの調査であったから，調査に当られた方々の御苦労は容易に想像できるところである。それにもかかわらず諸々の悪条件を克服して調査を完遂されたことに深く感謝するものである。（河口貞徳）

Ⅱ　遺跡の調査

1.　遺跡総説（グラビア，図版第３，挿図第１図・第２図）

嘉徳遺跡は嘉徳川と集落の北側を流れる小川の合流点にあり，海岸砂丘を距てて汀線より１２５mに位置する孤立砂丘上に形成されている。砂丘は南北５０m，東西７５m，中等潮位よりの高さは調査開始の時点では，最高地点１０.９６mであるが，本来は今少し高かかったものと思われる。面積は約２５４２m^2あり，うち南側９７１.５m^2は砂の採掘によって削り取られている。

遺跡は砂丘の南西部分約$\frac{2}{3}$を占めていたものと推定されるが，砂の採掘によって半ば以上が削り取られたものと思われる。砂丘の現地形は砂の採掘によって生じた東北－西南方向の崖端が高く，約１１mを示し北西方向へ緩やかに傾斜し，また南西端では道路に沿って急斜面をなし，途中地すべりによって小断層崖を生じている（図版第３）。

調査は残存する遺跡の全面発掘を行なうこととし，砂丘上に繁茂する松・ソテツ・権木・カヤ・イバラなどの植物の除去を行なう一方，砂採掘によって生じた断崖の包含層調査と北東部に３ケ所のボーリングを行ない包含層の分布状況の把握につとめた。

砂丘上のジャングルは人力による除去はハブの害を受ける恐れもあり，非能率でもあるので

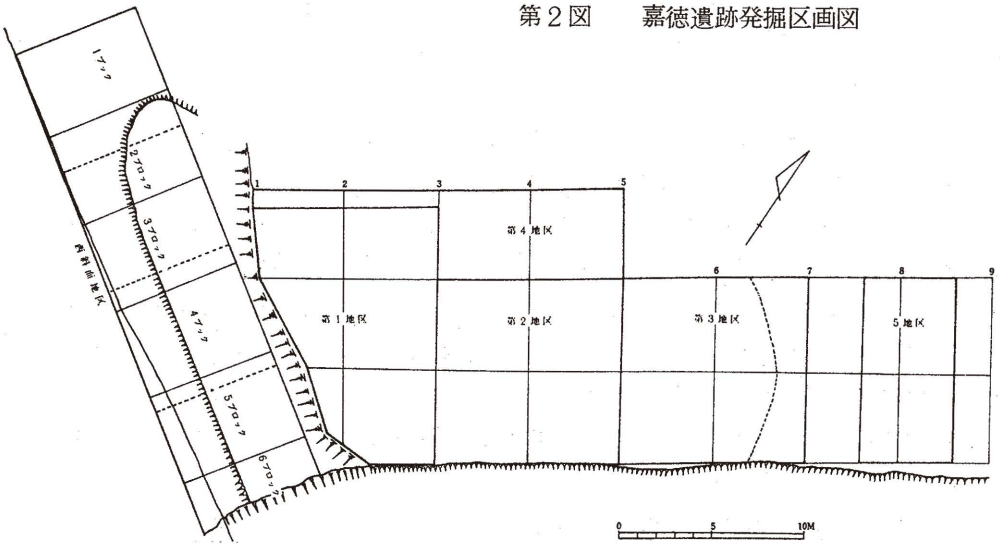
Pay－loader　を使用した。

ジャングルの除去途中で砂利採取業者のPay－loader使用の中止申し入れにあい，やむなく南西部道路沿いの急斜面に7×28mの調査区を設定し西斜面地区とした。これは遺物包含層の分布範囲を知る目的で行なったものである（第2図）。

調査は次のような編成によって実施した。

総　　括	河口　貞徳	
第 1 班	上村　俊雄	古仁屋高校生若干名
第 2 班	多々良友博	仝　　上
第 3 班	平島　勇夫	仝　　上
第 4 班	肱岡　隆夫	仝　　上
各班援助	寿　国一	登山　修　旭　慶男
平板測量	森　浩有	屋　昭二

第2図　嘉徳遺跡発掘区画図



砂丘上の植物と表層の無遺物層を約1mの深さまでPay－loaderによって除去した後，西斜面地区の調査結果等によって判明した遺物の分布状況と，地形に従って，第2図に示した5m区画の方眼状の地割を行ない，東北－南西方向の区分線を北からA・B・C・D線とし，北西－南東方向の区分線を西から1・2～9線として，両区分線によって区画された5m方区をA．1グリッド，A．2グリッド……，B．1グリッド……，C．1グリッド……等と呼ぶことにした。A．1，B．1，C．1，C．2の各グリッドは地形の制約があって変形となり，面積もせまくA．1グリッド＝24.2m²，B．1グリッド＝16.5m²，C．1グリッド＝5.175m²，C．2グリッド＝24.2m²となっている。

当初の各班の担当区を示すと，

第1班＝第1地区（A．1，A．2，B．1，B．2，C．1，C．2グリッド，但しA．1，

A．2は北側1m幅を除く）。

第2班＝第2地区（B．3，B．4，C．3，3．4グリッド）。

第3班＝第3地区（B．5，B．6，C．5，C．6グリッド）。

第4班＝第4地区（B．7，B．8，C．7，C．8グリッド）。

以上のようであるが，調査を進行した結果，第1地区，第2地区，第3地区では上部の遺物包含層（第1包含層と呼ぶ）があらわれたが，第4地区では第3地区との堺を約1m掘りさげてもなお遺物包含層を発見することができなかった。よって第4地区は発掘を中止し，A．1，A．2グリッドの北側1m幅，A．3，B．4グリッドを設定して第4地区をここに移し，第4班の担当とした。

第3地区においてもB．6，C．6グリッドの東よりの部分は，Pay－loaderで削った結果第1包含層は消滅していることが判明したので，第2図破線以東は調査範囲から除去した。したがってB．6グリッド＝13.8m²，C．6グリッド＝14.4m²の調査面積となった。

上部遺物包含層（第1包含層）は第1地区より第4地区にわたって分布し，面積は348m²，包含層の厚さは中心部で約140cm，周辺部では50～30cmである。この包含層は南から北へ向かってゆるやかに傾斜し周辺部とくに西南部へ向かってややつよく傾斜している程度である。遺構としては石組，焼土ケ所，ピット等がみられ，出土遺物には10型式以上を認めるが，主なものは宇宿下層式と呼ばれるもので数型式に分類される。

中部遺物包含層（第2包含層）は第1～第4地区には認められず，当初第4地区として上部遺物包含層（第1包含層）が認められなかったB．7，B．8，C．7，C．8グリッドの中央部に存在する。ここにあらためて第5地区を設定し，B．7，C．7グリッド側に2m幅，B．8，C．8グリッド側に3m幅の50m²の調査を行なった。包含層は南から北へ傾斜し，厚さは50～60cmあり，遺構には石組をもつピット，木炭のつまったピットなどがみられる。

第2包含層下にはB．8，C．8グリッドにまたがって下部遺物包含層（第3包含層）が小範囲に存在し，新型式の土器が発見された。

ちなみに西斜面地区の断層面に露呈した遺物包含層は上面が中等潮位より7.12mの比高にあって略水平をたもっており，第1包含層より1.69m下位にある。しかしこの包含層は砂丘内部へ延びず，直ちに消滅する。おそらく嘉徳砂丘の西南部に低平な尾根があってその上に形成された包含層の北端の残存部分であろう。この包含層の主要部は道路・畑地等によって消滅したものと思われる。出土遺物から見ても第1包含層の形成された時期より古いものではない。（河口貞徳）

2.　第1地区

第1地区は，西側（道路側）が，A1，B1，C1となり，それぞれに接して，A2，B2，C2となる。

包含層上面にやたらと石が多かったが，あるいは，後述する所の石組み遺構であったかも知れない。

以下，区画毎に1層上部について，主なものを述べていくことにする。

A1グリッド1層上部からは，面縄東洞式と思われるものが出土している。

施文方法は，全体的に左から右への押し引きが多いようである。

C1グリッド1層上部は，他のグリッドのレベルより1mほど落込んでおり，恐らく砂丘の末端にあるために，乾燥によって自然にずり落ちたものであろう。

B1グリッド1層上部とC1グリッド1層上部は遺物の出土は見られない。

A2グリッド1層上部において，50cm×57cmの大きさの平石があり，（中等潮位より＋893cm）周辺には，土器，礫等が見られた。

この区域は，地面が固く，焼石，木炭の出土が多い。

他に砥石，石斧，たたき石等が出土している。

B2グリッド1層上部においては，沈線文土器が多く見られる。口唇に沈線文をもち，口縁部に斜行沈線文を施したものがある。

面縄西洞式も出土している。たたき石を割ったものがある。

角礫が多く，火にかかったものがめだつ。

石斧の原材料と思われる石1点と礫を打ち割り，一面は自然面を残し，他面は打割った面をそのまま残して荒く造られた石斧2点がある。

C2グリッド1層上部は遺物の出土量が多い。土器には，口縁部にはりつけ凸帯のついたもの，はりつけ凸帯に文様を施文したもの，押し引き文，爪形文，沈線文や口唇部に沈線文のあるもの等が見られる。

また，把手のつく宇宿上層式もあるようである。

石器は，たたき石，石錘，石材（チャート？），軽石に凹みのあるもの等があり，軽石（中等潮位より＋904cm）は人間の顔をかたどっているようにも見える。

特異な石器として，用途不明であるが，丸く棒状に研磨した石器がある。惜しいことに半分に割れている。軽石の一面に研磨加工したものがあり，焼けている。

一部復原が可能と思われる厚ぼったい感じの土器がまとまって出土しているが，ススがついている。

いのししの歯が出土している。

東側断面を見ると，全体的に北側に包含層が厚く傾斜している感じをうける。

B2グリッドからC2グリッドにかけての断面には，かなり広範囲にわたって焼土，木炭混入層が厚く堆積しているのが認められる。この部分より，軽石が焼けてガラス状になったものが，二・三個出土している。

つづいて1層下部について述べてみよう。

A2グリッド1層下部　石斧（中等潮位より＋836cm）

B2グリッド1層下部　軽石加工品

C2グリッド1層下部　かごを編んだような形の文様をもつ土器（中等潮位より＋867cm）等が出土している。

C2グリッド1層下部のグリッドの南端に石斧が3本まとまって出土ゐた。すぐ近くからあげ底

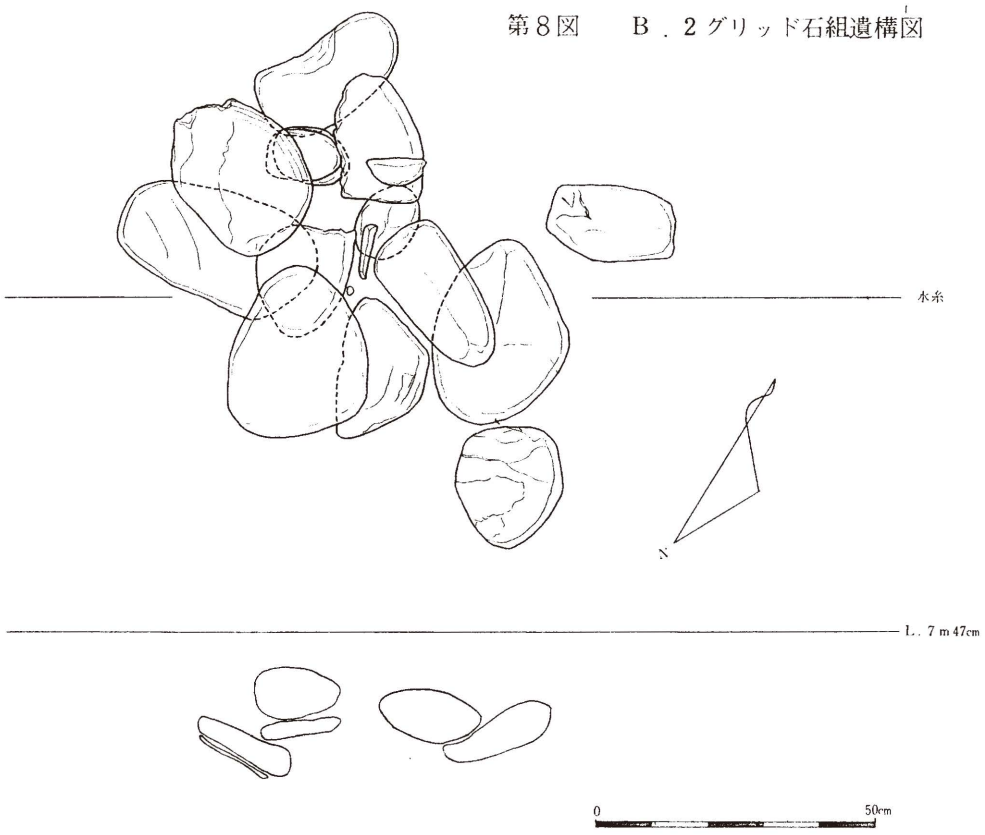
の底部にも文様を施してある土器が出土し，その土器をあたかも囲むかのように，４ケ所に方形の位置に角礫がおかれていた。地層図（第４図）で見るところでは，遺物包含層（地層図で２層）は厚さ６０cm前後である。焼土のある部分は，先に述べたものを合せて，２ケ所認められ，いのししの骨，歯等出土しているところから，調理の為に火を焚いた個所と見られる。

他に磨製石のみがある。

８月１２日，第１層下部上面包含層までPay－loaderで削る。中等潮位より＋７５０cm前後のレベルとなる。

Ｂ１グリッド１層下部には，石にススのついたもの，頸部に凸帯文，腹部にかけて沈線文を施文してある土器が出土している。

Ｃ１グリッド１層下部には，遺物は出土していない。



第８図　Ｂ．２グリッド石組遺構図

Ｂ２グリッド１層下部には，凹み石，石皿等が出土している。この区域より石組み遺構が発見されており，周辺の土は赤く焼け，木炭も混じっている。石組み遺構の中からは，丸底土器，いのししの歯，骨等が出土している。この区域から石組み遺構が２ケ所発見されているが，実測ずみのＢ２グリッドの石組み遺構（第８図）を見ると，１ｍ位の方形を呈し，大（３０cm前後），小（１０cm前後）の石１４個で構成されている。（中等潮位より＋７４８cm）。

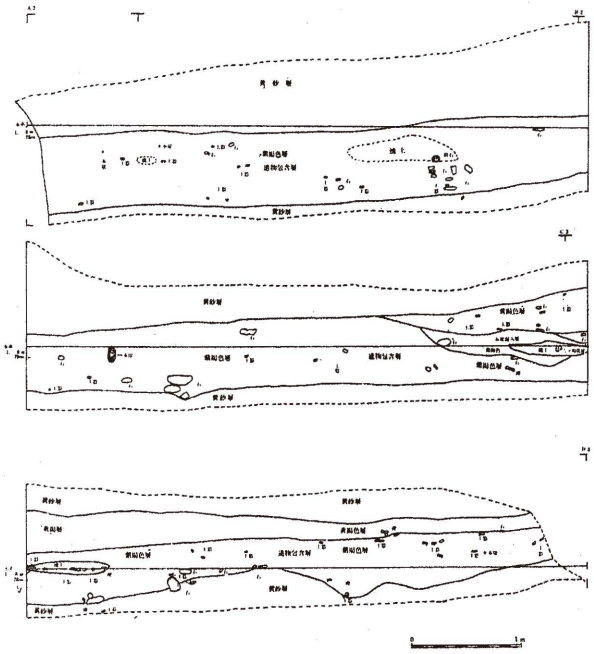
石組み遺構はいずれも火に焼け，骨等を出土しており，恐らく調理の為の施設として使用された

ものであろう。

C２グリッド１層下部より歯２点及び自然礫の一端を打ち欠き石斧の如き形態をしたものが出ている。

また，B１グリッド１層下部には，赤連，宝島大池出土のものもによく似たものが出土している。

第４図　第１地区　東 地 層 図



つぎに，第１地区の地層図（第４図）について述べてみよう。

第１地区地層図のレベルは，中等潮位より＋８７８cmとなっている。

第１層は黄砂層

第２層は紫褐色層

第３層は黄砂層　　となっている。

第１層は，Pay－loaderで排土しているため厚さは分らない。

第２層は，平均して７０cm前後である。

第１層と第３層の間に黄褐色層（厚さ１５cm～４０cm）が入りこみ包含層となっている。

第２層の一部に木炭混入の黒褐色層（長さ２２０cm，厚さ１０cm～３０cm）があり，その中に焼土層（赭褐色，長さ７５cm，厚さ１０cm）がある。（上村俊雄）

3.　第２地区

表土は，黄色砂層（無遺物層）までペイローダーによって削平されており，黄色砂層下の遺物包含層は，全体的に，北へ傾斜しながら厚くなってゆき，薄い所で５０cm，厚い所では１４０cm近くある。

土器類は，面縄東洞式土器片から宇宿上層式土器片まで見られるが，下部へ行くにつれて古い型

式の土器片の割合がふえるようである。自然遺物では，獣魚骨片が少量みられる程度であった。遺構は，石組遺構や礫群があり，他にブロック状に焼土がみられた。

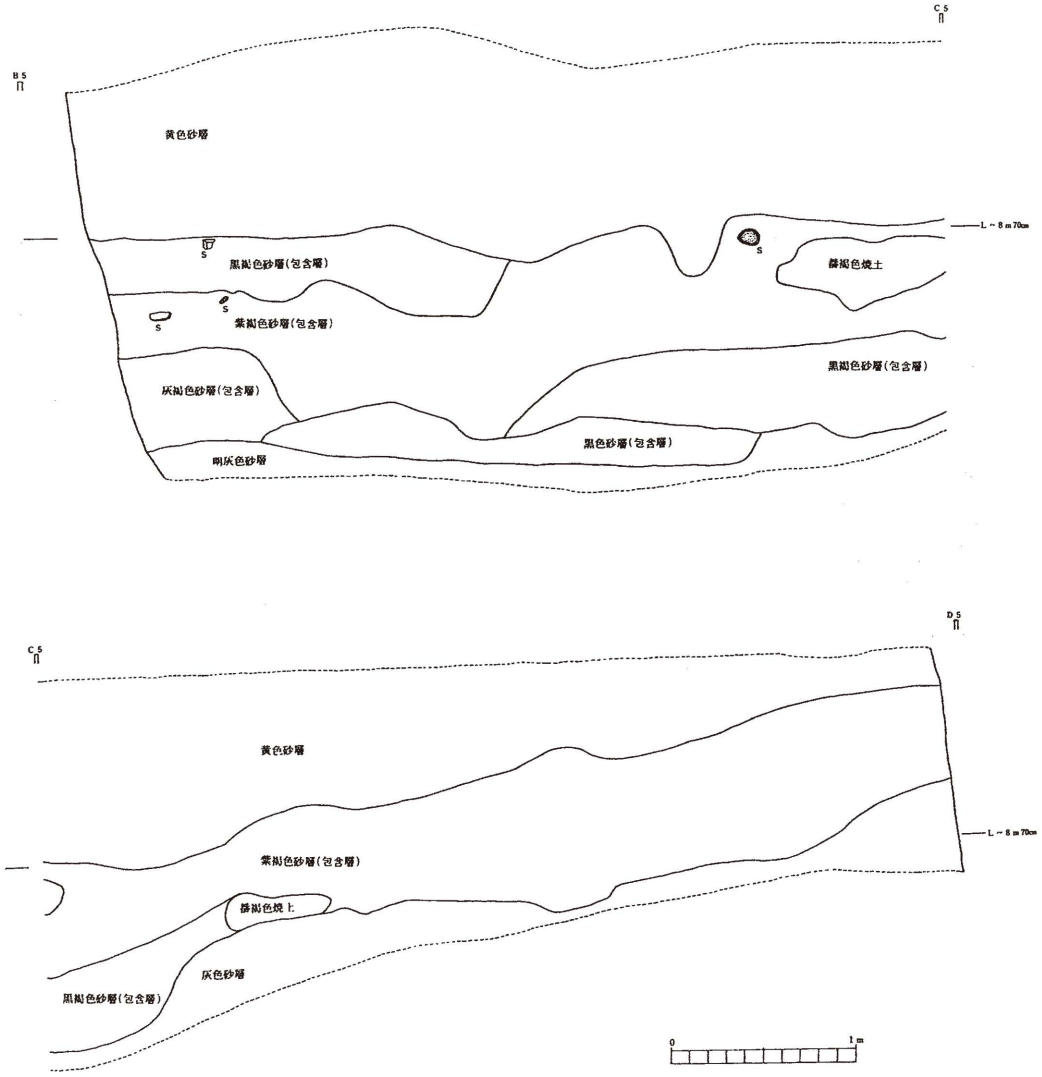
以下，各グリッドを順を追って説明する。

B．3グリッド

土器類は，面縄東洞式土器片から，宇宿上層式土器片まで出土し，包含層最上部において宇宿上層式相当のものと思われる，口縁部内が内外へ張り出した無文の土器片がみられた。石器類は，石斧，すり石，叩石，砥石，石皿が出土。石斧は，片面に礫面を残した打製石斧が多い。

自然遺物類は，獣骨片が最下部より出土。

第9図　第2地区　B．4グリッド石組遺構図



B４グリッドよりの所に，約６０個よりなる礫群がみられ，多くの礫は，赤く焼けたり，ススがこびりついたりしている。

B．４グリッド

土器類は，面縄東洞式土器片から，宇宿上層式土器片まで出土しており，さらに，市来式の影響を受けたと思われる土器片も出土している。

石器類は，石斧，石皿等と砂岩製の垂飾品が１個出土している。

ブロック状に赭褐色焼土が２カ所，木炭まじりの所が１カ所見られた。西隅に６６×４２cmの楕円形で，深さ５２cmのピット状に掘り込んだものの一部に礫３６個を積み上げた石組みが，さらに南隅の最下部でB．３グリッドにかけて，７０×４０cmの長方形に９個の礫を配置した炉跡があり，それより，北へ１mの所に２０×２０cmの円形に５個の礫を配置し，礫には，ススがこびりついており，その石組みの下にピットがあったが，特に遺物はみられなかった。また，最下，東南部で，C．４グリッドにかけて，８０×６０cmの長方形に約６０個の角礫よりなる礫群があり，さらに，その西側に，６０×５０cmの楕円形に約４０個の角礫よりなる礫部が見られた。ともに，礫は全て赤く焼けていた。

C．３グリッド

土器類は，面縄東洞式土器片から面縄西洞式土器片まで出土し，市来式土器口縁部破片が，包含層上部と包含層直下より，各１片出土した。

石器類は，石斧と円盤状石斧が出土した。

自然遺物類は，包含層下部より，獣骨片と板状に加工された骨片が出土した。

ブロック状に赭褐色焼土が３カ所，木炭まじりの所が２カ所，さらに，西隅下部で６０×４０cmに約２０個の礫よりなる礫群があり，その中には，焼けた獣骨片が見られた。

C．４グリッド

土器類は，面縄東洞式土器片から宇宿上層式土器片まで出土しており，B．３グリッドでも出土した口縁部が内外へ張り出した無文の土器片が出土している。

石器類は，石斧等が出土しており，最下部には，軽石が焼けてガラス状になったものがみられた。

自然遺物類は，イノシシの臼歯と魚骨片が出土した。

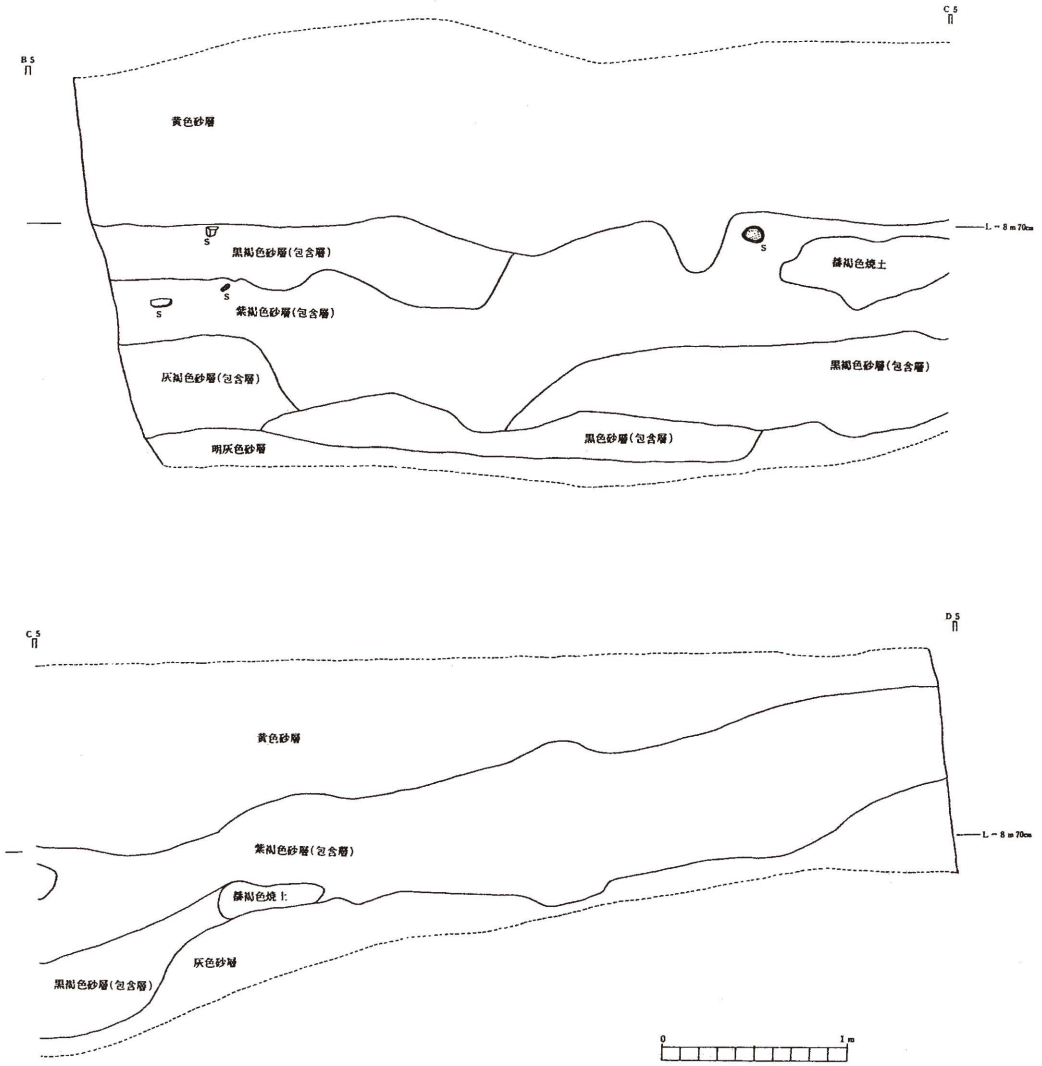
B．４グリッド　石組み遺構（第９図）

B．４グリッドの西隅にあり，紫褐色砂層中に掘り込まれた遺構である。径（推定）６６×４２cm，深さ５２cmの楕円形の遺構であり，その長軸にそった南西部に１０～２０cm前後の主として円礫３３個を積み上げ，その石組みの最下部に，長さ１２～１６cmの扁平な角礫３個が配石されていた。

遺構内の上部は，赭褐色の焼土で，下部は木炭が多量に混入しており，石組みを構成する各々の礫の間には，ビッシリと木炭がつまっていた。

この遺構において，火を用いたことは，確実と思われるが，その性格については，不明である。

第５図　第２地区東地層図



表層は，黄色砂層（無遺物層）まで，ペイローダーによって削平されている。

遺物包含層の上面は，Ｂ．５点で中等潮位より８７０cm，Ｃ．５点で８７８cm，Ｄ．５点で950cm，その下面は，Ｂ．５点で７５０cm，Ｃ．５点で７７０cm，Ｄ．５点で９０５cmである。遺物包含層は，Ｄ．５点よりＣ．５点へかけて，北西へ向かって傾斜し，Ｃ．５点よりＢ．５点にかけて厚さをまし，ほぼ水平に北西の方へ伸びてゆく。

遺物包含上部の紫褐色砂層は３０～９０cm。紫褐色砂層中に２カ所の赭褐色焼土がみられる。Ｂ．４グリッドでは，紫褐色砂層上に２５～３５cmの黒褐色砂層。紫褐色砂層下に５０cmの灰褐色砂層，また，５０cmの黒褐色層がある。さらに，その下に１５～３０cmの木炭まじりの黒色砂層。最下の明灰色砂層は無遺物層と思われる。（多々良友博）

4. 第3地区

第3地区はB5・C5・B6・C6グリッドで砂丘のほぼ中央に位置する。南から北へかけて傾斜し，西から東へも少し傾斜している。

第3地区における層位は，第1層黄色砂層（攪乱層），第2層紫褐色砂層（包含層），第3層黄褐色砂層となっている。

第1層は場所によって2m以上の厚さに達する所もある。多種多様の土器片が出土するが量的にはあまり多くなく小片ばかりである。自然的・人工的攪乱をうけてもとの形はとどめておらず，もちろん遺構も全く見あたらない。

第2層は厚さ0.31m～0.83mをなし北側の方がやや厚い。表土面と同様に傾斜しており，C5と，C6ぐいからB7ぐいにかけては特に急になっている。しかし南端と北端とは0.82m～1.35mの比高差をもち，全体の平均傾斜角は7度前後である。

包含層になると遺物の量ががぜん増加する。土器は量的増加にもかかわらず依然小片が多く，ピット内土器を除き完形品は見あたらない。口縁部はやや外反するものがほとんどで，平担口縁と波状口縁，上から見た時口縁がまるくなるものと四角になるものとの両方が出土している。底部は平底が主で丸底もいくつかある。特徴的なものとして，土器の破片を利用した土製円板が2個，修理穴のある土器片が数片出土している。

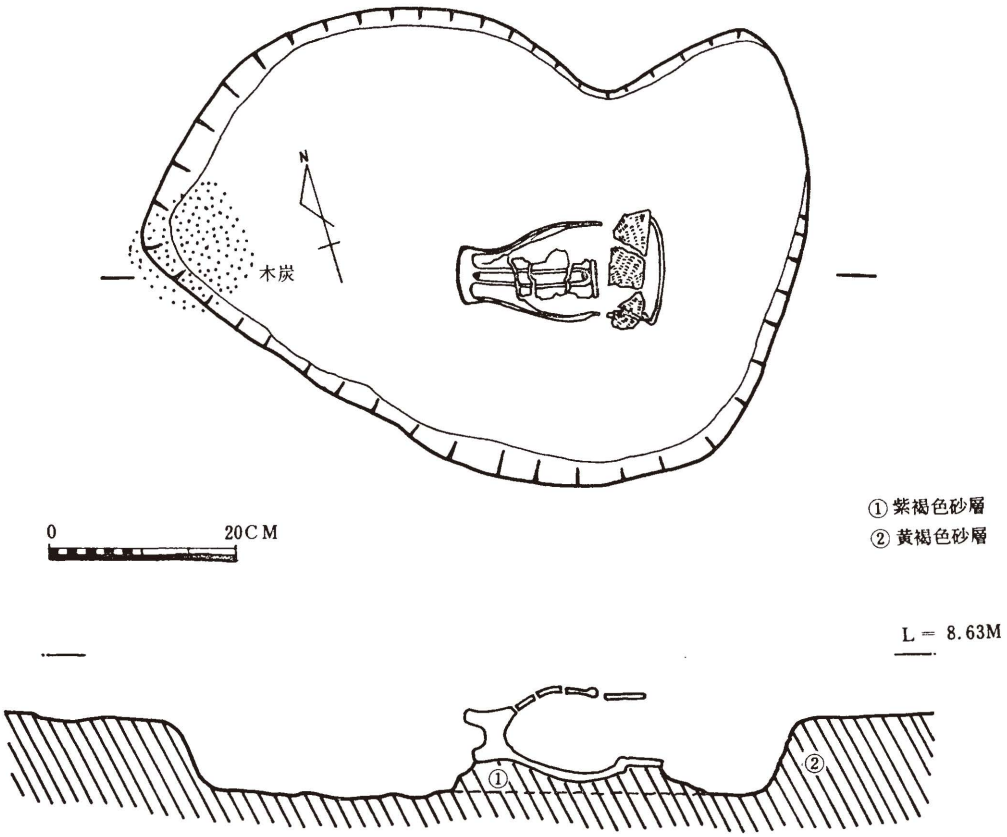
石器は石斧と磨石である。石斧は丸石を打ち欠き片面は自然面，もう一方の面は凸凹の礫面を残したものが多い。なかには凸凹の礫面を磨っているものもある。磨製石斧もB5より出土している。磨石はほとんど破片として出土し，その量も多い。

遺構としては石組み，焼土，ピット内土器をあげることができる。

石組みはB5で出土したもので，大2個小12個の角礫が不規則な形をなしている。石も焼けておらず何の意味があるのか不明である。ただこの石組みの中から把手（とつて）らしい中空の土器片が出土している。

焼土はC5で1ケ所，B5で5ケ所みられた。C5の焼土は長径1.17mのだるま形で深さも0.11mあったが，B5の焼土は形も小さく厚さも薄い。焼土のまわりには炭化物が多く土器の小片がみられるものもある。

第１０図　第３地区Ｃ５グリッド１層下部ピット図

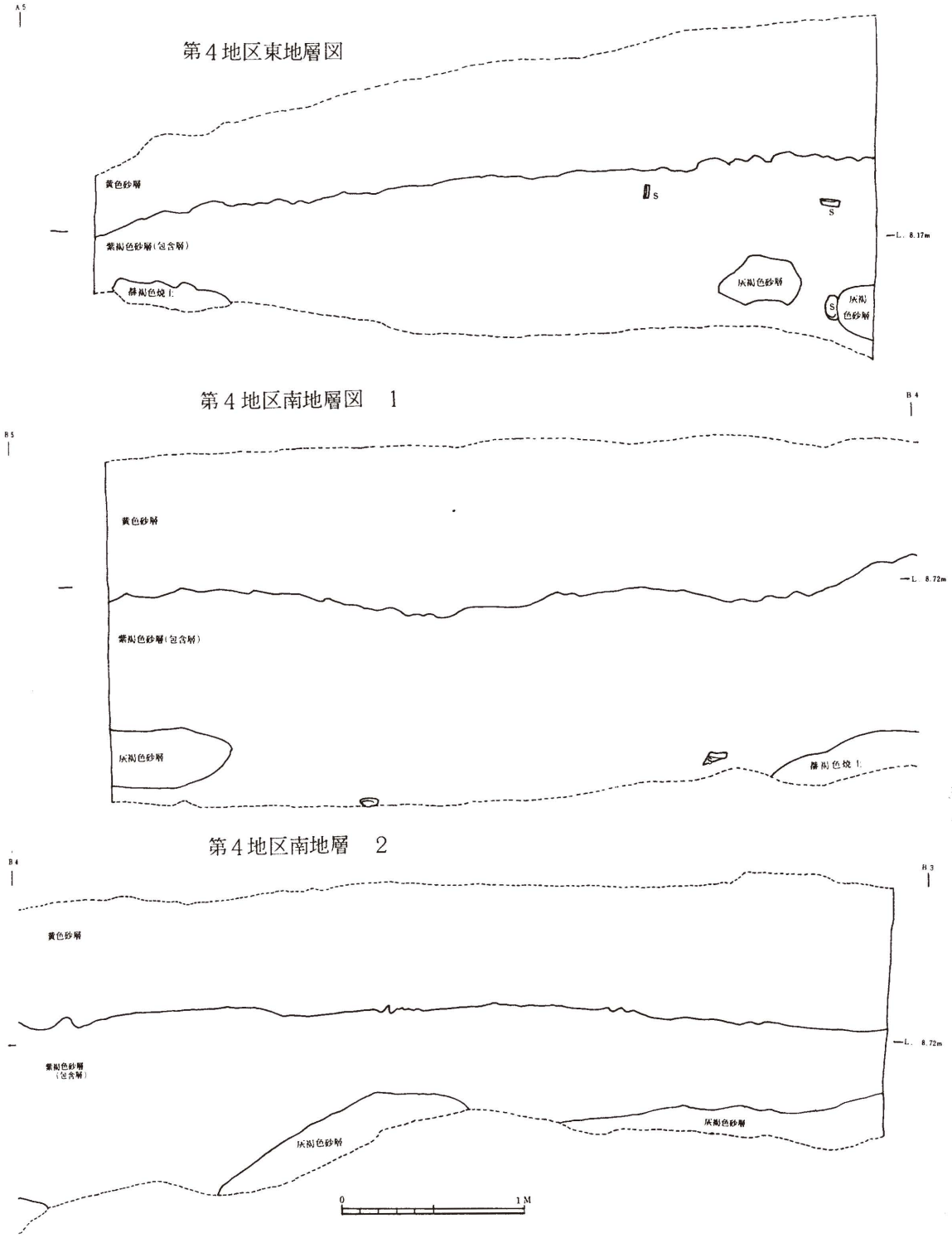


二重口縁をもつ特殊な土器はＣ５にてピット中より出土した（グラビア第１０図）。ピットは長径７０.７cm，短径４１.６cm，深さ8.６cmを計り包含層最下部において第３層を掘り込んでいる。土器は横だおしの状態でピット床面より約１cm浮いている。しかし土器がピットの中央に位置し，真横になって出土していることからピットが掘られた時期と土器がおかれた時期は同じと見てよい。まわり（特に西側）は炭化物が多いため砂がまっ黒になっている。この土器は外反・内反するふたつの口縁をもち，土器内部より外部にあいた穴が胴部を下る溝へと通じ，　あげ底の下にあいた穴へと続くため特別な意味があったと思われるが，他に例を見ないので何とも言えない。（平島勇夫）

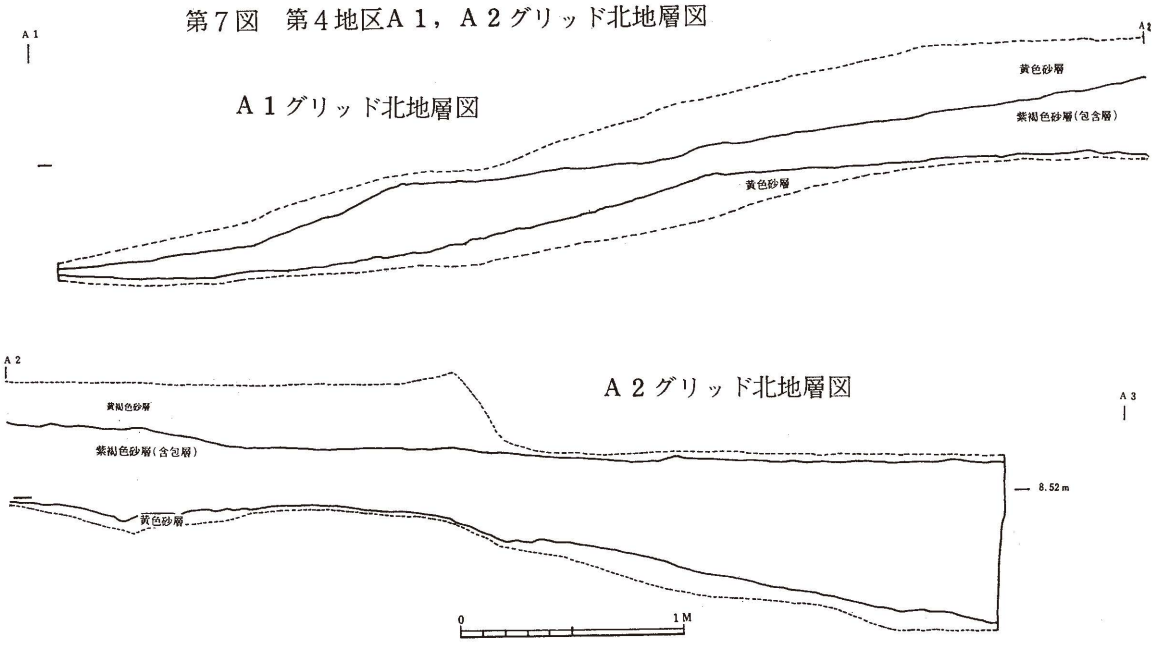
5.　第４地区

調査区はＡ１・Ａ２グリッドの北側１m幅とＡ３・Ａ４グリッドである。他地区の包含層の拡がり具合を確かめた時点で設定した。発掘したのはＡ１・Ａ２グリッドではその北側部分に遺構らしき石組が出土した為，またＢ３・Ｂ４付近での遺物の出土量の多いことから遺跡の中心部分であろうと考えられたので，その北側のＡ３・Ａ４を発掘することになった。

第６図　第４地区地層図


A 5
第４地区東地層図
黄色砂層
S
S
紫褐色砂層（包含層）
L. 8.17m
灰褐色砂層
S
灰褐色砂層
第４地区南地層図　1
B 4
B 5
黄色砂層
L. 8.72m
紫褐色砂層（包含層）
灰褐色砂層
暗褐色焼土
第４地区南地層　2
B 4
B 3
黄色砂層
L. 8.72m
紫褐色砂層（包含層）
灰褐色砂層
灰褐色砂層
0
1 M

第７図　第４地区Ａ１，Ａ２グリッド北地層図



層位（第６・第７図）

表層は黄色砂質であるが，他グリッドと同じ様にかなりの厚さである。風の影響による季節的な変化も考えられる。発掘時点では海浜性の植物や黒松の低木，その他雑草が著しくはびこっていた。

層位は全域において攪乱されず整然としていた。Ａ３グリッドは西側に向って傾斜しているがＢ３グリッドではほぼ水平な層をなしている。ペイローダーで削られた表地面はこれらの層と同様な起伏をしていたものと考えられる。

第２層は紫褐色の砂質で包含層である。約３０～５０㎝の厚さで，表層と同じような傾斜をなしていた。表層では少なかった礫が多量に出土した。礫の大きさはこぶし大が殆であった。この礫は第３層無遺物層になると少なくなる。

包含層中には，赭褐色の焼土らしきものが所々出土している。

第３層は無遺物層である。第２層の下部に１０㎝～２０㎝の厚さで，第３層とは若干違った土質の層があった。この層は所々にあったが第３層に含めた。第３層は黄色砂質である。この第３層をさらに掘り下げて第２の包含層を確認しようとしたがこの地区では確認できなかった。

Ａ３グリッドの第２層包含層より約３０個の円礫・角礫をならべた半円形の石組が出土した。この石組は６０㎝×８０㎝の径を持ち，人為的に置かれた遺構であると考えられる。殆の石には顕著なカーボンの付着が見られ，一部には火熱を受けた痕跡のあるものがあった。石の大きさはこぶし大から直径１５㎝程のものまでで，大体同じような形をしている。

この他に，石組の所よりＢ４グリッドに出土した石組にかけて幅１ｍ～２ｍの帯状の焼けた土が発見された。その厚さは石組付近で約２０㎝の厚さをもち，赭褐色をなし，焼きしまって固くなっており，他の層の砂質と違い砂粒が小さい。この焼土は半円形石組と共にＢ４グリッドのＡ４区境側から出土した石組にも関係あると思える。

石組・焼土の付近，特に石組内から，厚さ２０cmにわたって炭化物を発見した。

これらのことから，石組は調理場ではないかと推測した。石組のほぼ中央部では，嘉徳Ⅱ式土器が底部を上にした状態で発見された。ほぼ完形に近いもので，胴部から頸部にかけての一部分は火熱のためか非常にもろくなり，小片化したところもある。

石器はＡ４グリッドから長さ１１.５cmの完全磨製の石のみ型石斧が出土した。焼土面から出土したので嘉徳Ⅱ式土器と同時期のものと考えられる。

以上のことからこの石組を含む焼土面は当時の生活面の一部であったと考えられる。（肱岡隆夫）

6. 第５地区

Ｂ７グリッド～Ｂ８グリッド，Ｃ７グリッド～Ｃ８グリッド（５m×１０m）のグリッドを設定した。Ｂ７グリッド～Ｂ８グリッドにおいて，北方向に相当傾斜している。

遺物の出土状況は，非常に良好である。

Ｂ７グリッド２層～Ｂ８グリッド２層に石組みが見られたが，他の個所で見られたような，焼土，Pit 等は見られなかった。

この区域の北端かどにおける包含層（第２層）の厚さは４０cmである。

Ｂ８グリッド２層に市来式の口縁部がまとまって出土した。南東壁に磨製石斧が出土しているが，一度つぶれた刃を再度研いで再生した痕跡がある。

この区域には焼土２ケ所，獣骨２ケ所が発見されている。Ｃ７グリッド２層との境の杭のすぐ下から甕型の面縄西洞式系統の土器が包含層下部に出土している。

Ｃ７グリッド２層上部には，径６０cm前後にわたって焼土，木炭が見られた。

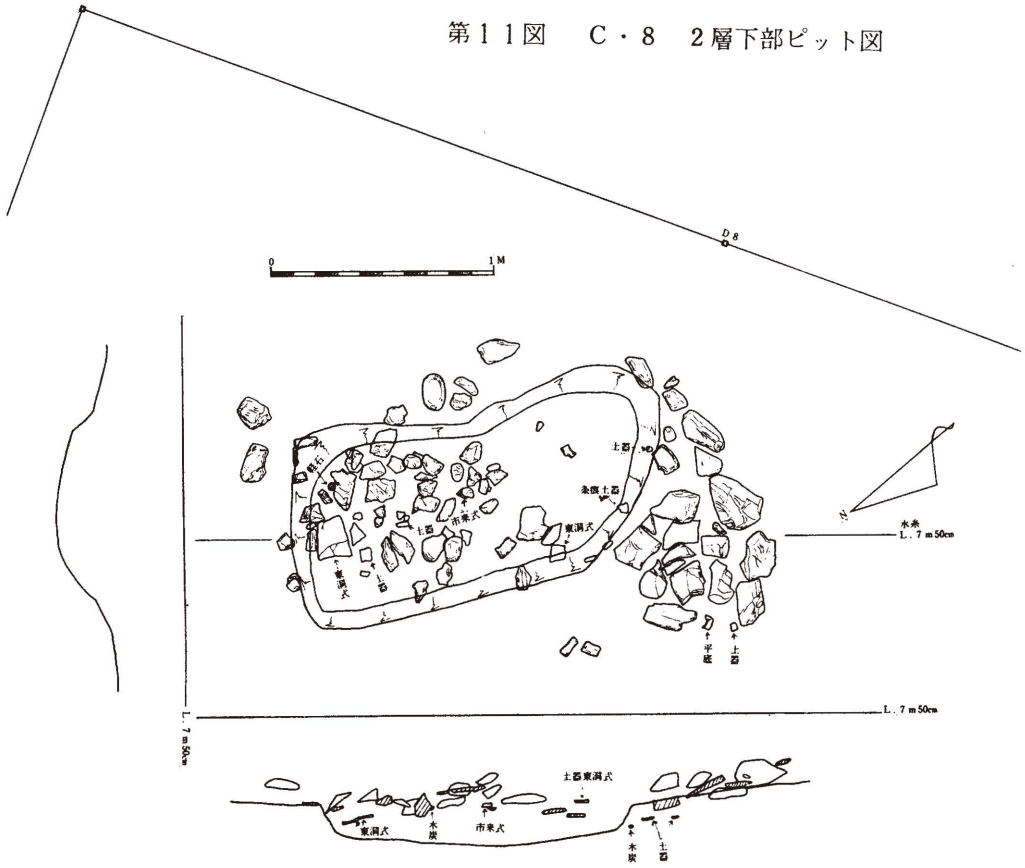
以下，Ｃグリッドより出土したものを列挙する。（　）内の数字は，中等水位よりのレベルを示す。

焼軽石（７２９cm）　焼土（７３４cm）　木炭（７３４cm）　スリ石（７３７cm）　たたき石（７４６cm）　平底の土器（７２７cm，７３０cm）　爪形沈線文土器（７３１cm，７３５cm，７４５cm，７５２cm）　補修孔を有する爪形沈線文土器（７１０cm）　沈線文土器（７２０cm，７４１cm，７５０cm）　押し引き文土器（７１８cm，７２５cm）　押し引き沈線文土器（７２０cm）　鋸歯沈線文土器（７１４cm）　面縄東洞式土器（７２７cm，７３８cm）　縄文式土器（７１７cm）

Ｃ７グリッド２層の主なものをあげたが，その中でも注目されるのは，補修孔のある爪形沈線文土器，縄文式土器かと思われるもの，沈線文に共伴して凸帯に爪形のある面縄東洞式等がある。

Ｃ８グリッド２層より出土したものとして，砥石（７３５cm）すり石（７２７cm）爪形文土器（７２２cm，７２６cm，７３０cm）　格子沈線文土器（７３７cm）　かごを編んだような文様の土器（７１４cm，７２０cm，７３５cm，７３８cm，７４４cm）　荻堂式土器類似のもの（７２７cm）山形口縁土器（市来式の影響かと見られる＝７４２cm）　三角凸帯のついた沈線文土器（７３４cm）などがある。

第１１図　Ｃ・８　２層下部ピット図



Ｃ７グリッドからＣ８グリッドにかけて，大部分はＣ８グリッドにかかっているが，長方形状の礫群があり，その下に不整形のピット（第１１図）があった。

ピットは，一方が長方形を呈し，他方が円形状を呈している形となる。

最長の部分をとれば，外径は１８５cm，内径１６５cmとなる。巾は外径８５cm，内径６５cmである。ピットの深さは２６cmである。

ピットの床面は，中等潮位より６９３cmである。礫群は火に焼け，木炭等が付着しており，遺構中に市来式と面縄東洞式がほぼ同じレベルにあり，両者の共伴関係を知る貴重な好資料となった。

２層出土の土器は，沈線で枠をつくり，その中に爪形沈線文が施文されているものが多い。また市来式の器形によく似たものがあり，市来式の影響をうけていることも考えられる。遺物の出土量は少ないが，内容的にすぐれたものが多い。

Ｂ８グリッド，Ｃ８グリッドの一部に（地層図をとるためにほり下げたため）２層の下に，紫褐色の第３包含層を確認することができた。市来式土器の出土層位（２層）よりも下に完形に近い土器が出土しており，奄美地方における最古の土器の出土例となった。

Ｃ８グリッドにおいて，推定径２m強の隅丸のピットが発見された。深さは約３０cm程である。

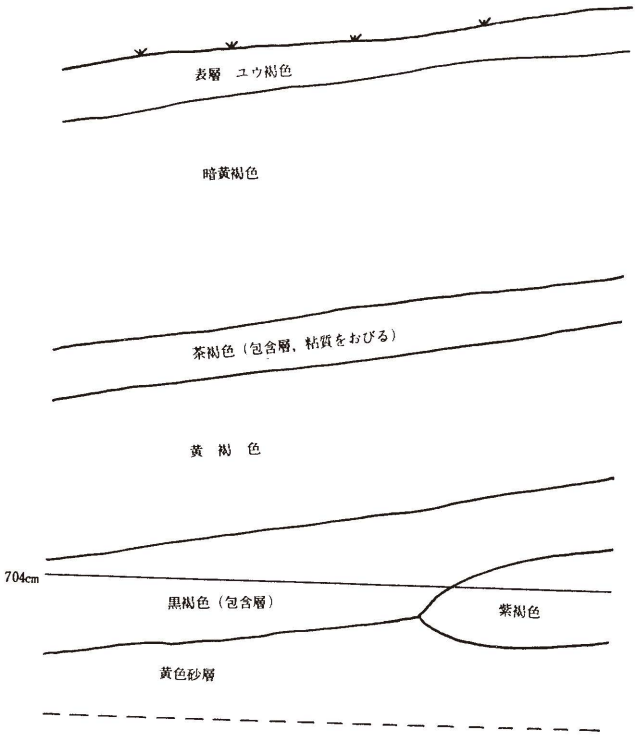
（ピット上面は中等潮位より６９７cm，下面は中等潮位６６８cmである）　このピットの中に，無遺物層に第３層が落ちこんで，ほぼ円形に近い皿状のおちこみがみられ，木炭がつまっていた。

この皿状のピットは，４８cm×４６cmの径を持ち，深さ２０cmである。皿状ピットの上面は中等潮位より６６８cm，下面は６４８cmである。

あるいは，住居址であったかも知れない。

いろいろな事情から，住居址か否かを明らかにし得なかったのは心残りである。

第４表　　Ｂ８，Ｃ８グリッドの北東側地層図（略図）



第五地区の地層図は，土砂が崩壊したために，一部分のみ略測している。（第4表）

表層は紅褐色を呈し，２７cmの厚さをもつ。

第２層は暗紅褐色を呈し，厚さ１２２cm。

第３層は茶褐色を呈し，厚さ２５cm，粘質を帯びており，遺物包含層である。

第４層は黄褐色を呈し，厚さ８４cm。

第５層は黒褐色を呈し，厚さ56cm。遺物包含層である。

第６層は黄色砂層となっている。

なお，第３層直下より１１cm下は，中等潮位より７４０cmであり，奄美最古の土器を出土した層は，第５層の黒褐色層と第６層の黄色砂層との間に紫褐色の包含層として入りこんでいる。

（上村俊雄）

7. 西斜面地区

調査概要とⅥブロック・Ⅴブロック４mの調査

砂利採取業者の妨害があったために，遺跡全域の区域設定が出来なかった。そこで町教委と砂利採取業者との話し合いがつくまでの間，道路側に遺物が出土しているところから，道路に沿った傾斜面を区画割りした。

北より南に向って２８.０mの区域を設定し，Ⅰブロック～Ⅵブロック（５m毎に区画割り，Ⅵブロックのみ３m）とした。

４等分して南より１班，２班，３班，４班の順に担当して調査に当たった。

雑草，ソテツの根等が繁っているために，ナタガマで払う作業からとりかかった。

砂丘の末端であったためと思われるが，包含層が傾斜している所，あるいは砂丘であるために道路側に崩れやすいところから段落ちしているところもある。

砂利採取によって砂丘南側に露出している断面から見ると，砂丘の末端に近い部分で，上層・下層の包含層のいずれも，西側（道路側）に向って急傾斜している。

特に上層の南寄りの部分は段落ちしている。

従って，遺物の出土状態は良好ではない。

南側断面に露出していた下層の包含層は，第１地区～第５地区では，相当深く掘り下げて調査したにもかかわらず，見当たらなかった。恐らく，砂丘末端部のみに残存していたものであり，砂丘内部には存在しなかったと思われる。

この地区に出土したものは，尖端を研磨した石斧，沈線を施した土器，ホソスジテツボラ貝が目立つ程度である。

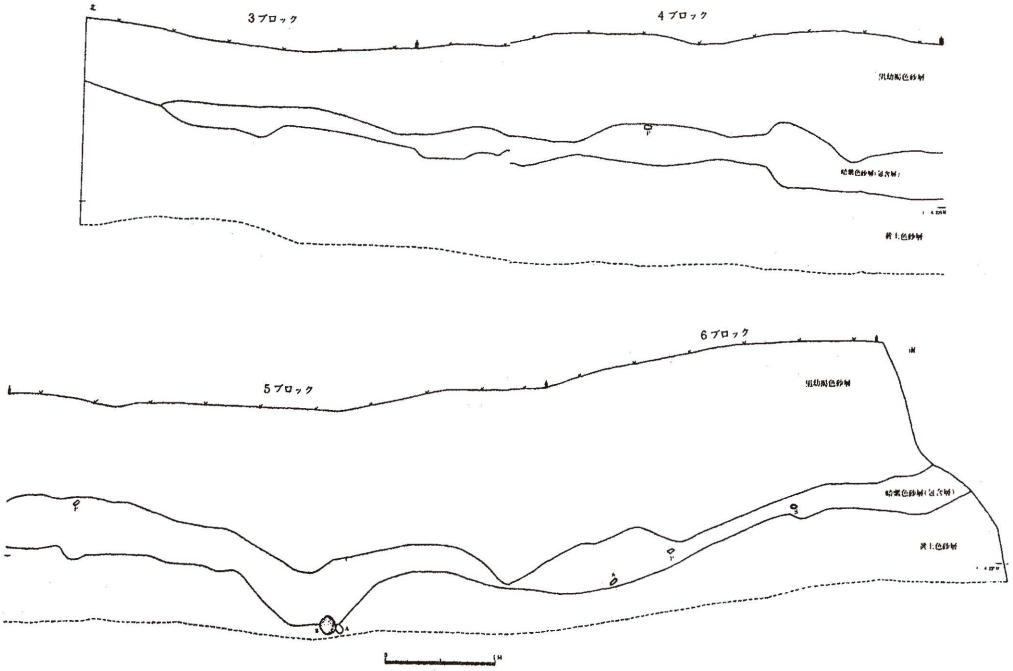
セクションペーパーがなく，道具類や人夫の不足，Pay－loaderが動かない等の悪条件が重なり，３日目も全体の区画設定ができなかった。

嘉徳小学校の好意でセクションペーパーを入手し，西斜面地区の地層図を取り得たに過ぎない。

（上村俊雄）

第３図　　西斜面地区　地層図

A　石　斧
P　土器片
S　石



西斜面地区地層の調査（図版第３・第３図）

層位はわりあい明瞭で，３層に分かれる。砂丘地のため南から北へ傾斜しており，表土面はⅣブロック北端ぐいでは，Ⅵブロック南端ぐいより0.５４ｍ下がっている。

第１層は褐（ゆう）色砂層で，厚さは0.５７ｍ～1.４６ｍ。樹根，特にソテツの根がビッシリつまった様になっており，自然的攪乱をうけているのは確実である。

第２層は暗紫色砂層。遺物包含層で，ところどころに遺物が露呈している。厚さ0.０５ｍ～0.52ｍ，長さ１6.１４ｍでⅢブロックのまん中あたりで切れる。この層はⅤブロックまで一度下がっているものの，両端は同じ高さである。ほかの二層と比較すればわずかに粘質をおびる。

第３層は黄土色砂層で，最後まで掘っていないため厚さは不明だが掘った限りでは最大1.２８ｍをしめす。樹根はこの層までかなり見られる。

三層とも砂質のため非常にもろく，陽にあたるとすぐ乾き，さらさらとくずれおちる。Ⅲブロックのなかばで包含層が切れていたのでそれより北の方は図をとらなかったが，表土面は傾斜し，褐色砂層と黄土色砂層の区別はつきにくく淡褐色に近い色となる。（平島勇夫）

Ⅴブロック１ｍ，Ⅳブロック・Ⅲブロック１ｍの調査

表層の樹根の下には，ソテツの枯葉が，数センチ堆積している。

土器類は，嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式，面縄前庭式土器片が採集された。

石器類は，磨石・敲（たたき）石等が採集された。（多々良友博）

Ⅲブロック4m,・Ⅱブロック3mの調査

ⅡブロックよりもⅢブロックの方が土器の出土が多く，特に北よりⅢブロック3mのあたりが多い。石器も同じくⅢブロックの方がやや多く出土する。

土器は小片が多くさまざまな形式のものが出土するが，特に嘉徳Ⅰ・Ⅱ式①が多い。底部として平底の破片が出土している。石器は打製石斧と磨石が出土している。特に磨石は多く，大部分が破片である。有肩石斧も出土している。（平島勇夫）

Ⅱブロック2m・Ⅰブロックの調査

ここは道路整備によってけずられた部分に上部から崩れた砂やソテツ等の葉根が堆積してできた段丘状の北側部分で，弧をえがいている。

調査の主要目的は包含層の確認であったが，ここではそれらしきものは検出されなかった。部分的に薄く他ブロックで検出された包含層と同じ砂質のものが見られたが，これは崩壊した砂の一部であろう。

遺物は，嘉徳Ⅰ・Ⅱ式の口縁部等10数点，その他平底の底部が採集されたが，量的には多くはない。石器に関しては，石斧1点，凹石，磨石（うち敲石にも使用したもの1点）がわずかに採集されたにとどまった。（肱岡隆夫）

注①　河口貞徳　「奄美における土器文化の編年について」　鹿児島考古第9号　1974年6月

Ⅲ　遺物の調査

1. 土　　器

嘉徳遺跡の調査面積は第1地区110m²，第2地区100m²，第3地区78m²，第4地区60m²，第5地区50m²，計398m²であり，西斜面地区は包含層が丘砂内で直ちに消滅していたために包含層の検出度にとどまったが，西斜面地区の196m²を加えると発掘総面積は594m²となる。

遺物包含層は上部，中部，下部の3層があり，上部の第1包含層（第1層）は南から北へ向かってゆるやかに傾斜し，地表から包含層上面までの深さは南端で約1.5m，北端では80cmである。

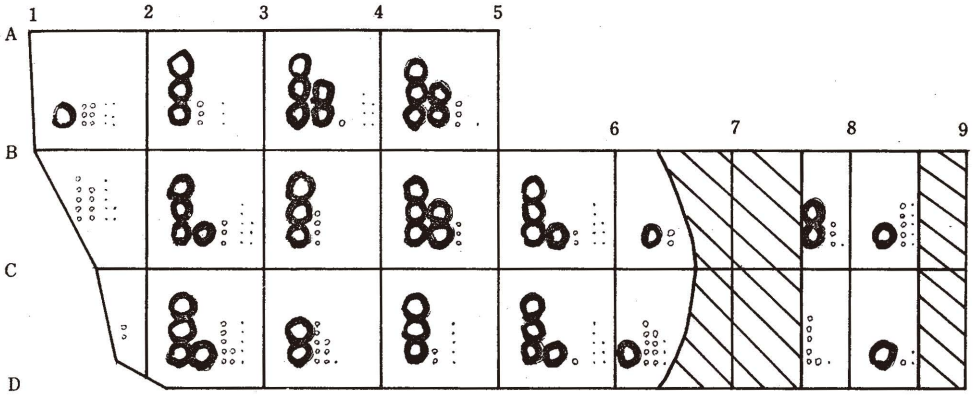
中部の第2包含層は地表の傾斜と同様に南から北へ向って傾斜し，地表からの深さは包含層上面まで，南端で3.4m，中央の凹所で2.6mである。

下部の第3包含層は第2包含層下に接して分布し，範囲はせまい。

遺物の出土状況は第1表に示すとおりで，A．3，A．4，B．4グリッドが最も多く，中央やや西よりに集中する傾向を示している。

第１表　グリッド別　土器出土数

◯＝ 100　○＝10　・＝1



出土土器は１５型式に分類され層位別の出土状況は第２表に示すとおりで，各型式が各層において共伴出土している。この現象は地層図によっても明らかなように後世の攪乱によるものではないが，各型式が同一時期に属することを示すものでもない。各型式が共伴する現象は砂丘遺跡の特徴であって，琉球列島，奄美諸島の砂丘遺跡においては広くみられるところである。その原因は二つあるものと思われる。その一つは無作為の人為である。砂は歩行によって容易にえぐられる。先史時代の生活が継続して長期に行なわれた場合に，より古い遺物層がより新しい時代の人々によって攪乱され，新しい物と混合する度合は他の粘質を有する土壌の場合よりはるかに大きい。第二は自然的原因である。砂丘は風力によって堆積し，また削剝される。これも新旧の遺物を混合させる大きな力をもっている。

第2表　グリッド別土器出土頻度表

グリッド・層位		土器型式	面縄東洞式	嘉徳Ⅰ式A	嘉徳Ⅰ式B	凹線文土器	嘉徳Ⅱ式	面縄西洞式	面縄前庭式	素文土器	喜念Ⅰ式	宇宿上層式b	類市来式	赤連系土器	市来式	兼久式	嘉徳式	底部平底	底部丸底	計		
A．1，1層		上部	4	29	2	6	49	21	2	3								7	1	124	166	
		下部		15		2	18											7		42		
A．2，1層		上部	5	58	11	1	79	19	3				1					27	1	200	339	
		下部	11	27	1	11	58	4	6									20	1	139		
A．3，1層		上部	6	18	2	18	51	14	3	1								22		135	517	
		中部	6	62	19	16	125	58	2	1	1	6						34		330		
		下部	12	4	3	9	13	1	3									7		52		
A．4，1層		上部	11	110	21	25	206	66	1	3	3	5						67	1	519	531	
		下部		2		1	5	1		1								2		12		
B．1，1層		上部		4	7		15	1		1								1		29	97	
		下部	3	12	8	6	25		6	1				1				6		68		
B．2，1層		上部	1	25	10	1	34	22	1			2						7	1	104	438	
		中部	8	11	6	1	33	16	1									10	8	94		
		下部	18	66	16	12	72	16	9	1		2	2					25	1	240		網代底　1
B．3，1層		上部	10	40	11	11	63	40	7	2	1	1						25	1	212	340	
		下部	15	20	2	8	48		11	2								18	4	128		
B．4，1層		上部	17	58	8	20	95	42	3			7			1			38		284	530	
		下部	43	33	12	32	70	5	15	1					1		1	32	1	246		
B．5，1層		上部	4	51	15	30	68	11		3	2	4	1					25		214	428	中空把手　1
		下部	25	21		71	44		20	1			2					30		214		土製円板　2
B．6，1層		上部	2	13	5	6	16	5	1			2				1		11		62	120	
		下部	3	8		15	9	1	6	1								15		58		
B．7，2層		上部	25	21	11	24	49	2		1			1				2	13		149	231	
		下部	21	6		24	11						1					19		82		
B．8	2層	上部	5	4	4	5	19	6	4	1		1	3					4		56	155	変化凹文　1
		下部	18	6	3	17	21	1	2						1			18		87		縄文後期　1
	3層		1	1	2	1	1		1								1	4		12		
C．1，1層		上部		3	4		4											4		15	21	
		下部						1	4										1	6		
C．2，1層		上部	2	43	22	9	44	4		2		1						20		147	475	
		中部	7	21	29	14	51	12				3						29		166		
		下部	15	32	2	30	61		2						1			19		162		
C．3，1層		上部	3	33	11	16	86	28	1			4						28		210	281	
		下部	6	10		13	15		16									10	1	71		
C．4，1層		上部	6	24	5	3	59	11	3	2		3						11		127	325	
		下部	25	31		45	32	11	20	2	1	3						27	1	198		
C．5，1層		上部	7	32	10	6	102	82	1	1		11						26		278	418	
		下部	18	23	3	33	39	4	6			1	1					12		140		土製円板　1
C．6，1層		上部	8	27	12	13	37	7	7			2						7		120	193	
		下部	8	15	4	14	22	1	1			1						7		73		
C．7，1層		上部	3	2	3	3	6		1									6		24	61	
		下部	9	6	5	4	5		7									1		37		縄　文　1
C．8	2層	上部	18		2	15	6			1								4	1	47	112	
		下部	21	1		3	3								1			4		33		
	3層		6	2	7	2	6		2	1							1	5		32		
計			436	1020	298	596	1875	513	178	33	8	59	12	1	5	1	5	714	24	5778		

この表は出土地の明らかな土器のうち口縁部と底部のみを選び、同一個体は破片数にかかわらず1個として数えた。

このような作用を受けた砂丘遺跡の出土状況は土器の編年資料として使用にたえるか否かということが問題となる。これに対する答は「広範囲の調査による資料であれば資料として使用できる」ということである。遺物の本来の層における出土量が移動した層からの出土量より多いと思われるからである。例えば第2表において面縄東洞式は第1層の上部と下部から出土しているが，大部分の地点において下部から出土する量が多い。これに比べて嘉徳Ⅱ式はこの反対である。これによれば明らかに嘉徳Ⅱ式より面縄東式が古いことを証明できる。同様な操作によって嘉徳Ⅰ式より面縄東洞式が古いこともわかる。

嘉徳遺跡におけるいま一つの編年資料は遺構の中での共伴関係である。各地点にみられる石組遺構，焼土カ所，ピットなどから共伴出土する遺物がある。例えばB．7～B．8グリッド第2層の石組を有するピット内から面縄東洞式と市来式とが共伴出土したことによって，従来宇宿貝塚，浦添貝塚において宇宿下層式（汎称で数型式を含む）と市来式の共伴関係は判明していたが，宇宿下層式中のどの型式と市来式とが共伴するかが問題であったが，前記の事実によって面縄東洞式と市来式とが同一時期に属することが明確になり，南九州の縄文式土器の編年と南島の土器文化の編年がこの一点で結びつくこととなった。

またA．3グリッド1層上部の焼土面に出土した石組に沿って嘉徳Ⅰ式の略完形土器が発見されたことによって第1層上部は嘉徳Ⅰ式の層であることが推定された。

C．6グリッドの第1層最下部で包含層が消えるあたりに，無遺物層に掘り込まれたピット中から出土した面縄東洞式の完形土器は，C．3グリッドの第1層直下の無遺物層中にめり込んだ市来式土器片の出土とともに第1層最下部は，第2層上部と共に面縄東洞式の層であることを示している。

第2包含層においても各型式の共伴する現象は第1包含層と同様であるが，面縄東洞式の出土量が増加する反面他型式の占める割合が著しく減少してこの層の特色を示している。

第3包含層でも依然として数型式の出土を見るが，この層の最下部から新型式（嘉徳式と呼ぶ）の略完形土器が出土してこの層の特色を形づくっている。

本遺跡の型式分類は「奄美における土器文化の編年について」①に依ったが，嘉徳Ⅰ式は2分して嘉徳Ⅰ式Aと嘉徳Ⅰ式Bとした。嘉徳Ⅰ式Aは面縄東洞式に直結するものであるが，嘉徳Ⅰ式Bは型式上やや距離が感ぜられる。

新たに設けた凹線文土器は嘉徳Ⅱ式に含められていたものであるが出土状況によると面縄東洞式に共伴しており，形式的に見ても凹線内に押し引き手法の痕跡をとどめるものがあり，文称構成もまったく同じであるなど面縄東洞式との近縁関係が認められる。面縄東洞式よりの派生として嘉徳Ⅱより分離してⅠ型式とした。

第3包含層最下部から出土した新型式の土器は奄美において現在発見されている土器の中で最も古い型式と思われるもので，面縄東洞式と異なる文称構成を有っている。嘉徳Ⅰ式，Ⅱ式に先だつものとして嘉徳式と称することにした。

喜界町赤連出土の土器は未だ型式名がないが，今回の発掘によって同型式と思われる土器片が出土したものでこれを赤連系土器として記載した。その他市来式の影響を受けたと思われるもので影

響度の顕著なものを類市来式とし，宇宿上層式以外で無文の土器があり，各型式に伴うものと推定されるのでこれを素文土器として記載することにした。

第３表　嘉徳遺跡土器底部形態別出土頻度表

1	2	3	4	5	6	7	8	明するもの 平底と判	計
42	148	11	2	169	10	5	25	358	81

今回の調査によって出土した土器のうち底部の数は８１６個である②（第３表）。この数は調査範囲に存在した本来の土器の個数に近いものであろう。底部の形態から８つに分類した。第３表の１・２の底部は胴部と底部を明瞭に区別できるもので，本土の縄文式土器の中期以降にみられる形である。３・４は奄美独特の形で，３は著しく底が上っており，４は脚台となったもので，九州では縄文式土器の中期以降に阿高式，出水式，市来式などに脚台がみられるが，両者の関連は明らかでない。

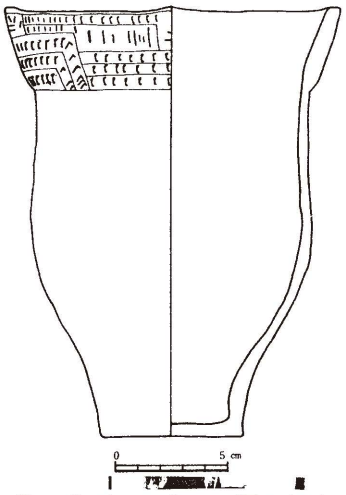
５から８までは一つの系列の上にあるものと思われる。５は底部から胴部への移行が不明瞭となり，６以降は丸底への漸移形と思われる。丸底に近ずく程時期的にも降るものと思われ，土器質の上から見ても関連が伺える。

次に土器の型式に従って述べる。

嘉徳式土器（図版第１・第１２図）

嘉徳遺跡第３包含層下部出土の土器を標式とする。平底の深鉢形で，胴が細く，口縁部は外反する。波状口縁をなし四個の低い山形隆起部をもつ。口唇部は平担で外傾し，篦による刺突文を連続して施文している。口縁部は肥厚して文称帯をなし，篦描きの平行沈線を横位に描き，その間に連続刺突文を施す。山形隆起部下には篦描沈線による一区画を設け区画内に沈刻線文称を施し，山形隆起を意識した文称が構成されている。図版第１の左図の土器もこの型式に属するものと思われるが，口縁部の上面観は長方形をなす異形の土器である。山形隆起部には縦位の沈刻線が施され，この部分のみ刺突文も縦位であり，前の土器と同様山形隆起部と関連のある施文法がとられている。奄美において最も古い型式と思われる。

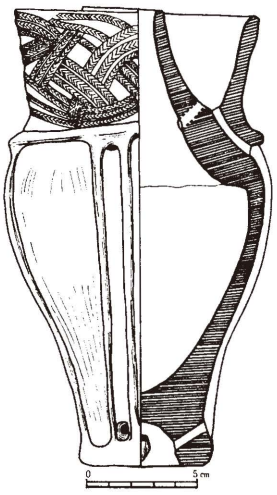
第１２図　第５地区出土々器図



B．８グリッド　３層下部出土

面縄東洞式（グラビア・図版第２０上・図版２４上１・図版２６上・第１３図・第１４図４）

第１３図　第３地区出土々器図



C．５グリッド
１層下部ピット内出土

平底深鉢形土器で口縁部に文様帯を有し，籠編に類する押し引き文を施文する。③　南九州縄文時代後期の市来式土器と共伴する。従来奄美最古の型式と考えられていたが，嘉徳式の出現によって，これに次ぐものとなった。従来深鉢形土器のみが知られていたが，C．５グリッド１層下部のピットより出土したような２重口縁の脚台付土器もあることが判明した。グラビアおよび第１３図の土器がそれである。口縁部が２重になっており，内側の口縁だけを考えれば壷形土器の形となる。琉球では古い土器にも壷形に近い器形があり，南になるに従ってこの器形の増加がめだち，南島先史時代土器の一つの特色を形づくっている。この土器は南島的な壷形土器の器形と，口縁部の外反する深鉢形の器形が融合したものと思われる。

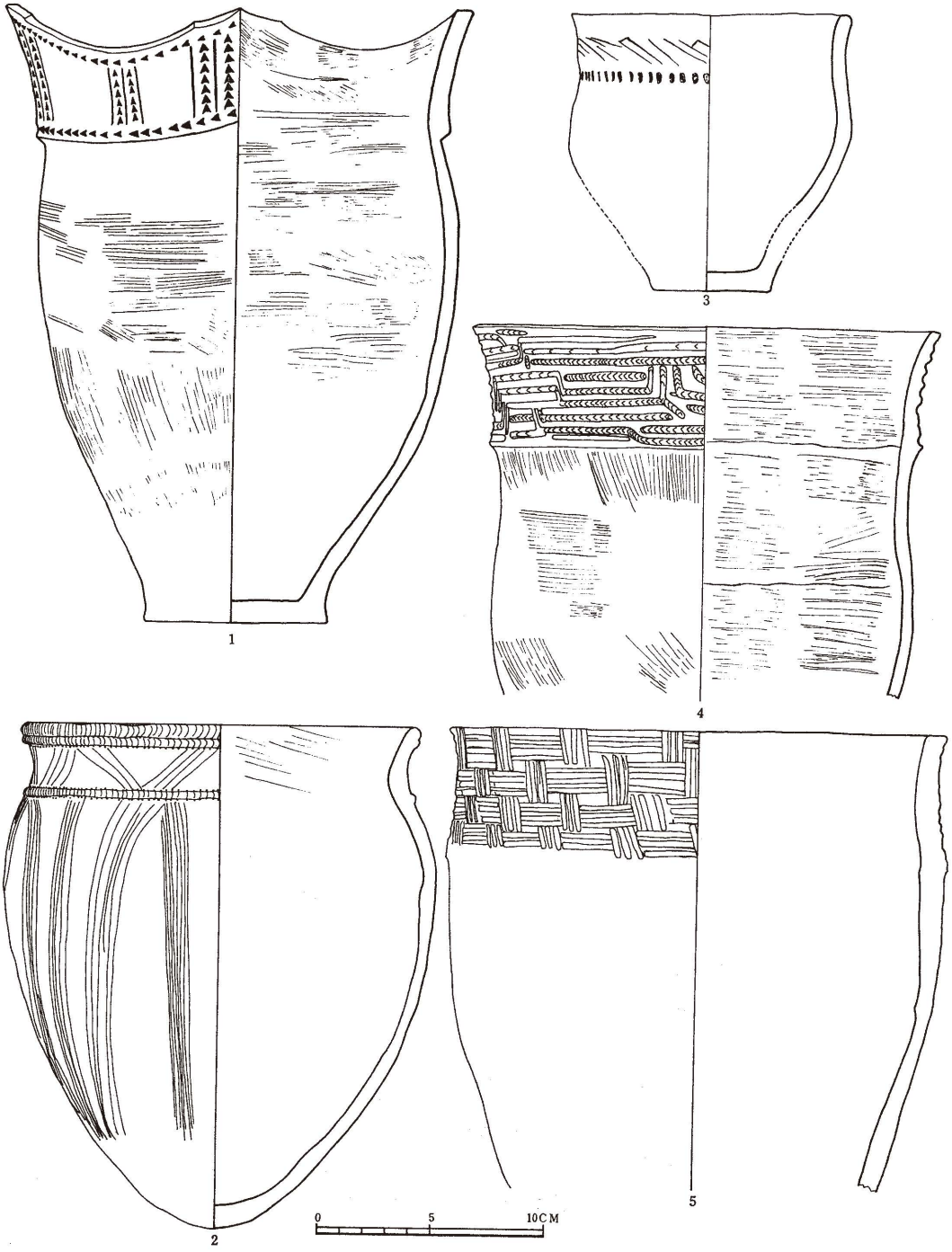
外反する外側の口縁部には面縄東洞式の特徴の籠目の押し引き文が施され，頸部の境に１条の凸帯をめぐらし，この凸帯から底部へ向かって２条一対の凸帯を４ケ所，縦に分岐施文している。２条の凸帯の上下両端には１個の孔を穿ち，下端では脚台の内側へ貫通し，上端では外壁を貫いて内壁との中間に開口している。内口壁は下部でこの孔とすじちがいに穿口されている。２重口縁・壷形と鉢形の融合・凸帯・脚台・穿孔などの特異な要素を多くそなえたこの異形土器は用途も解明が困難である。その出土状況をみると（グラビア・第１０図）７０×４０*cm*，深さ１０*cm*程のピット中央やや南よりに，口を南に向けて横だおしの状態で出土しており，上面半分には底部から口縁部まで炭素（ススが黒く密着しているが，ピットの床面に密着していた土器の半面にはまったく炭素の付着が見られない。このことは土器は当初から横位でおかれ焚火によって熱せられたことを示している。脚台と口縁部の孔は紐通しのためであって，運搬用の孔であるとする説があるが，出土状況から考えると俄に首肯しがたい。土器の内のりは深さ１７*cm*，口径３*cm*で容積が甚だ小さくしかも横だおしで熱したとあっては普通の煮沸用とは考えられない。土器内部から外部へ通ずる４個の孔が用途解決の錠であろうと思われるが，先づ呪術的な使用を考えるのが事実に近いのではなかろうか。

嘉徳Ⅰ式Ａ（図版第２・右，第８・下，第１３・上１～３，下３～５，第１４・上・下５，第１５・下２・４，第１６下３・４，第１７・上４・下２，第１８下５，第１９上６～８・下１・３，第２０・下２，第２１・上３・５，第２２・下１・２，第２３・下２・３，第２４・上２・４・下２，第２５・２・４，第２７・上２，第１４図１）

嘉徳Ⅰ式④のうち押し引き手法を引き継いだものを嘉徳Ⅰ式Ａとし，沈線間の刻文が連続圧痕文となり，施文具の幅が広く文様が短い線を並べた状態になったものを嘉徳Ⅰ式Ｂとした。両者には型式な差異がみられ，Ａは面縄東洞式に近く，Ｂはやや距離を感じさせるだけでなく，Ｂは器壁の厚いものが多いなどの差異がみられる。

嘉徳Ⅰ式Ａは第１４図１，図版第２右にみられるように平底の深鉢形で，口縁部は波状をなすものと平坦なものとがあり，波状のものでは山形隆起部に段のあるものがみられ口縁上面が方形のものもある。口縁部はやや肥厚して頸部に段をつくり，文様帯が構成される。口唇部は平坦でやや外

第１４図　　嘉徳遺跡出土土器



１－Ａ．３．１層上部　２－Ｂ．７～Ｂ．８．２層下部　３－Ｂ４．１層上部
４－Ｃ．８．２層下部ピット内　５－Ｃ．５．１層下部

傾し，刻目を有するものもある。胎土は粒子が細かで，中に滑石を含むものが見られ（図版第１３・２・３，第１４・下１，第１６・下５）器面は刷毛目調整が見られる。器形は面縄東洞式に比べやや胴部の張り出しが注意される。

嘉徳Ⅰ式B（図版第１５・下１，第２３・上７，第２４・下１，第２５・上１）

嘉徳ⅠAに比べ器壁が厚く，口縁部の文様帯が肥厚して頸部に段をつくるという特徴を失なう。口縁部の山形隆起の段が発達して３個の突起をなすものが多い。

凹線文土器（図版第１４・下７，第１６・上３，第１８・下１・２，第２０・下５，第２１・上１下１，第２２・上・下３，第２３・下４・６，第２５・上５，第２７・上１）

面縄東洞式に類似するもので，押し引き文様を失なったものである。籠目文様を主とし綾杉文も加わる。凹線文の中に押し引きの痕跡を残す漸移形態がみられ両者の関係を示す。

器形も同様で，出土状況においても両者の共伴関係が認められ，時期的に近いことを示している。

嘉徳Ⅱ式⑤（図版第１５・上４，第１６・上１・２・４，第１７・上１・下１・３・４，第１８・上４・６・７，第１９・上５・下２・６～８，第２１・下４，第２３・上５・６，第２７・上５・６）

この型式に属する土器の出土量が最も多い。嘉Ⅰ式土器のうち下半部だけのものは本型式との判別が困難であるから混入して表の数に上がったものもあり得る。第２表において記録された数字は実数より上まわっていることも考えられる。深鉢形平底の土器で波状口縁と，平坦な口縁との２つの形態があり，口唇部に刻目を有するもののあることも嘉徳Ⅰ式と同様である。胎土に滑石を含む土器もある。

面縄西洞式⑥（図版第１３・上４～７，第１５・上５～７，第１６・下２，第１７・上２・３，第１９・上４，第２０・下１・３）

器形は胴部の張りに特徴があらわれ，刻目凸帯を口縁部と肩部に有することと共に，面縄前庭式への移行が推定される。底部は丸底に近い平底であろう。

面縄前庭式⑦（図版第２下，第１７・下６・７・８，第２１・上９・下６，第１４図２）

頸部がしまり肩から胴部へかけて張り出し底部は丸底または小さな平底に終る器形である。口縁部と肩部に密に刻目を施した細い凸帯を各々１条づつめぐらし，上下の凸帯間に縦または斜に同様な凸帯を付したものもある。口唇部はまるく，密な刻目を施し，凸帯の両側に連続して刺突点を有するものもある。上下の凸帯間に数条の平行沈線を鋸歯状に施し，凸帯下にも同様な沈線を底部近くまで施文している。器壁は薄く仕上げるのが特徴で焼成は一般に良好である。本遺跡では出土量は少ない。深い層に出土したものも見られるが後の掘り込みなどの原因によるものであろう。

素文土器

宇宿上層式に属さない無文の土部が３３片出土している。これらは器形，胎土，焼成などからみて宇宿下層式のうちのいずれかに属する素文土器であろうと思われる。

喜念Ⅰ式⑧（図版第１７・上５・６，第１８・上８・９）

本遺跡から小量の喜念Ⅰ式の出土がみられる。

宇宿上層式b（図版第１５・上１・２，第１８・上３，第１９・下９，第２３・上１，第２５・

上３）

小量の宇宿上層式が出土している。異形の把手様土器片，波状口縁，杯状の土器で内部が黒色を呈し一見土師器かと凝うようなものもある。土器の質からみて一応宇宿上層式bにふくめた。壷形土器となるものが見られる。

類市来式土器（図版第１６・下1，第１８・下3，図版第２１・上2，第２６・下８）

口縁部がわずかに肥厚して文様帯をなすことは，奄美においては市来式以前から見られ．器形においても深鉢形はすでに存在していた。市来式の影響を受けたと思われるものは断面が三角形を呈する口縁部，半月形の刻点にはじまる凹線，口縁部が方形を呈し，山形隆起部が著しく外方へ突出する器形などの要素がみられるものである。このような土器を類市来式とした。面縄東洞式にみることができる。

赤連系土器⑨（図版第１３・下１・２）

喜界町赤連から出土した土器に類するものである。直口で口縁部断面は舌状を呈する。胎土は砂粒を多く含み焼成は良く，器壁は厚い。器面は表裏ともに貝殻条痕が施されている。

Ｂ．１グリッド１層下部出土の土器は，口縁部から約1.5㎝のケ所に４㎝をへだてて１対の孔が穿たれている。この孔は土器製作時に作られたもので，直径５㎜あり，紐を通してつるしたものであろう。出土時には孔の内壁に炭素が付着しているのがみられた。市来式と同様他地域からの移入土器と思われるが，外見は古く見えるが，出土層位から見て縄文後期に該当するものであろう。

市来式土器（図版第５・下，第９・上，第１０・上・下，第１１・上，第１４・下2，第２５・下）

Ｃ．３グリッド１層最下部，Ｃ．７～８グリッド２層下部石組を有するピット内，Ｂ．８グリッド２層下部の３ケ所から出土している。いずれも口縁部で，波状口縁と平坦な口縁とがあり，文様帯の上下両端に爪形文を連続施文し，中央に三ケ月形の刻点から始まる凹線を描くものと，文様帯の下際に爪形連続文を施し上部に貝殻による刺突弧文を施したもの，刺突弧文のみ施したものの三種類があり，いずれも文様帯下に施文のない古いタイプである。

特に出土状況で注意されるのはＢ．８グリッド２層下部の石組を有するピット内に出土した市来式土器で，面縄東洞式との共伴関係が証明され，従来市来式土器を出土した宇宿貝塚・浦添貝塚において明確にすることが出来なかった点を一拠に解明することができた。

その他の縄文式土器（図版第２４・上６）

Ｃ．７グリッド２層下部出土の土器である。胎土に砂粒・雲母を混じ焼成は良好で色調は紅褐色であるが，口縁部外側には炭素の付着がみられる。器形は胴部の張った鉄鉢形で平底の土器と思われる。頸部はしまり口縁部は外反し，口縁端は内外に肥厚し瘤状の突起をつけており，口唇部には沈線３条がめぐらされている。頸部から肩部にかけて貝殻縁による疑縄文を施し，これに重ねて貝殻縁を圧しつけて孤文を描いている。土器質，器形，文様などからみて外来の土器と思われる。

この土器に最も近い土器には大分県小池原貝塚下層出土の「２類」⑩とされた土器がある。縄文時代後期初頭に比定される土器で　川光夫氏等は鐘ケ崎式土器の祖形となるべきものとしている。

乙益重隆氏は同じ土器について，「小池原下層式とし，大分市字小池原貝塚の下層の土器を標式

とするもので，福田KⅡ式にみられる3本沈線による磨消縄文をもつ土器や，口縁部が肥厚し口唇部に刻み目がつけられ，頸部がやや長く胴部はややふくらむよく研磨された鉢形土器（第1図－2）や，口唇部に刻み目をもち3本沈線による曲線文様が描かれた粗製土器（第1図－1）などがある。これらの土器は高知県宿毛貝塚出土土器とほぼ同一型式とみなされる。南九州では綾式や岩崎上層式土器に共伴し，また北部九州では福岡県永犬丸（えいのまる）貝塚にも出土し，西部では福岡県下楠田貝塚や熊本県阿高貝塚でも少量発見されている」⑪と述べている。

嘉徳C．7グリッドの土器は乙益氏の第1図－2の土器即ち賀川氏の2類に類似するもので，嘉徳では口縁部の磨消縄文と刻目がなく肩部以下の磨消縄文のかわりに貝殻縁による疑縄文が施されており，小池原2類土器では磨消縄文の上に短い篦描文を重ねているのに対し，嘉徳C．7出土の土器は貝殻縁による圧痕文を施している点，まったく同じ手法といえる。

南九州では，乙益氏のいう小池原下層式のうち第1図－1は岩崎上層式に通ずるものであり，岩崎上層式に共伴する磨消縄文に口縁部が肥厚して二又になり，口縁部と肩部に磨消縄文を施す土器のあることから，小池原下層式のセットは南九州でもたどることができる。貝殻縁による疑縄文は南九州でよくみるところで，指宿式・出水式などに伴う例が発見されている。嘉徳C．7グリッド出土の土器は，貝殻縁による疑縄文が磨消縄文とおきかえられている点からみて，南九州に故地を有するものと思われその時期は縄文後期初頭と考えられる。

B．8グリッド2層上部から2条の並行曲線文を有する土器の小片が出土しており，岩崎上層式か，指宿式に該当するものと思われる。胎土・焼成などとも考え合せると南九州からの移入土器と考えられ，前記の土器との共伴関係が推定される。

以上二つの土器は市来式より1時期以上古い型式であり，現在まで判明したもののうちでは最も古い移入土器であるといえる。おそらく前に述べた嘉徳式に平行するものとしてもよいであろう。

網代痕ある土器底部（図版第15・下3）

本遺跡から出土した只一例の網代底である。直径6.6㎝の平底で，灰褐色を呈し，焼成は良好である。幅6㎜の経緯をあんだ網代の圧痕が底部中央に印されている。胎土には滑石がまぜられており，あるいは移入品かもしれないのでこの項にあげた。

凹線文を有する丸底土器

B．3～2グリッドの1層から出土した土器である。丸底の小破片であるが，中心の厚さは1.8㎝，灰褐色を呈する。底面に浅い凹線が中心に向かって8条施文されている。赤連系土器に類する宝島大池遺跡出土の土器底部が丸底であることを考えると，本遺跡出土の赤連系土器と関係があるかもしれない。

特殊土器

本遺跡では土器内面に施文した土器（図版第15・7，第22・下）や，口縁部付近に径2㎜程の小孔を1対づつ，土器製作時にあけたもの（図版第15・下6，第19・上2・3，第21・上4）　土器片に加工した土製円版（図版第17・上8，第18・上10，第21・上5・6，第23・上2）などが見られる。土製円版は本土の縄文遺跡でもよく見るものであるが，口縁付近の小孔は奄美でもはじめてみるものでその用途についても不明である。口縁裏面の施文は単純なもので直線

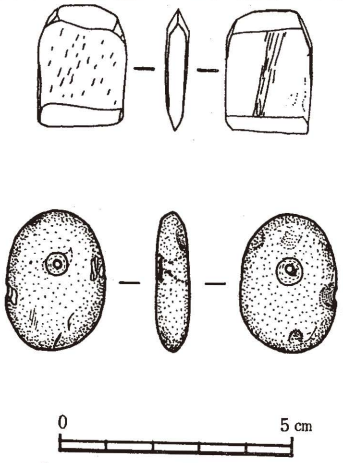
3～4条を沈刻したものであるが，奄美でははじめての所見である。おそらく市来式土器の影響であろう。

2. 石　　器

包含層中には径５０cmを越えるものから１０cm位の礫まで多量の石がもちこまれており，これらも何等かの目的をもって集められたものと思われ，その主な採集地は嘉徳川であったろう。礫の中には磨耗した円礫が多いが中には角礫もあって，調理場に使用した石組内にめだった。

石器として明瞭なものとしては，石斧・石皿・砥石・叩石・石錘の他に小楕円礫に穿孔した垂飾１個と，極く少さな鑿形の石器１個が注意され，また焼けた軽石が若干目についた。

第１５図　嘉徳遺跡出土，錘飾・小形石器



上．C．6．1下　出土
下　B．4．1　上出土

石器の中で最も量の多いものは叩石であり，次いで石斧が多く８０個を起えた。他は石皿・砥石などはそれぞれ数個にすぎない。とくに石錘の出土が１個にすぎないことは注目してよい。沖永良部島などに分布の見られる大きな円礫に凸起部をつくり出した特殊な石器が包含層中から発見されたことは，その年代を知る資料となるものである。

石器の分布状況を見ると，土器が中央西よりに集中していたのに対して，Ｃ．2，Ｃ．3，Ｃ．5，Ｃ．6の南側に集中しているのが目立っている。以下石器について述べる。

石　斧（図版第２８～第３８，第３９～第４８，第１６図～第２４図）

石質は砂岩・頁岩・変成岩などが使用されている。自然礫面を残した打製石斧が最も多くこの地域の特徴を現わし，ついで幅が広くて短い磨製石斧にも地域性が感じられ，この種の石斧の数も比較的に多い。打割によって形をととのえわずかに研磨を加えた半磨製石斧があり，完全な打製石斧はまれで，南島特有の円形石斧とともに数は少ない。磨製石斧に鑿形石斧もみられる。

自然礫面を残す石斧（図版第２８－１・４，第２９－３，第３０－１・２，第３１－３，第３２，第３５，第３６，第３７－１～３，第３８－１・２，第４１，第４２－２・３，第４３－３，第４６－１，第４７－２，第４８－１・２，第１６図－１～４・６，第１７図－１・２・４・７～９，第１８図－１・２・７・８，第１９図－１～３・６・９，第２０図－３・４・６・９・１１，第21図－１～３・６～８，第２２図－１・５・７・９，第２３図－１～６・１０・１２，第２４図１）

礫の形が適当なものを選んで打割り，形を整えたもので，自然のままの礫面を残している。製作が簡単で実用的である。形は短冊形で小は９cmから大は１７cm，目方は１４０g～７００gである。石斧の約半数を占める。

磨製石斧（図版第２９－１・２，第３４－１・４，第３７－１，第４４－１，第４５－１，第47－１・３，第１６図－７・８，第１７図－５，第１８図－３・５・９，第２０図－１０，第２１図

－4，第２２図－６，第２４図－２）

一般に形が小さく，扁平で，両側に面を砥ぎだしたものが多い。図版第２９－２のように短冊形のものもあるが，幅のわりに長さが短かく三角形に近いものもある。両側を敲打しあるいは打かいで柄を着装した跡のあきらかなものがある。長さは８～１３cm，重量は１７５～３３０gであるから石斧の重さで切るよりも柄を着装して，ふり落ろす力で切ることが必要であったと思われる。磨耗あるいは折損したものを砥いで再使用したものもみられる。

一部磨製石斧（図版２８－２・３，第３１－１・２・４，第３４－２・３，第３７－２・３，第４０－１～４，第４３－１・２，第４４－２・４，第１６図－５，第１７図－６，第１８図－４・１０・１１，第１９図－４・５・７・８・１０，第２０図－１・２・５・７，第２１図－１０・１１，第２２図－２・８，第２３図－７）

３つのタイプが見られる。その一つは，形の良い礫を打欠いで形を整え，研磨によって仕上げたもので，研磨された部分が多く，外形が整っている。薄いものと厚く仕上げられたもの二通りが見られ，片刃が多い。長さ１１cm内外，重量は１７０～２９０gである。

第二は，礫の半面を剝ぎ取り，その面を研磨し，反対の面は自然礫面に僅かに研磨を加えて整形したもので形は本来の礫の形に左右される。必然的に片刃となる。厚さも礫の形態によって厚いもの薄く仕上がったものの両者が見られる。長さ８～１２cm，重量８０～３５０gである。

第三は，礫に必要最小限度の打ち欠きによる整形と，そのあと極く僅かの刃部その他の砥ぎ出し，研磨を加えたものである。自然礫面を両面に多く残すのが特徴といえる。仕上りは厚いものが多く，刃部は彎曲したものが多い。長さ８～１４cm，重量２００～５５０gである。重さを利用する利器といえよう。

打製石斧（図版第３０－３，第３７－４，第４４－３，第４５－３，第４６－２，第４７－５，第１８図－６，第２１図－９，第２２図－３，第２３図－８・９・１１）

数は少ないが形は一定していない。薄くて先端が細くとがったもの，厚くて短冊形を呈するものなどがある。長さ９～１４cm，重量１２０～７７０gである。

円形石斧（図版第３２－３，第４２－１～３，第１６図－４，第２１図－３，第２２図－１・１０，第２３図－２）

円礫の一端を打欠いで刃をつけたものである。扁平なものと厚くて重量のあるものとがみられる。南島特有の石器で，面縄貝塚では夜光貝の蓋の一端を欠き刃をつけて利器としたものが出土している。加世田市上加世田遺跡⑫では同形の石斧が発見されている。径６～１０cm，重量８０～５００gである。

鑿形石斧（図版第４５－２，第２４図－４）

２個出土している。いずれも頁岩製であるが小さい方は風化が甚だしい。小さい方は長さ8.6cm，幅1.7cm，厚さ1.6cm，大きい方は長さ11.4cm，幅2.1cm，厚さ1.5cm，重量６０gである。断面は長方形で，全形は角柱状を呈するが，両端へせばまり刃部がとくに著しい。頭部は平端面をなすが一部かけているのは使用によるものであろう。片刃である。

その他の石器

小形鑿形石器（図版第２７－下2，第１５図－上）

頁岩製　長さ2.6㎝，幅1.8㎝．厚さ0.4㎝である。両面，側面ともによく研磨され，両端ともに砥ぎだされて刃となっている。

垂飾（図版第２７－下1，第１５図－下）

自然礫の両面をわずかに研磨し，中央よりやや上に両面より穿孔したもので，紅色の石を選んで製作している。変成岩質のものである。長さ3㎝，幅2.1㎝，厚さ0.7㎝である。

砥石（図版第３２－１～3，第３８－３・4，第４６－3，第４８－3，第２４図－３・５～７・９～１１）

砂岩の破片を使用し，方形を呈するものが多く，一端は割れ目を有するのは適当の大きさにするために故意に割ったものと思われる。径５～１２㎝で，重量４０～４００ｇである。小さいものは手にもって使用したものである。石斧などの研磨に使用したものと思われる。

石皿（第２５図－２・３）

砂岩製，２個，共に半ば欠損している。大は幅２８㎝，厚さ8.3㎝，小は幅１9.5㎝，厚さ5.5㎝である。

凸起を有する特殊石器（図版第３９，第２５図１）

花崗岩製，長さ２５㎝，幅１7.5㎝，厚さ7.6㎝である。重量5.3Kgあり片手では保持するのが困難である。楕円形の自然礫の側端に敲打による凸起部をつくり出したものである。沖永良部島，与論島に分布がみられる。発掘による出土は今回が初めである。皆重量が大きく，用途としてはソテツの実などを摺りつぶして粉にする場合，石皿を台にして使用すれば有効であろうと思われる。現在用途は不明である。

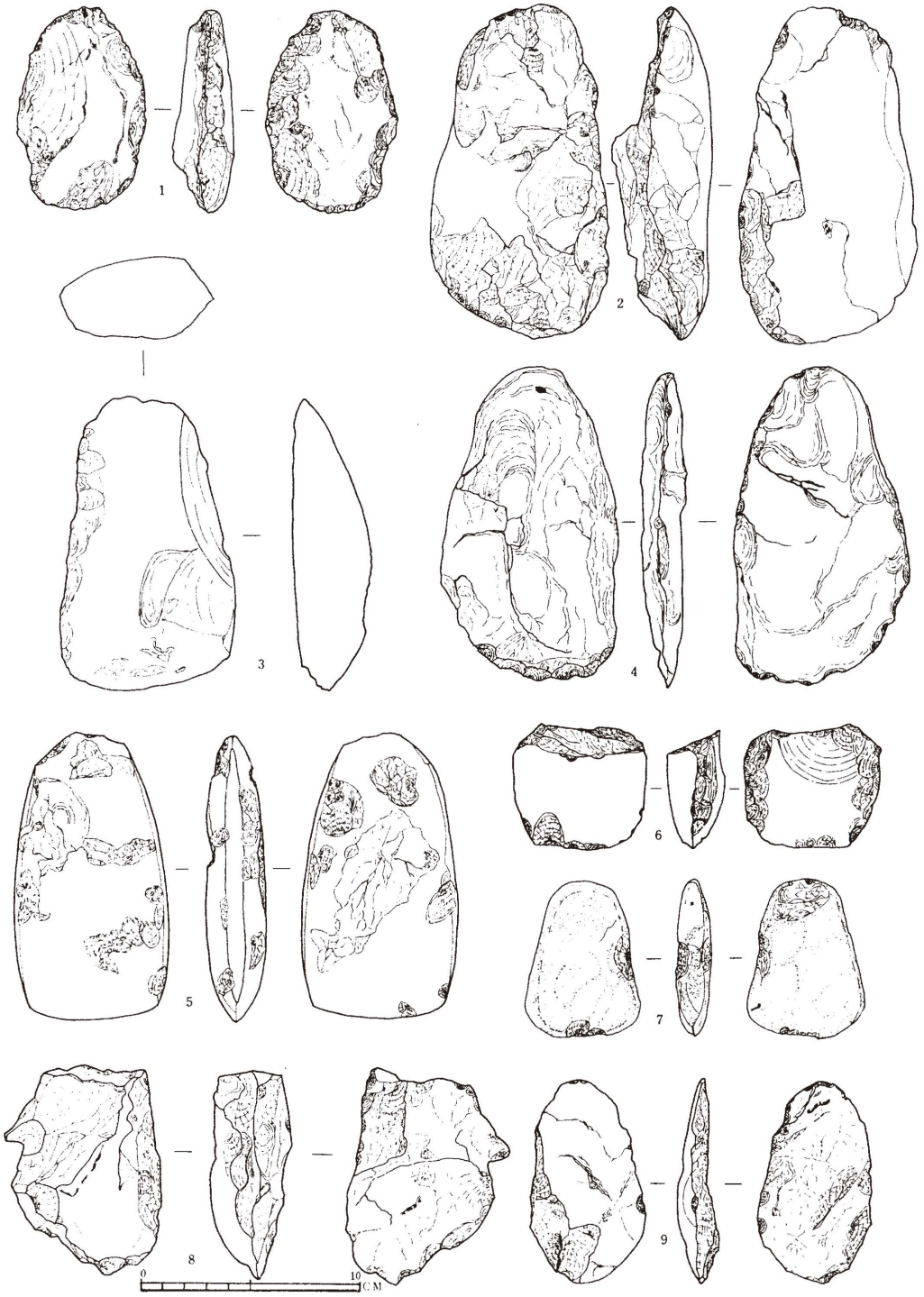
3.　自然遺物

自然遺物としては動物骨が少量出土したのが認められた程度である。Ｂ．2，Ｂ．3，Ｂ．7，Ｃ．2，Ｃ．4，Ｃ．8グリッドからほとんど石組内か，あるいはその付近から発見され石組が調理に関係のある遺構であることを示す資料となっている。動物種類が判明したのはイノシシの歯だけである。（河口貞徳）

第１６図　第１・第５地区出土石器

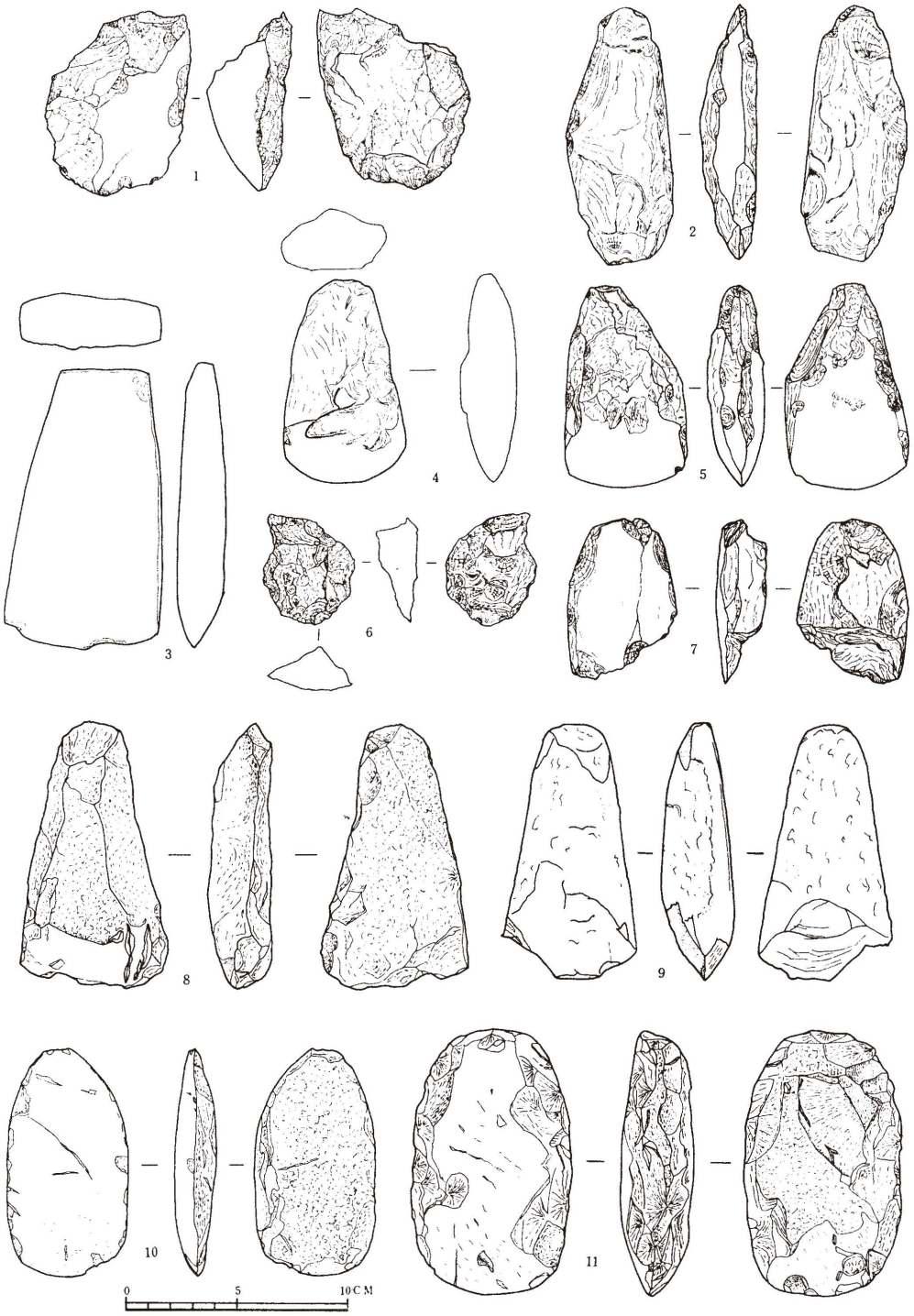
1．C.2 1層断面　2．B.2 1層下部　3．C.2 1層下部　4．B.1 1層下部
5．A.2 1層上部　6．C.2 1層下部　7．C.2 1層下部　8．B.7 2層下部

第１７図　　第１・第５地区出土石器



1．B.72層下部　2．C.21層下部　3．B.11層下部　4．西傾斜地区５ブロック断面
5．C.21層下部　6．A.21層下部　7．B.21層断面　8．B.72層石組内
9．B.２１層下部石組内

第１８図　第１・第２地区出土器

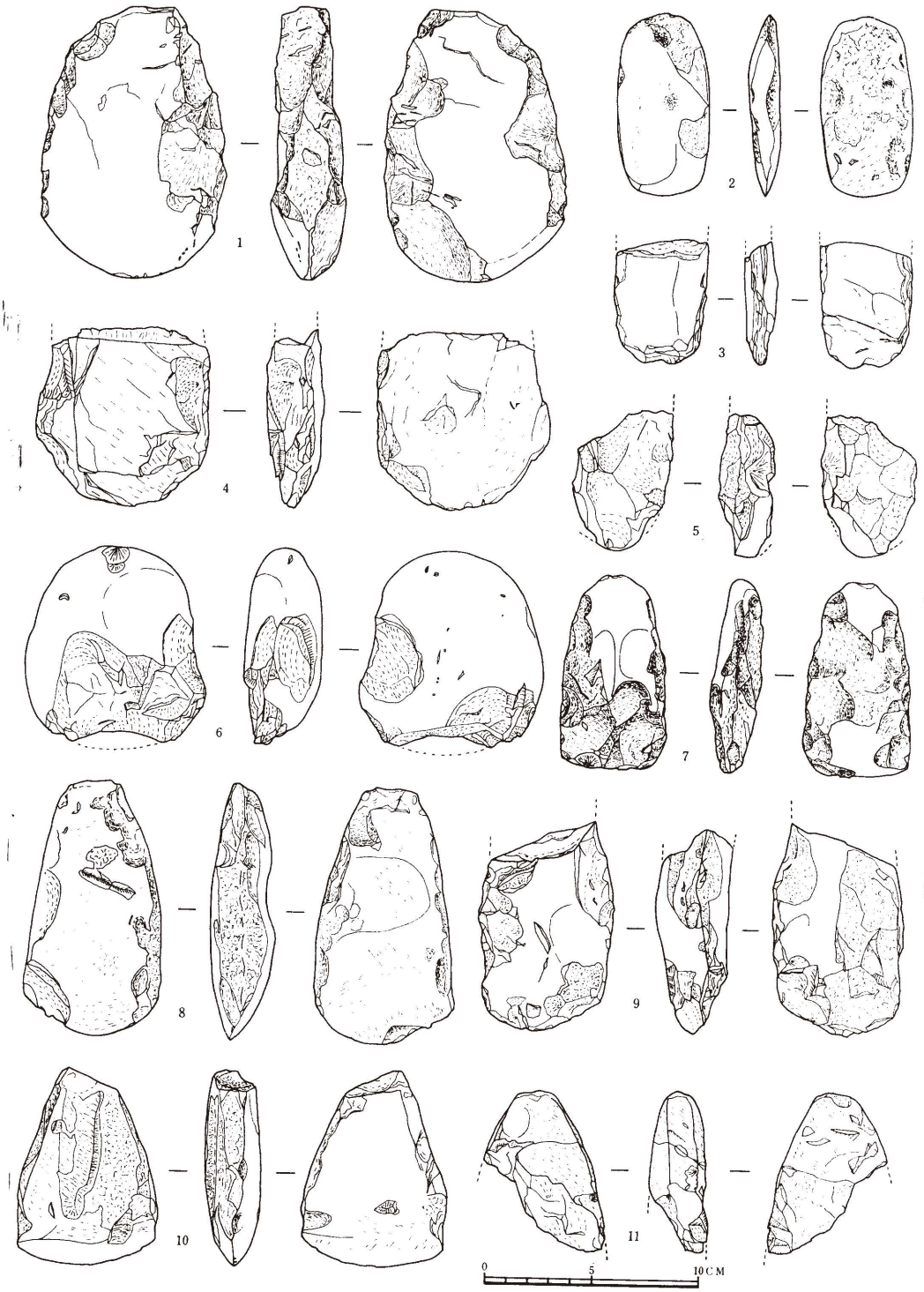


1．B.8 2層下部　2．C.2 1層断面　3．C.2 1層下部　4．西斜面地区５ブロック
5．B.8 2層壁下　6．C.2 1層　7．C.2 1層断面　8．B.4 1層下部
9．B.4 1層下部　10．C.3 1層下部　11．第２地区採取

第19図　第2地出土石器

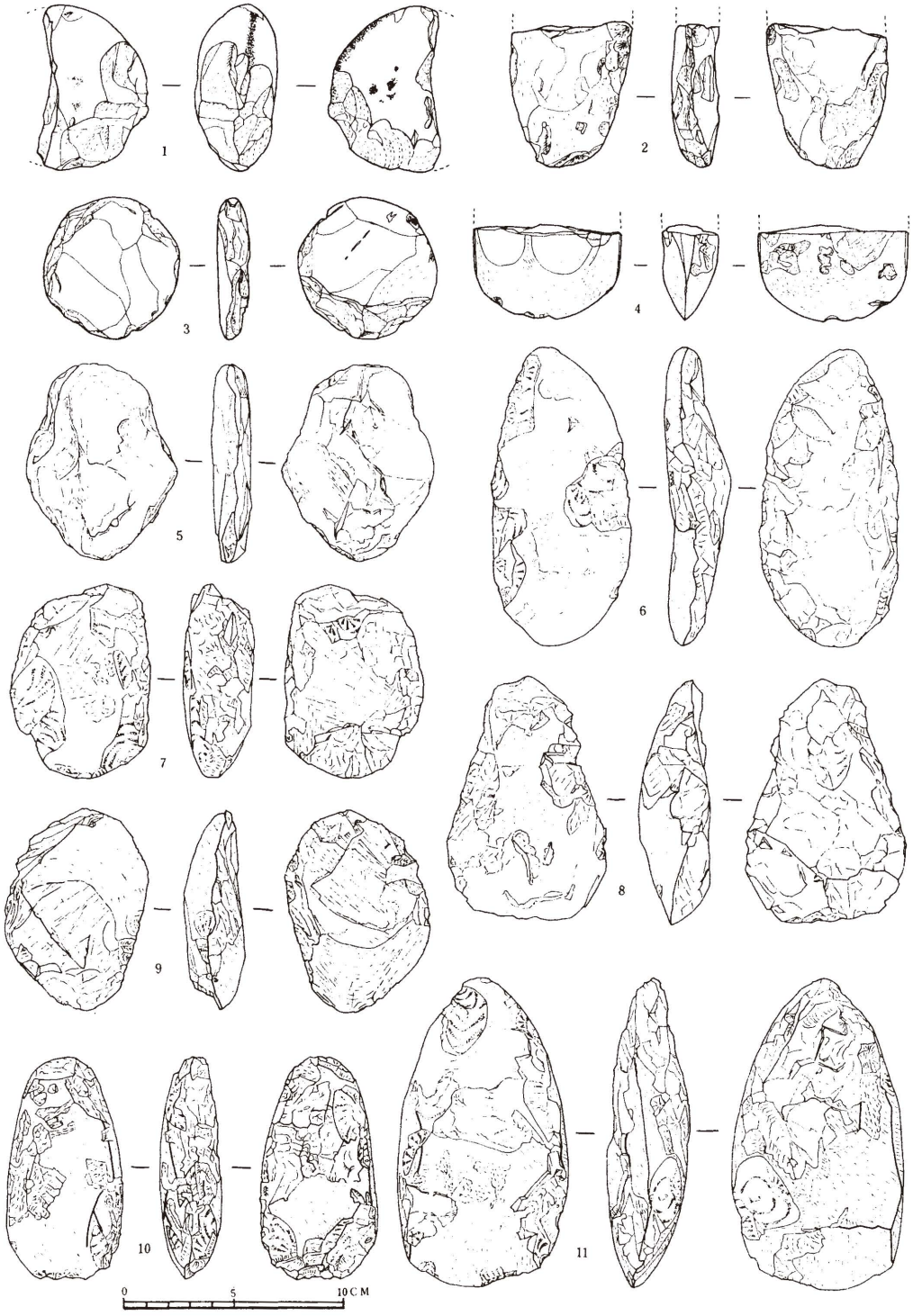
1．B.4 1層上部　2．B.4 1層上部　3．C.4 1層下部　4．C.3 1層下部
5．C.3 1層上部　6．B.4 1層上部　7．B.3 1層　8．C.4 1層上部
9．C.3 1層下部　10．C.3 1層下部

第20図　第 2 地 区 出 土 石 器



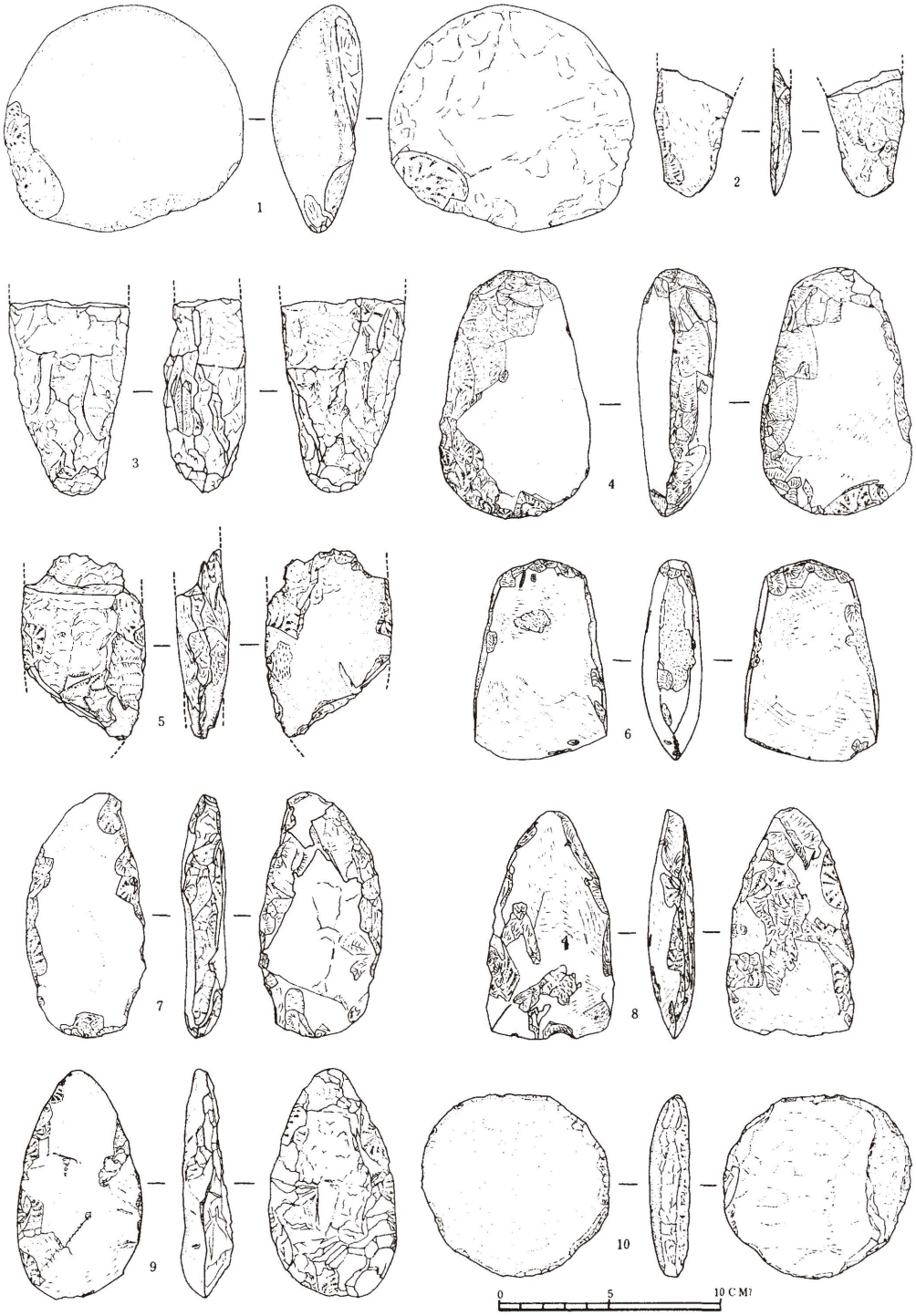
1．B.4 1層上部　2．B.4 1層下部　3．C.3 1層上部　4．西斜面地区4ブロック
5．C.3 1層下部　6．C.4 1層上部　7．C.3 1層下部　8．C.3 1層下部
9．C.3 1層下部　10．C.4 1層下部　11．C.4 1層下部

第２１図　　第２・第３地区出土石器



1．C.31層　　2．B.4 1層上部　3．C.3 1層下部　4．C.4 1層上部
5．B.6 1層上部　6．C.5 1層下部　7．C.5 1層上部　8．C.5 1層下部
9．B.5 1層上部　10．B.5 1層　　11．C.5 1層上部

第２２図　第３地区出土石器

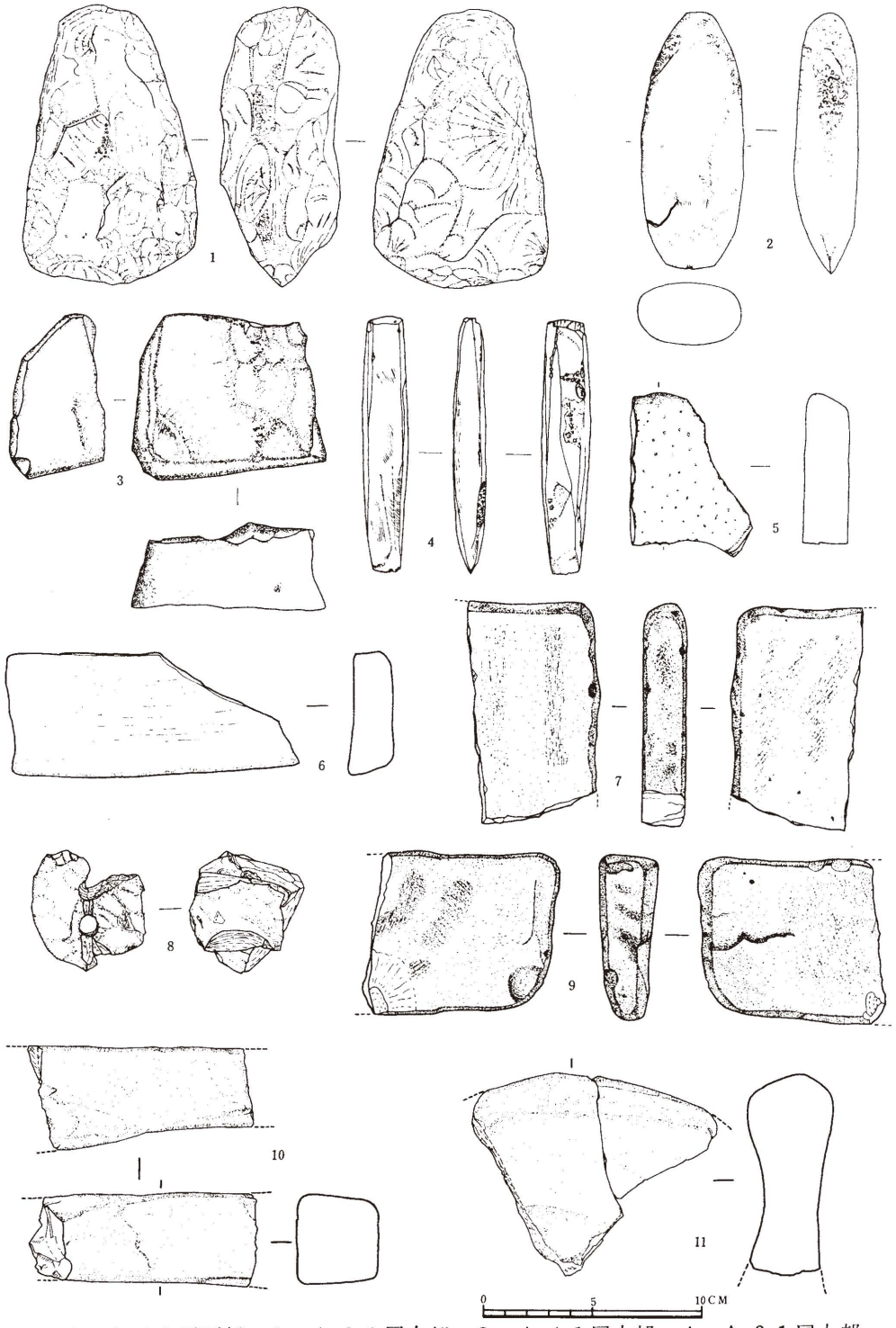


1．C.５１層下部　2．B.５１層上部　3．C.５１層上部　4．C.５１層下部
5．C.６１層上部　6．B.５１層下部　7．C.６１層下部　8．B.５１層下部
9．C.５１層下部　10．C.６１層上部

第２３図　　第３・第４地区出土石器

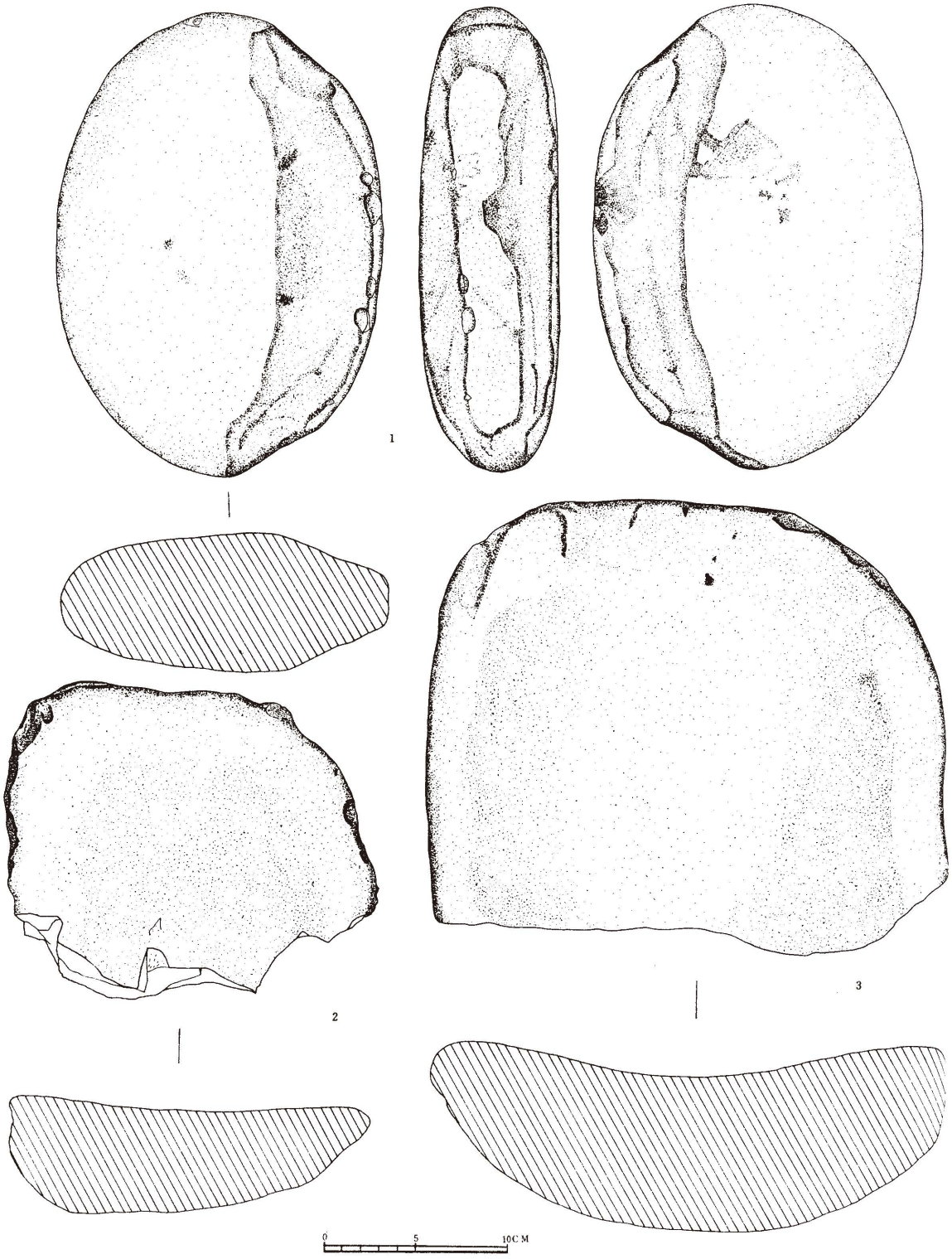
1．C.5 1層上部　2．C.6 1層上部　3．C.6 1層上部　4．C.6 1層上部
5．C.5 1層上部　6．C.5 1層下部　7．C.6 採取　8．C.6 採　取
9．A.4 1層上部　10．A.4 1層上部　11．A.1～4 1層　12．A.1～4 1層

第２４図　第２～第５地区出土石器



1．A.４１層下部　2．A.３１層上部　3．A.４１層上部　4．A.３１層上部
5．A.４１層上部　6．C.８２層上部　7．B.３１層上部　8．B.８２層上部
9．B.４１層上部　10．採　取　11．C.３１層上部

第２５図　第２地区出土石器



１．Ｃ．３．１層下部　　２．Ｂ．４．１層下部　　３．Ｂ．４１層下部

註 ① 河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」鹿児島考古9号，鹿児島県考古学会 昭49・6

② 第2表と第3表の土器底部の数に差があるのは，第2表は第1地区～第5地区出土の層位の明確なものにかぎったのに対し，第3表は全ての出土遺物より選んだためである。

③ ①に同じ

④ ①に同じ

⑤ ①に同じ

⑥ ①に同じ

⑦ ①に同じ

⑧ ①に同じ

⑨ ①に同じ

⑩ 賀川光夫・橘　昌信「小池原貝塚」大分県文化財報告第13輯　昭和42年3月

⑪ 乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化・九州」考古学講座3　雄山閣　昭和44・5

⑫ 縄文晩期の遺跡

Ⅲ 総　　括

1. 土器と交通

本遺跡出土の土器はいわゆる宇宿下層式を主とし，少量の上層式を加える程度である。しかし従来の宇宿下層式にみられなかった嘉徳式と称した新型式が加わり，文様としては面縄東洞式の籠目を基本とした単位の繰返し文様に対して，波状口縁の隆起部を基点とする文様が先行するものと推定させた。

器形においては平底の深鉢形土器が普遍的に行なわれ，南九州の縄文後期の器形に類似が感ぜられるが，特殊例として壷形土器が面縄東洞式の時代に早くもあらわれており南島の色彩をあらわしている。ことに二重口縁の土器は独創的なもので，一例ではないところから様式化したものと思われるが，これほど技巧をこらすことができたことは，相当に土器製作の経験年代を重ねた結果と考えられる。

このことは更に古いと考えられる嘉徳式土器が平底の深鉢形土器で，文様帯も規画性をもって整えられているというかなり進んだ形態を有し，本土の縄文式土器の後期の程度に達していることにも現われている。

以上の状況から見て奄美における土器型式は現在発見されているものが最古の型式ではなく，更に古い文化をたどることができるであろう。

土器から見た外部との交通については，先づ市来式土器があげられる。宇宿貝塚の場合は市来式

の外に一湊式を伴っていることから，その交通の範囲は一湊式の分布範囲にかぎられる。したがって宇宿の交通範囲は種子島，屋久島，口永良部までで，本土に達していない。嘉徳では3ケ所にわたって市来式を出土しているがいずれも一湊式を伴っていない。これは一湊式を伴なう遺跡からもたらされたものでない公算がつよい。

嘉徳遺跡には大分県の小池原貝塚下層出土の小池原2類系統の土器と，岩崎上層式土器とが出土している。この二つの土器は南九州からもたらされたものと考えられる。これらは縄文後期初頭に属するもので市来式よりも古い。したがって嘉徳にあっては最も古い時期から交通路がひらけていたのである。

赤連系土器も移入土器と考えられる。本遺跡出土の層位から市来式以後の縄文後期に属するものと考えられるが，市来式の諸遺跡において市来式土器の包含層上部に尖底土器を出土する事実と，宝島大池出土の土器が尖底土器であったことなどは，これと無関係ではないように思われる。赤連系土器の出土によって，宝島・喜界島等を含む赤連系土器の分布地域との交通も推定できる。

嘉徳遺跡に近い安脚場貝塚は兼久式を出土する遺跡であるが，南九州の弥生式中期中頃の土器を出土しており，同じく与路島の遺跡からは後期の土器を出土している。これらは嘉徳付近の地が，先史時代において，九州南部の諸島間および南九州との交通路を確保していたことを示している。

2. 遺跡の性格

本遺跡は土器型式にして数型式を数える期間にわたる長年継続した遺跡である。北東部に古く，南西部にこれに次ぐ時期からの生活が行なわれており，包含層の堆積は１４０cmを越える程のところもある。しかるに北東部に或は住居址かと思われるような地域がみられる以外には，住居の跡は発見されていない。

宇宿貝塚や住吉貝塚においても石囲いと炉跡のみで柱穴は発見されていない。砂地であるために柱はあっても柱穴は残らないのか，あるいは柱のない住居であったのか不明であるが，もし細い木の枝又は竹などを骨組としたテントに類する草茸等の家屋であれば，平地住居の場合は痕跡を残さないであろう。

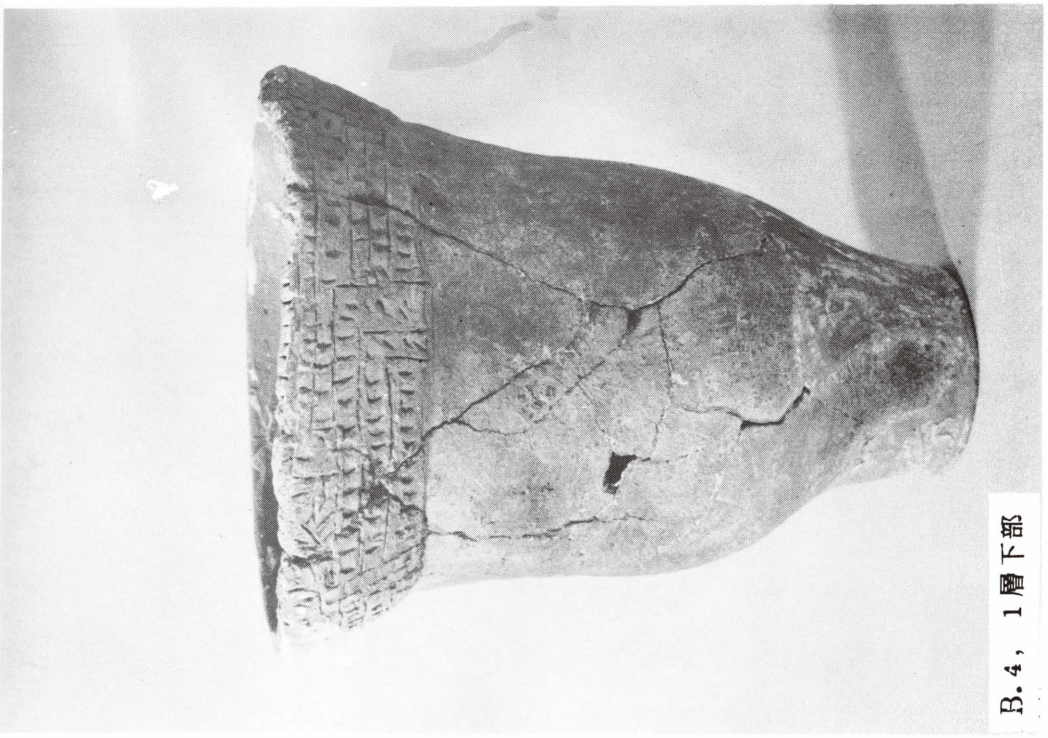
遺跡の中央部に拾ケ所を越える石組や，土が焼けた地点が何か所かあって多くの生活面が推定されている。石組では獣骨などが検出されて調理場であることを示し，一方ピットの中に横だおしに置かれた二重口縁の土器は周辺に焚火して何らかの呪術が行なわれたのであろう。

石器には石錘がほとんどみられず，鏃は一例の出土もない。網，弓矢等による狩猟，漁撈にかわる方法がもちいられたものであろう。

土器の量は相当の数にのぼるが，小形のものが多く，煮沸用としては不適のものもある。調理の方法として石組が多くみられるのは，食物を焼き或いはむす等して，土器による煮沸は小量で用がたりたのであろう。

縄文文化圏との交通は相当に発達していたものと思われるが，その生産の方法や，生活の様相にはかなりの相異にはかなりの相異が感ぜられ，縄文文化圏の生産方法などを取り入れるところがなかった。土器文化においても直接的な影響は短期間に消滅し，南島文化の本質を失うことがなかった。（河口貞徳）

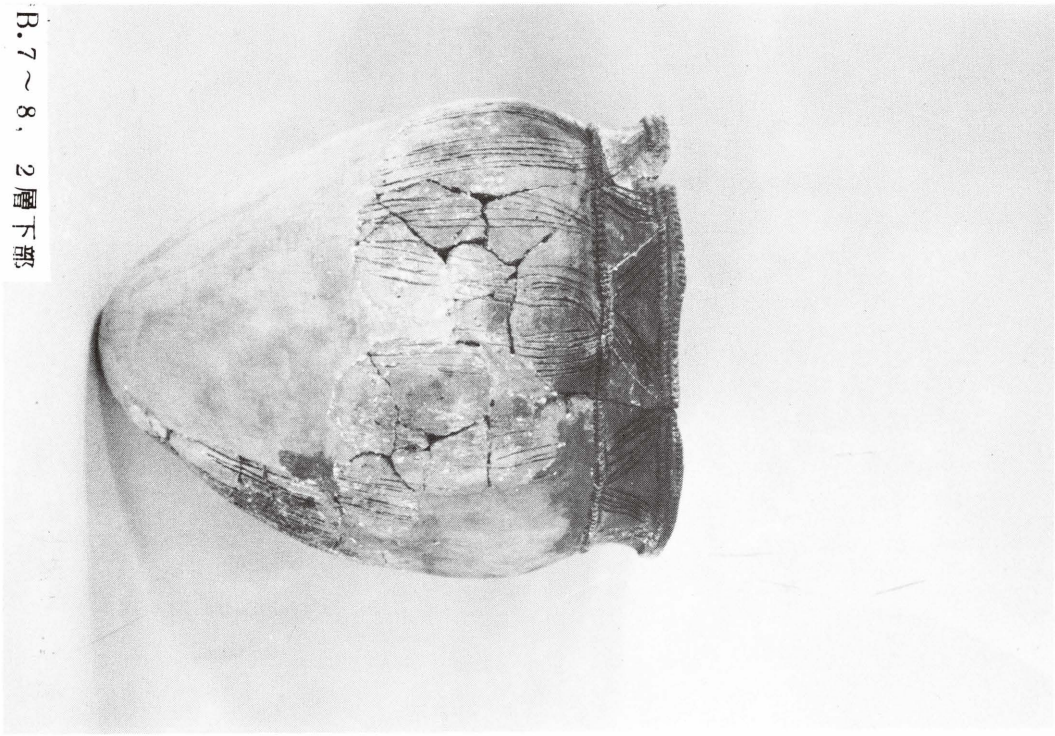
図版第1　嘉徳式土器



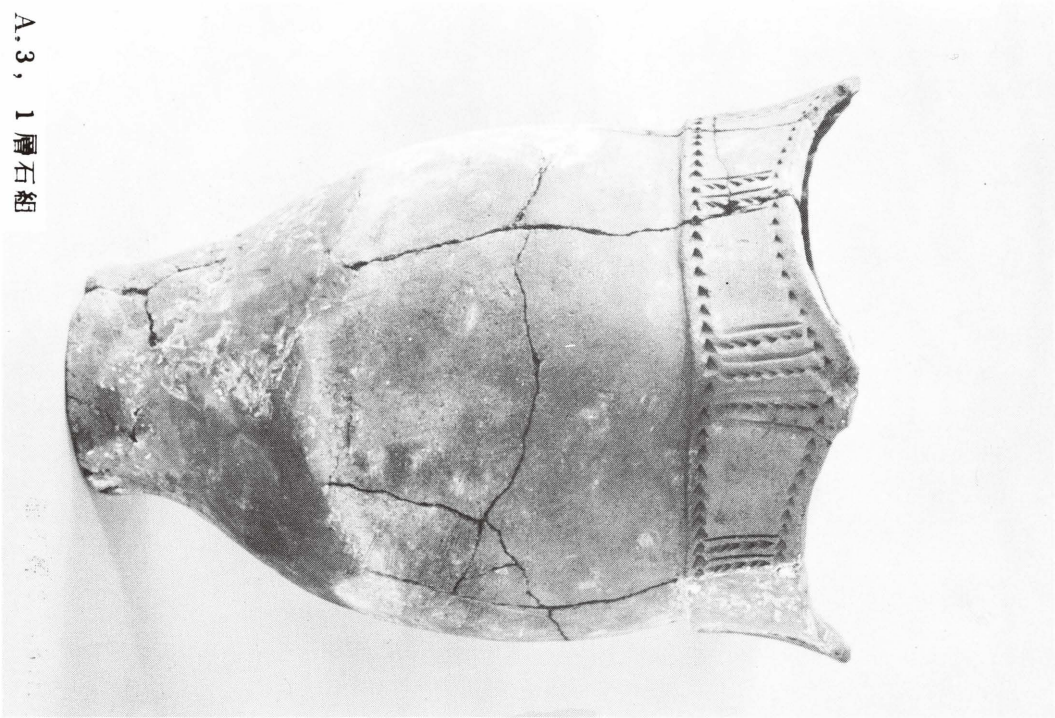
B.4，1層下部

B.8，3層下部

図版第2　面縄前庭・嘉徳Ⅰ式土器



B.7～8，2層下部



A.3，1層石組

図版第3　西斜面地区の調査

断層面に露呈した遺物包含層

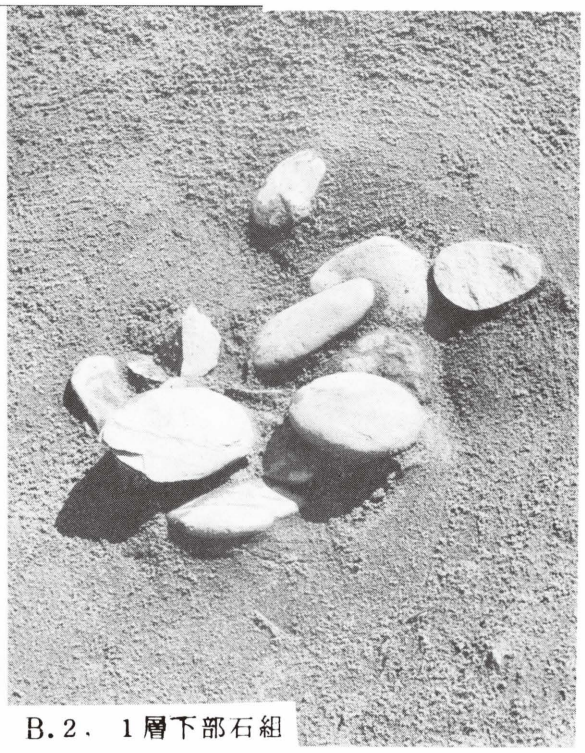
図版第4　第1・第2地区の調査

第1地区東地層

B.4，1層下部石組と獣骨

図版第5　第1・第2地区の調査

C.2，1層下部



B.2，1層下部石組

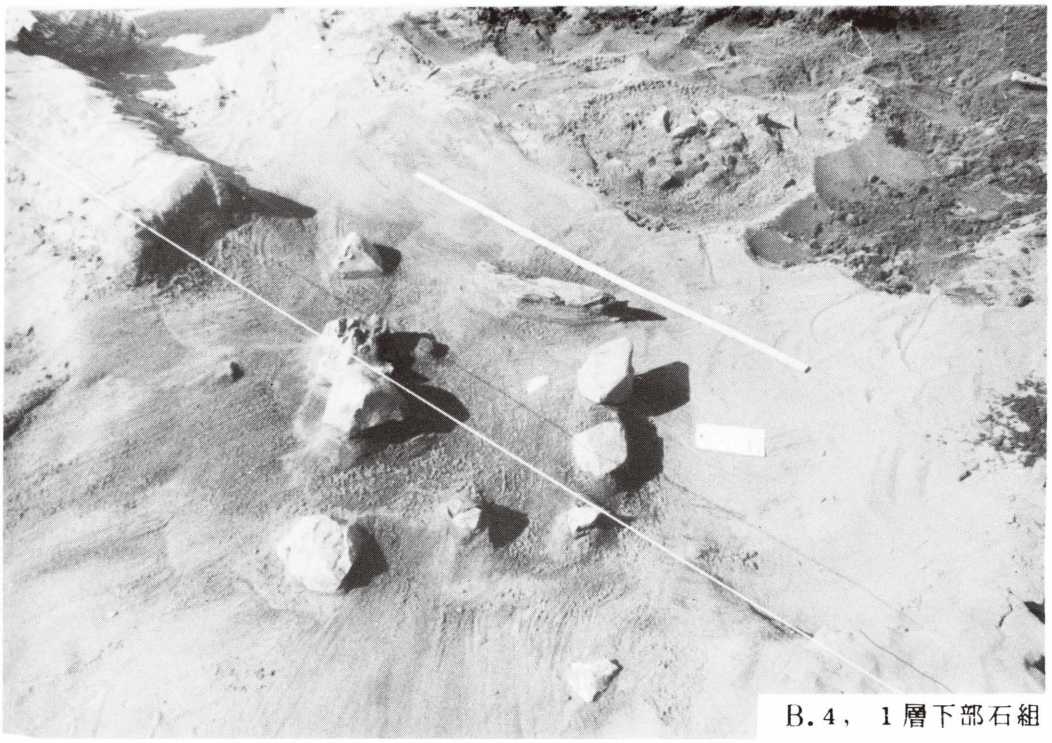
C.3，1層下部市来式土器

図版第6　第2地区の調査

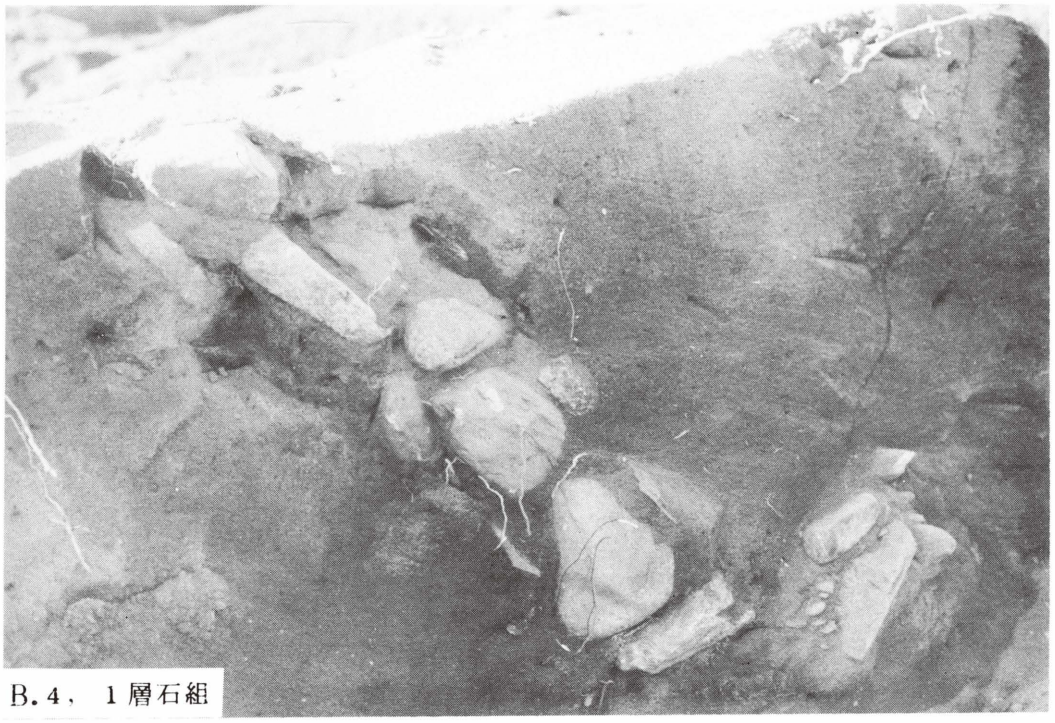
B.4，1層下部石組

B.4．1層下部石組群

図版第7　第2地区の調査



B.4，1層下部石組



B.4，1層石組

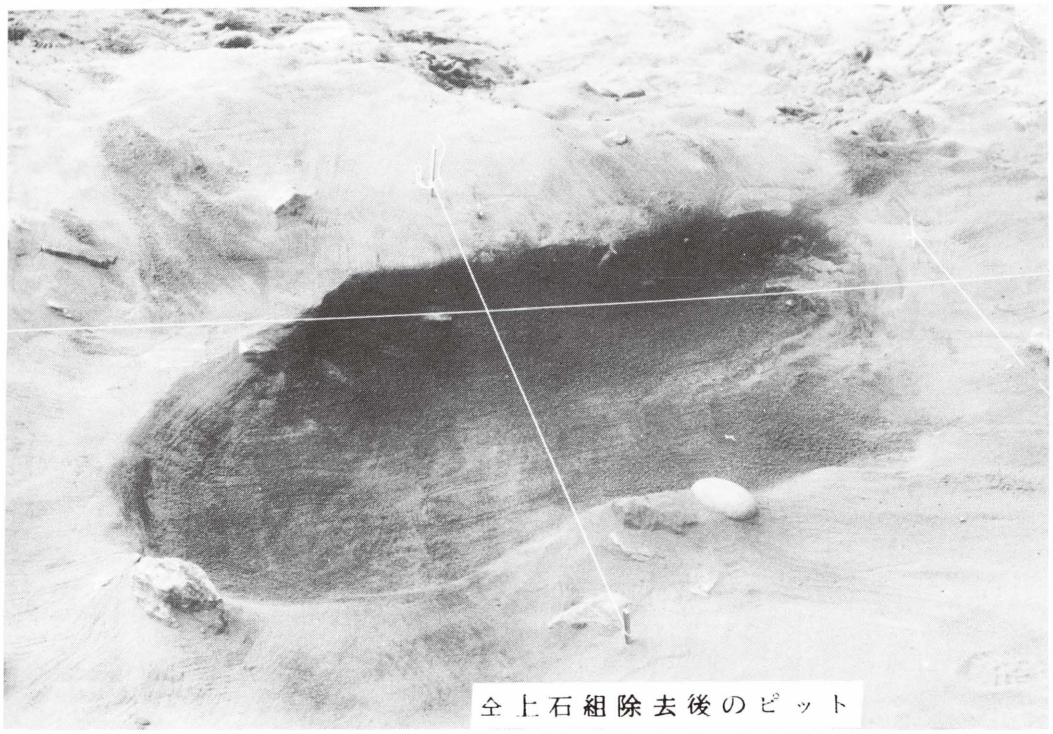
図版第8　第4地区の調査

A.3，1層石組と焼土中の土器

全上土器

図版第9　第5地区の調査

C.7～8，2層下部石組



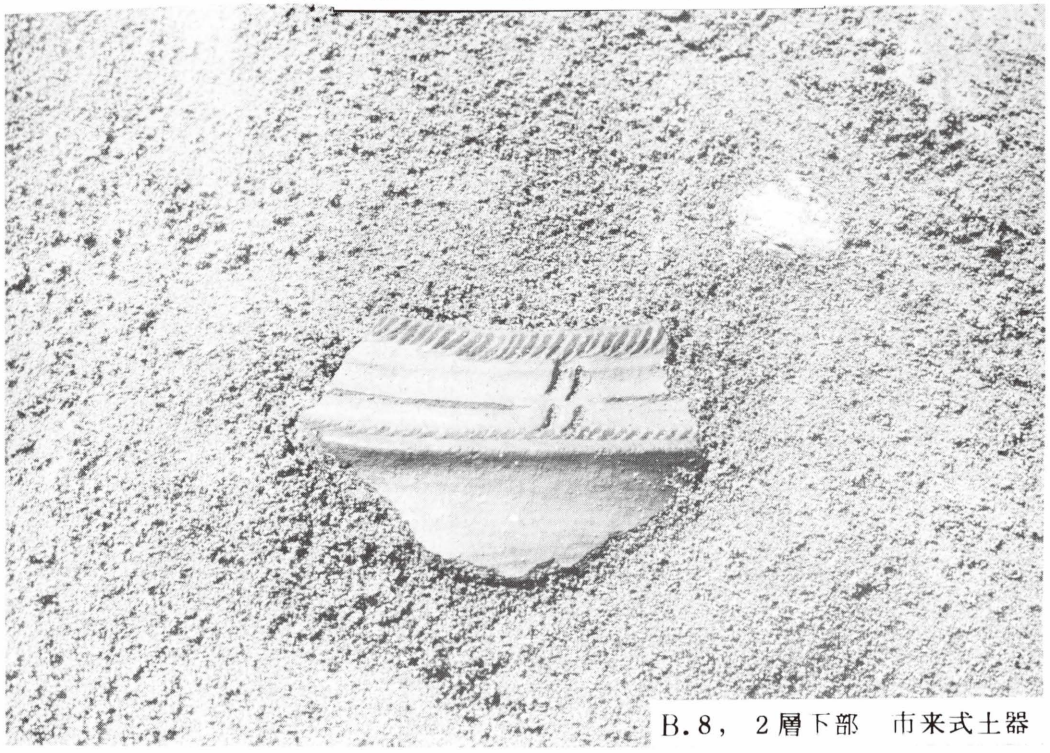
全上石組除去後のピット

図版第１０　第５地区の調査

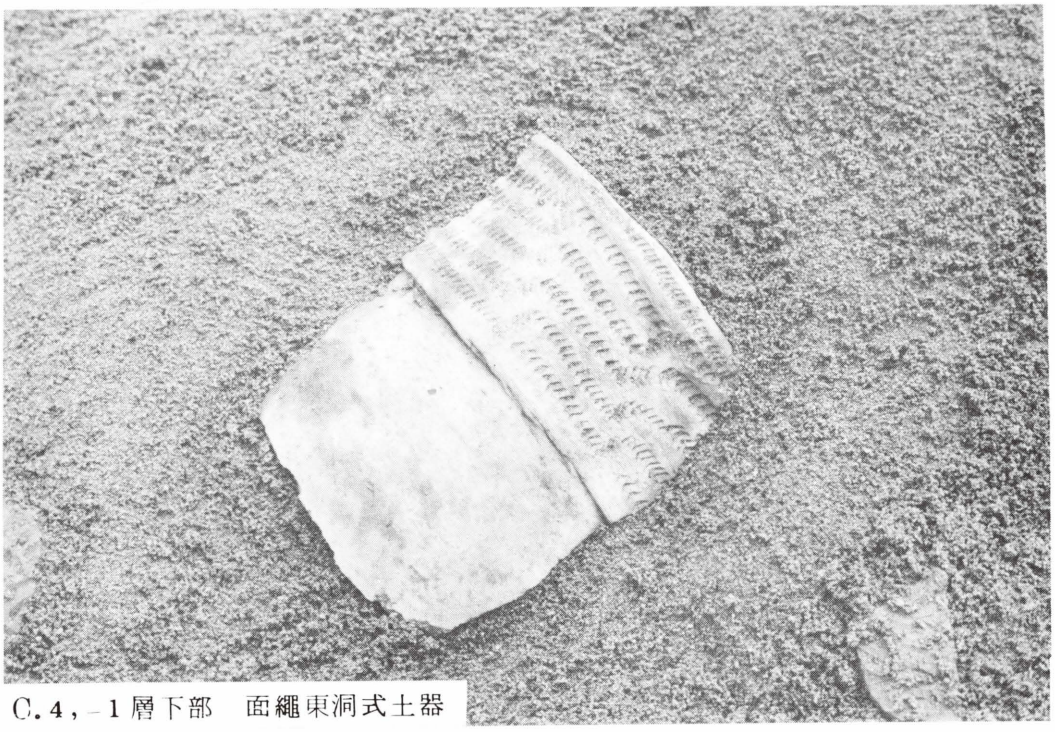
C.7～8，２層下部石組遺構出土の市来式土器

B.8，２層下部市来式土器

図版第11　第2・第5地区の調査



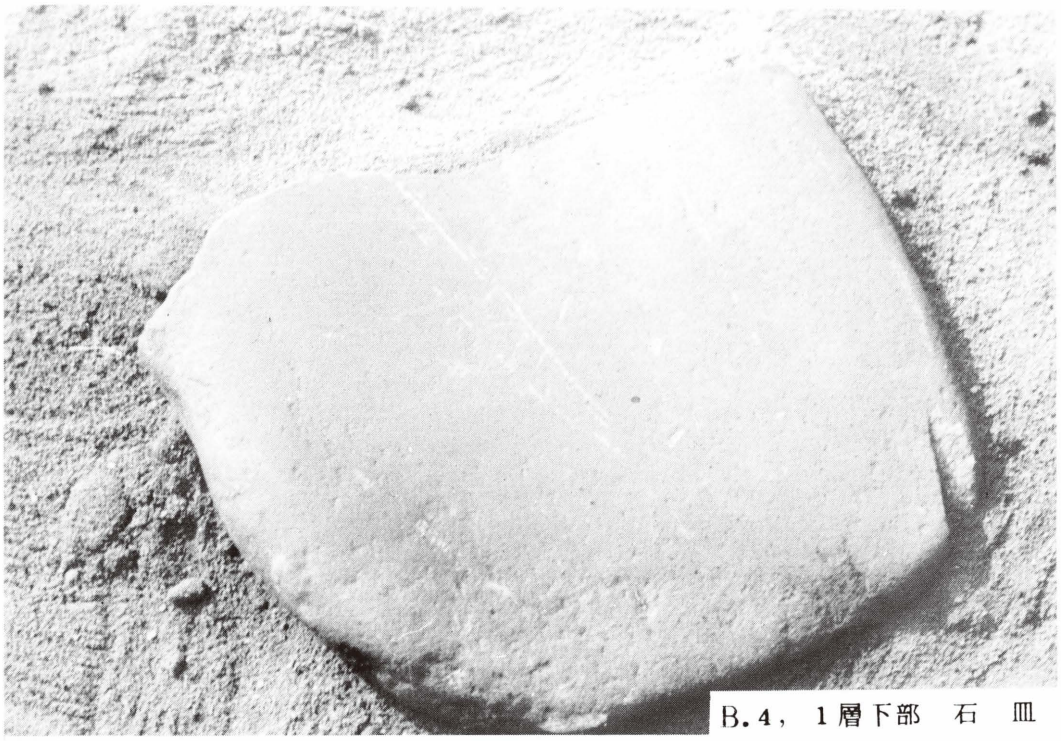
B.8，2層下部　市来式土器



C.4，-1層下部　面縄東洞式土器

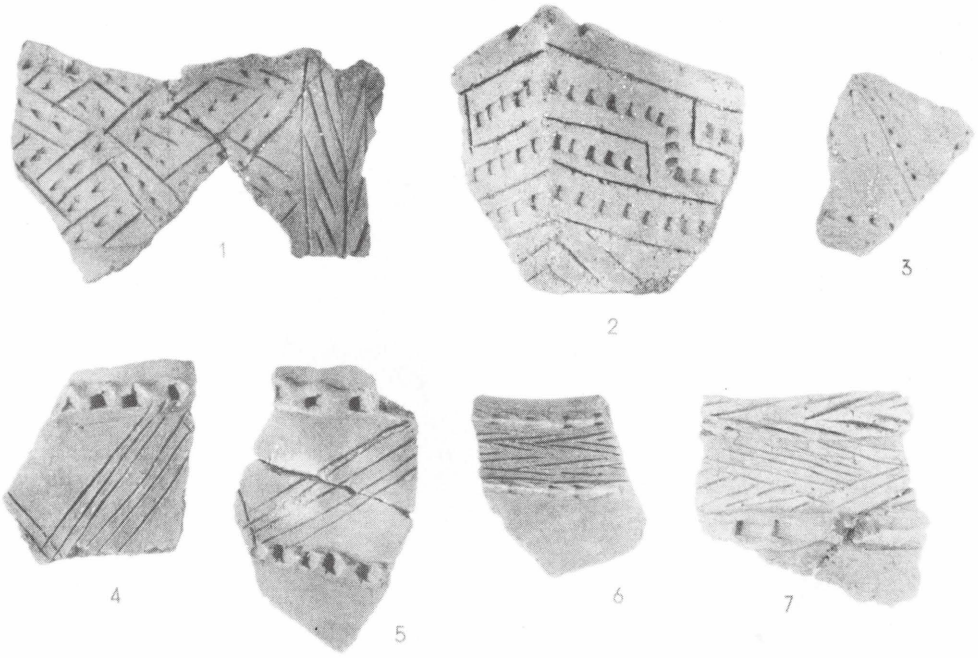
図版第１２　第２地区の遺物

B.4，１層上部　嘉徳Ⅱ式土器

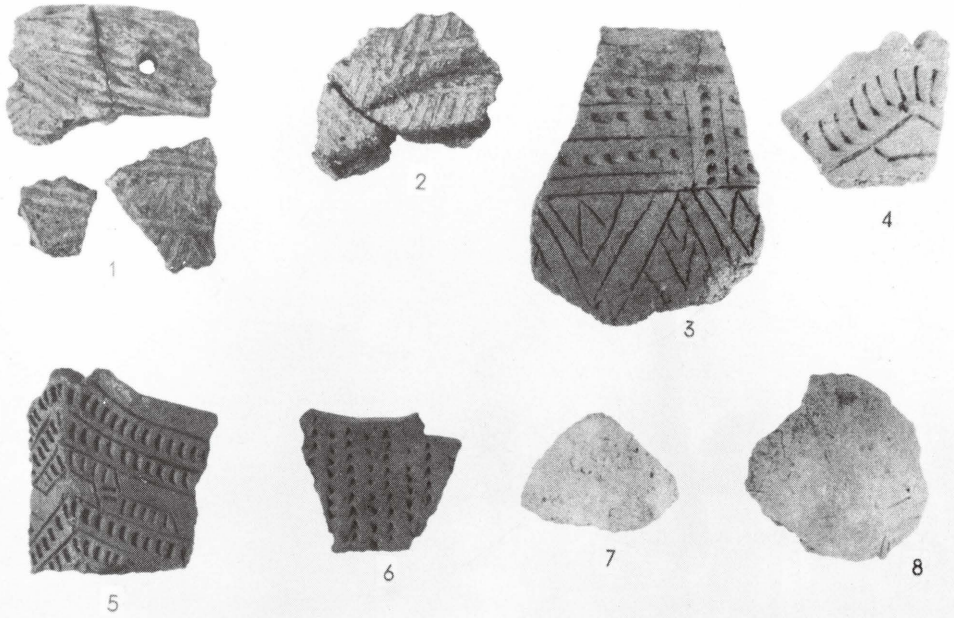


B.4，１層下部　石　皿

図版第13　第1地区の土器



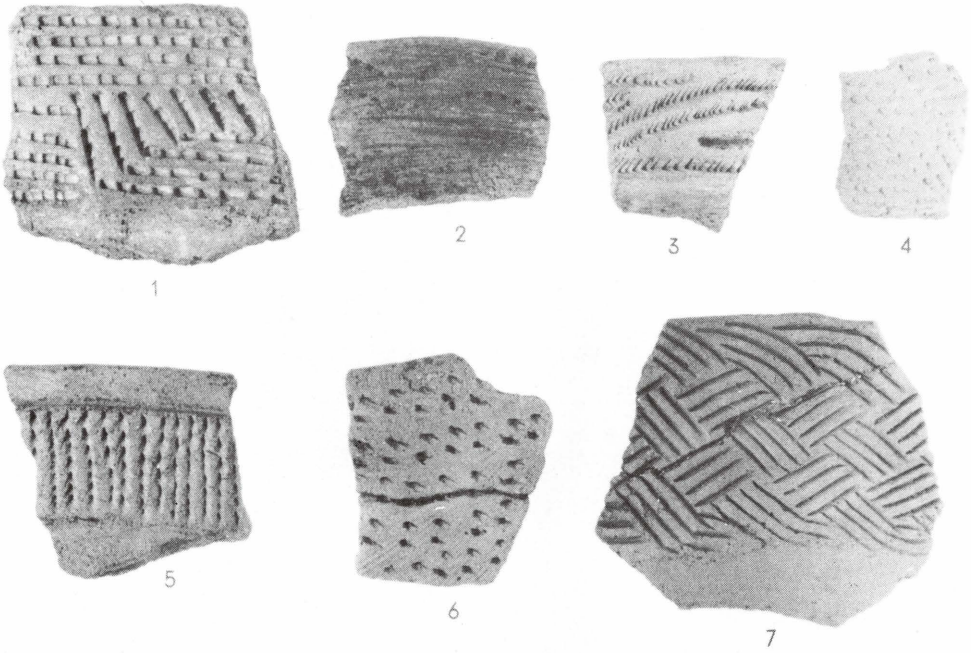
1～3　A.1，1下　1～3　A.1，1下　4～6　A.1，1上　7　A.1，



1～6　B.1，1下　7・8　B.1，1下

図版第１４　第１地区の土器

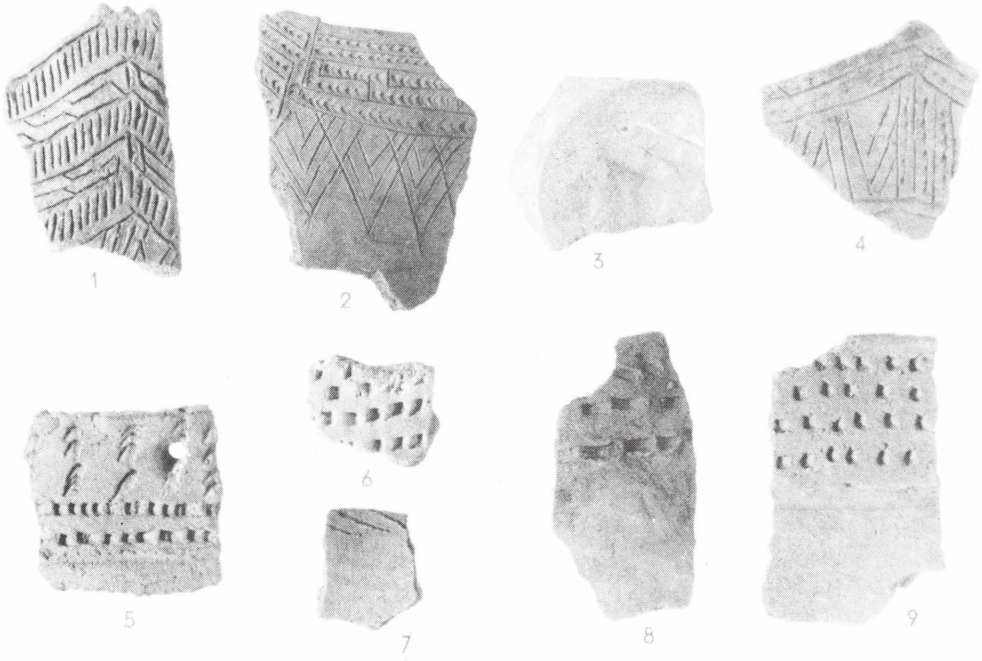
1. C.1，1上　2・4　C.2，1　3・5　C.2，1上



1～4　C.2，1下　5・6　C.2，1上　7　C.2，1下

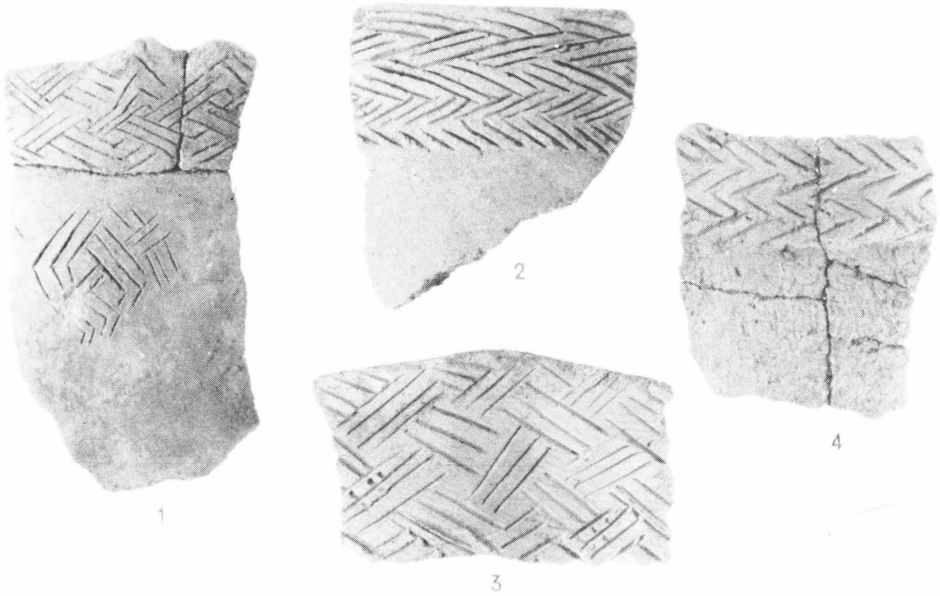
図版第15　第1地区の土器

1～4　C.2，1　　5　B.2，1　　6・7　B.2，1下

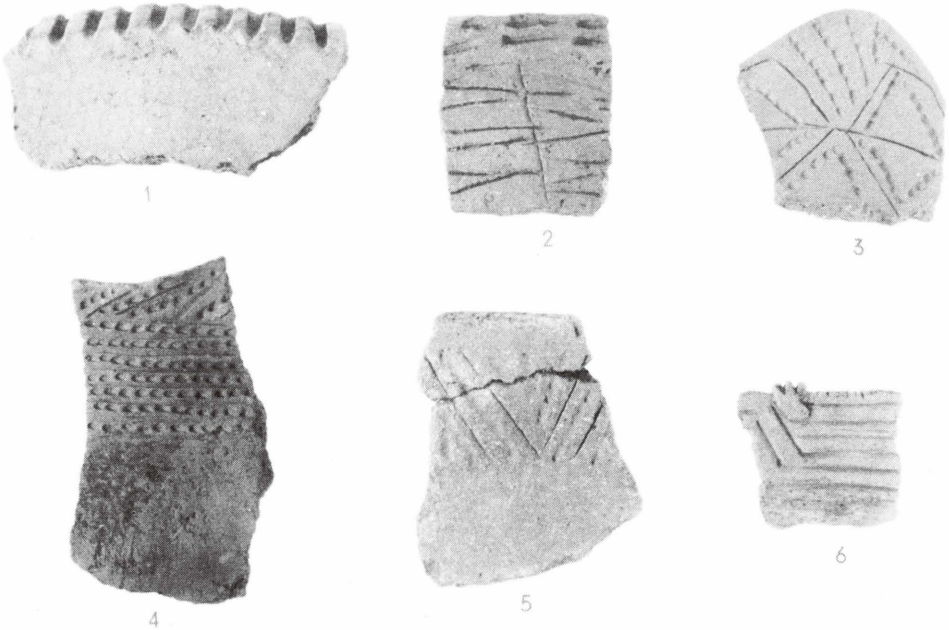


1　B.2，1上　　2～7　B.2，1下　　8・9　B.2，1

図版第16　第1地区の土器

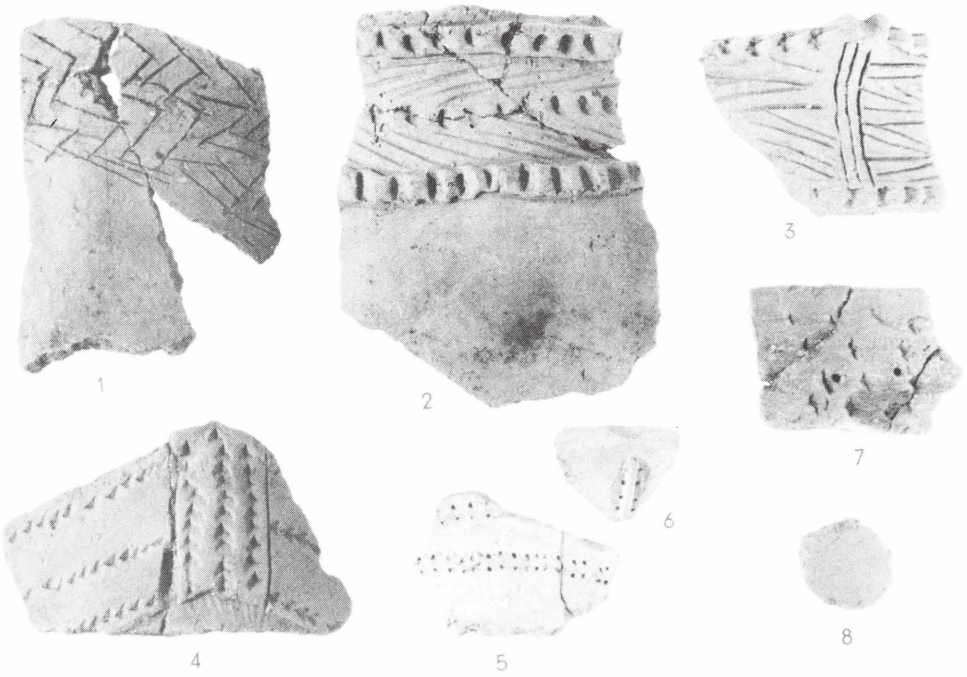


1　B.2，1　　2～4　A.2，1下

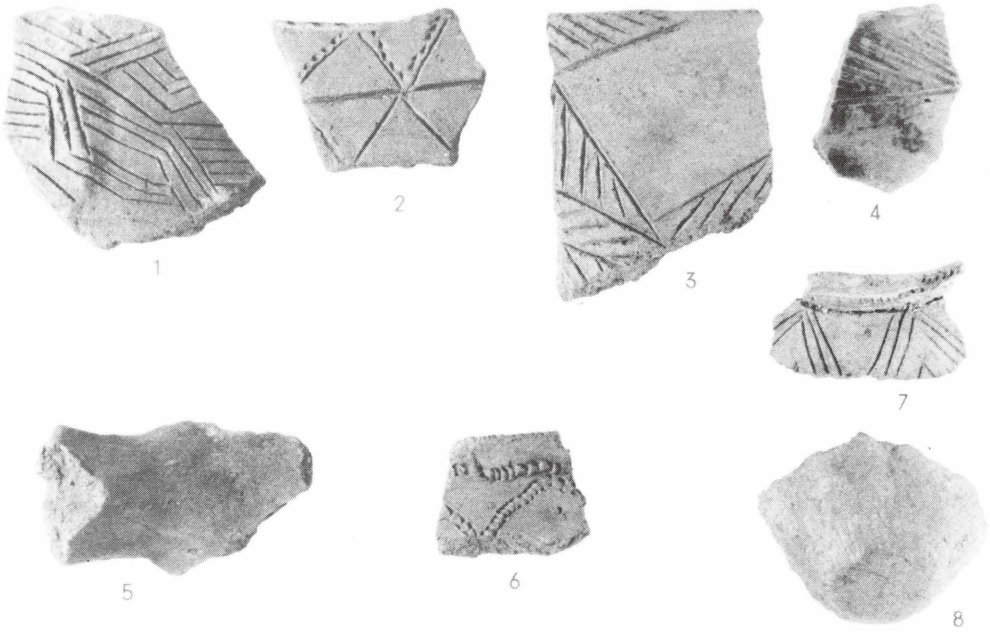


1　A.2，1上　　2・3　A.2，1下　　4～6　A.2，1

図版第17　第2地区の土器



1・2　A.3，1上　3　B.3，1上　4　A.3，1上　5・6　A.3，1



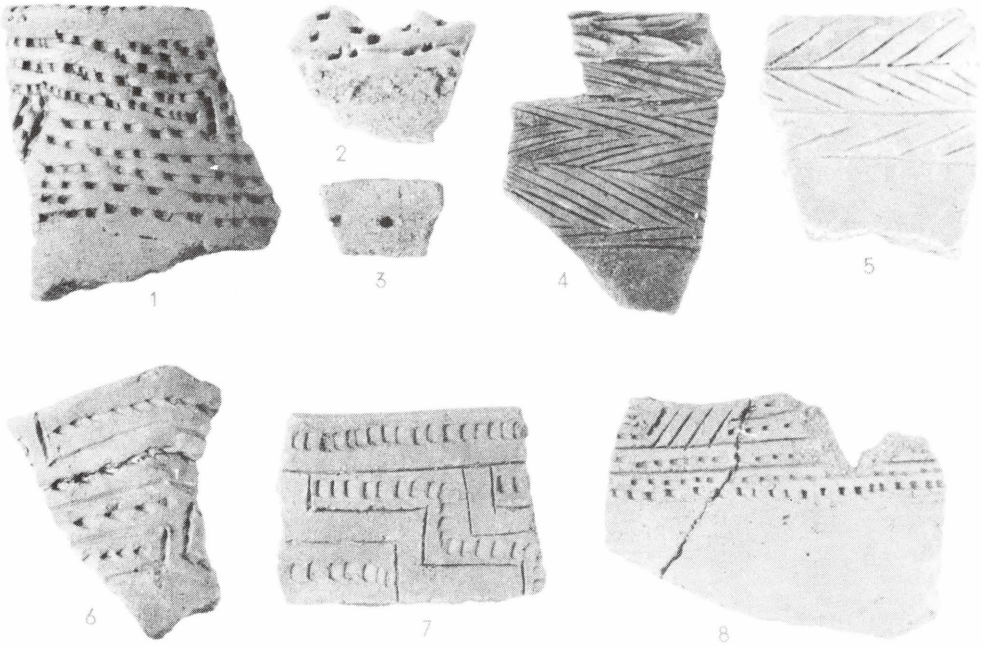
1・2，C.3，1下　3～6　C.3，1上　7・8　C.3，1最下

図版第１８　第２地区の土器

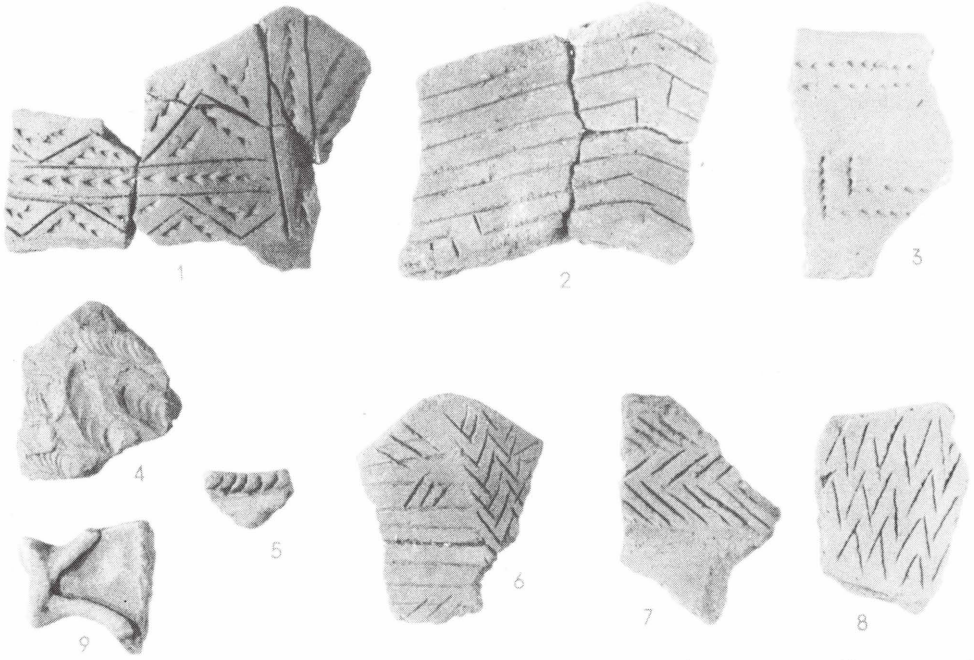
1～7　A.4，1　　8～10　A.4，1上

1～5　B.4，1下

図版第19　第2地区の土器

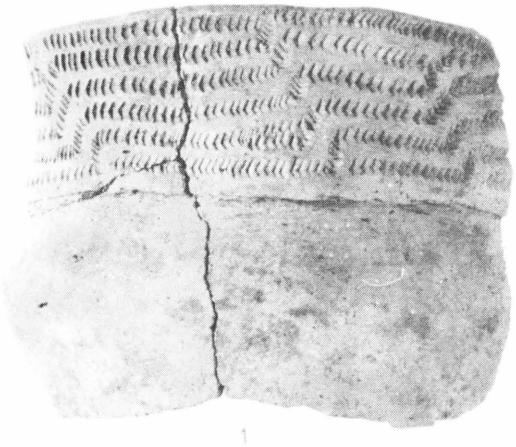


1～5　B.4，1上　　6～8　B.4，1下

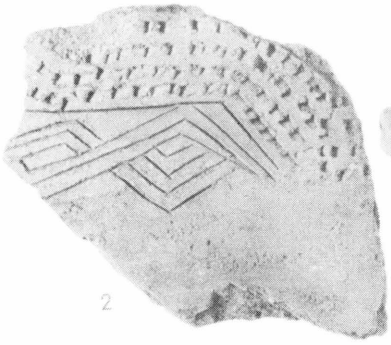


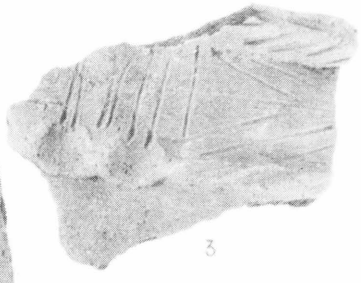
1～3　B.4，1下　4・5・9　B.4，1上　6～8　B.4，1下

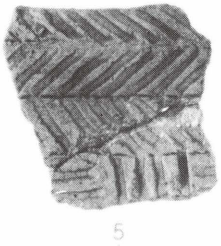
図版第２０　第２地区の土器



１・２　C.４，１下



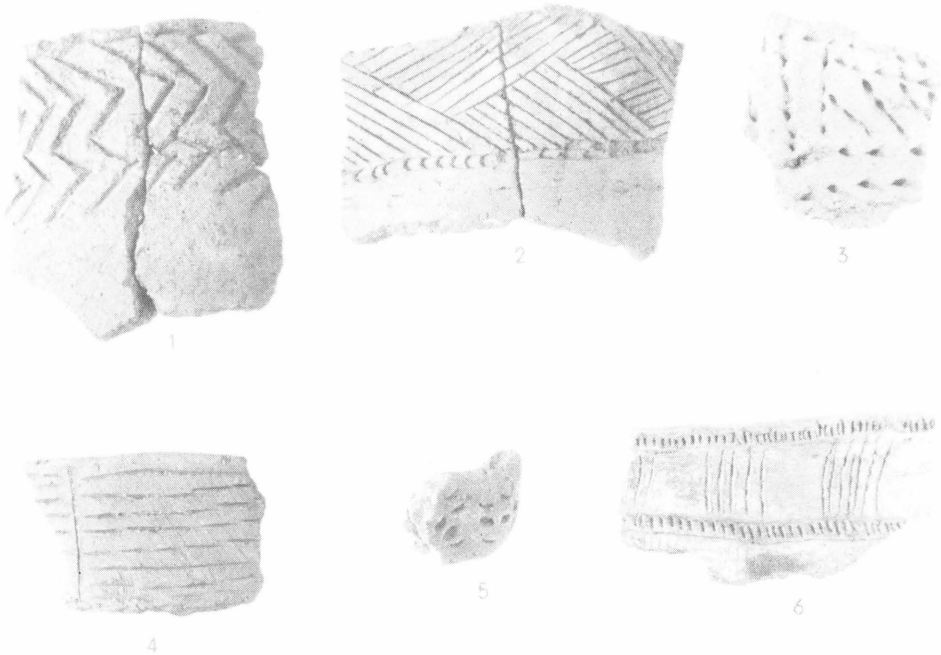




１～６　C.４，１下

図版第２１　第３地区の土器

1・2　B.5，1上　3　B.5，1　4～6　B.5，1上　7～10　B.5，1下



1～4　B.5，1下　5　B.5，1上　6　B.5，1下

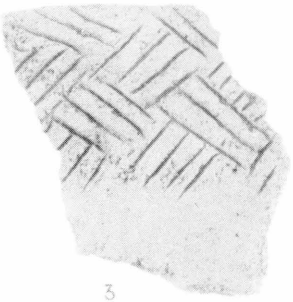
図版第22

第3地区の土器

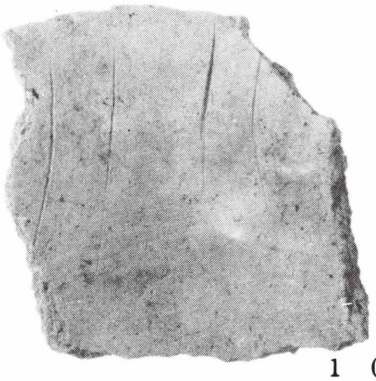
C.5, 1下

1

2

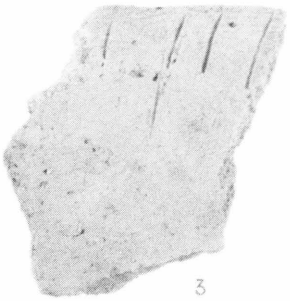


3



1

2

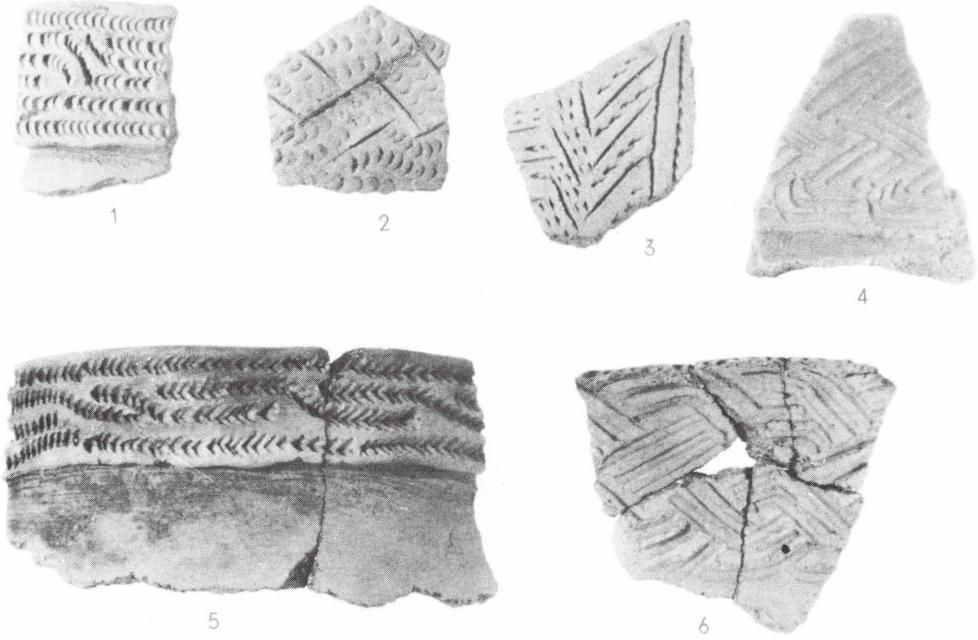


3

1 C.5, 1下 2 C.5, 1 3 C.5, 1下

図版第23　第3・第5地区の土器

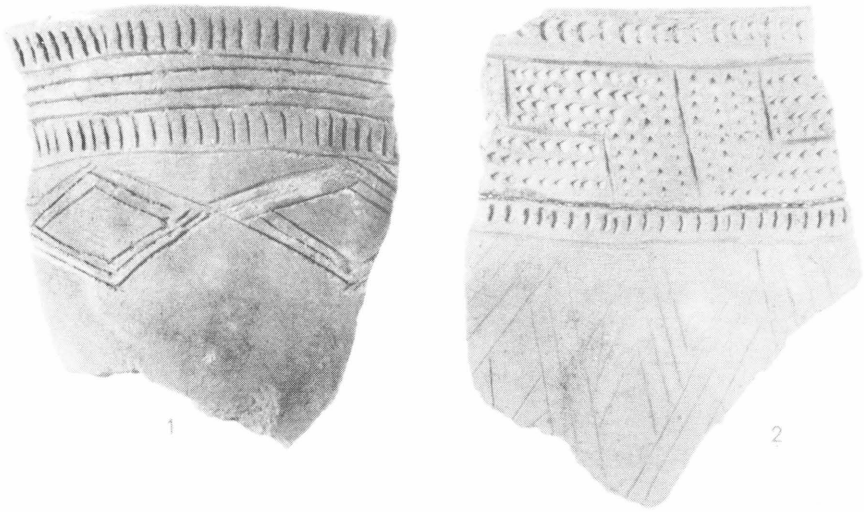
1　B.6, 1上　2～4　C.6, 1　5　C.6, 1下　6　C.6, 1　7　C.6, 1上



1～4　B.7, 2上　5・6　B.7, 2下

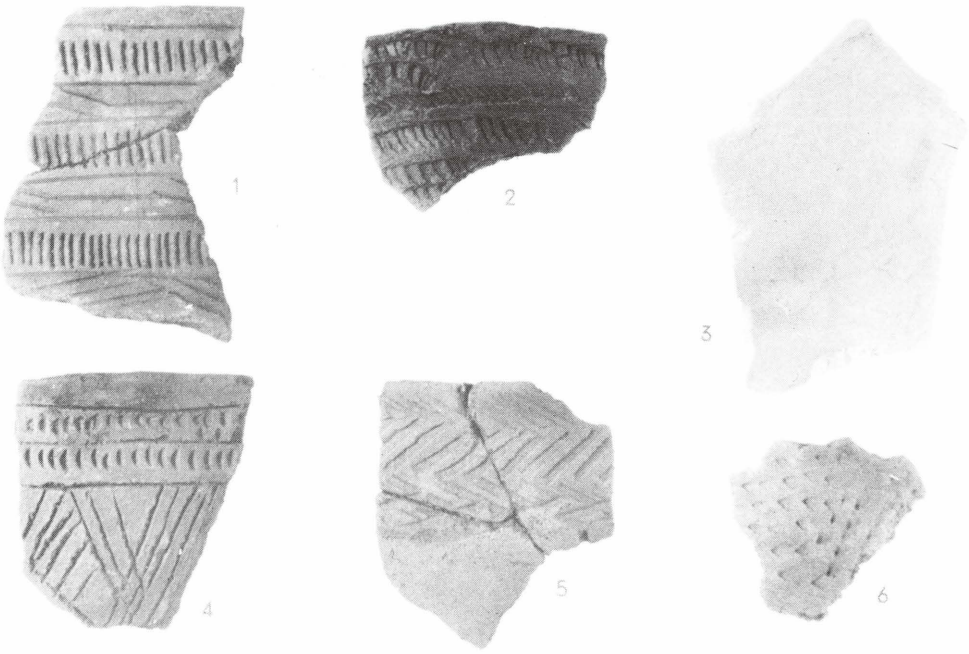
図版第24

1・3・4・6 C.7, 2下　2 C.7, 2上　5 C.7～8, 採集

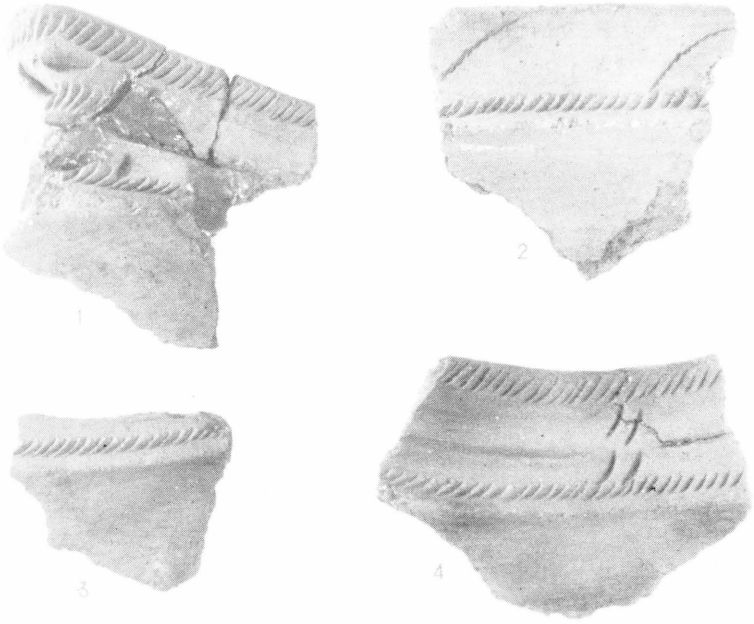


1 B.8, 2下　2 B.7, 2下

図版第25　第5地区の土器

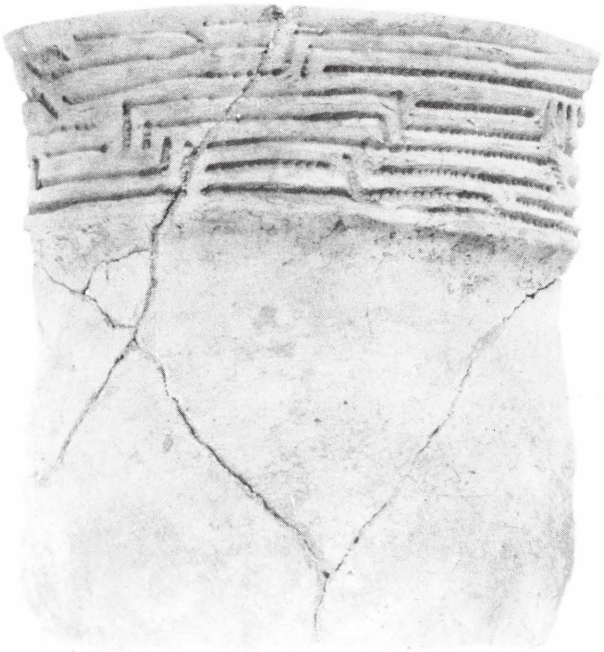


1・4　B.8，3上焼土内　2・5　B.8，2下　3　B.8，採取　6　B.8，2上

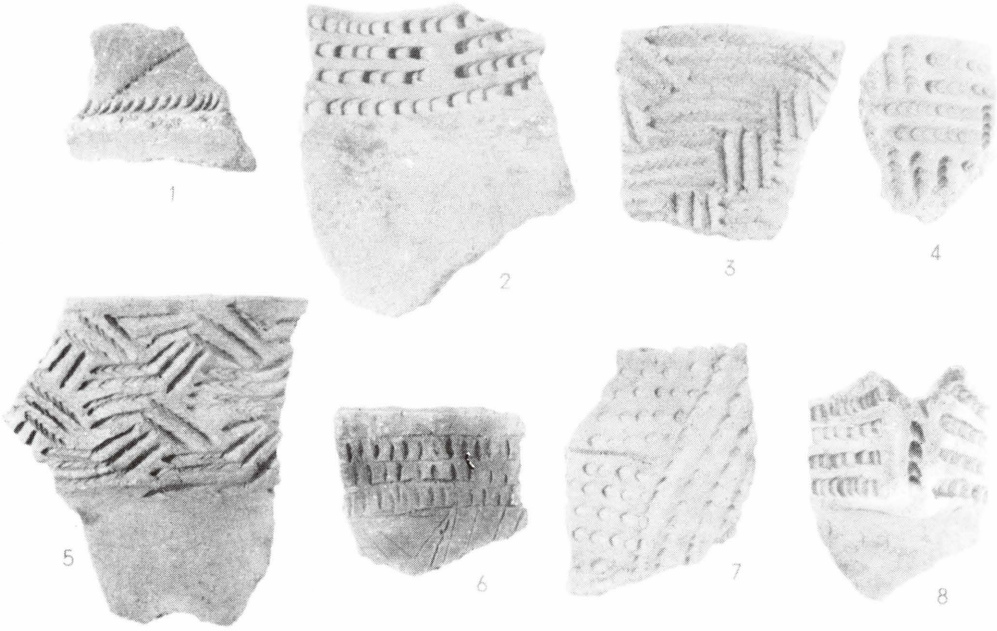


1～4　B.8，2下　市来式土器

図版第２６　第５地区の土器



C.７～８，２下　石組遺構内



1～4　C.7～8，石組遺構内　　5　C.8，2　　6・7　C.8，3　　8　C.8，2上

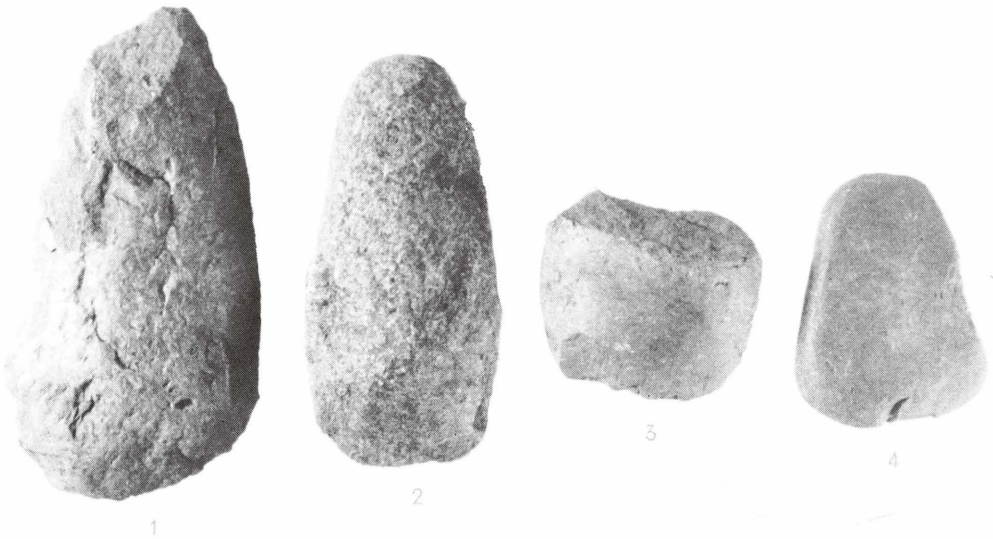
図版第27　西斜面地区の土器

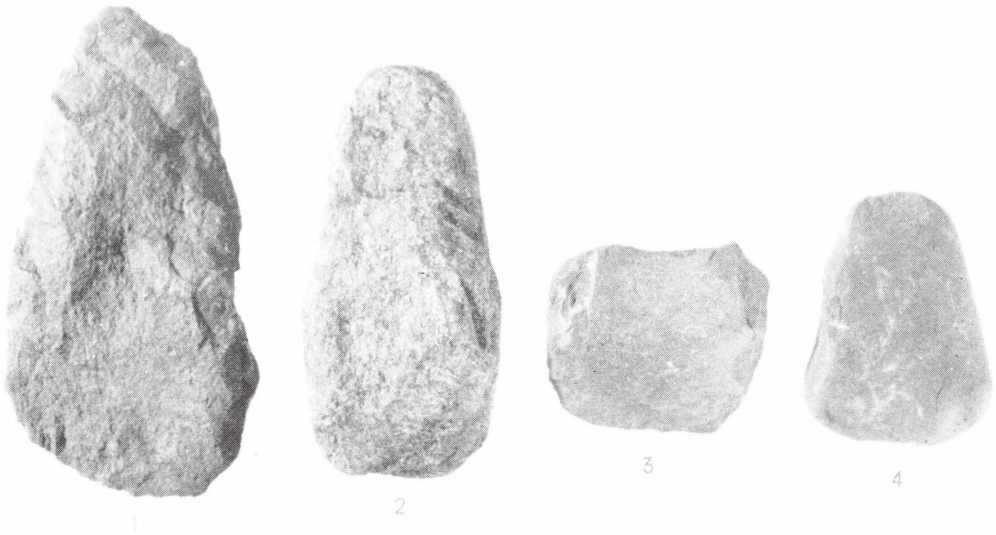
1・2　6ブロック，1　3・5・6　4ブロック，1

第2・第3地区の石器

1　B.4，1上　　2　C.6，1下

図版第２８　第１地区の石器





1　B.2, 1　　2　A.2, 1上　　3　A.2, 1下　　4　B.2, 1

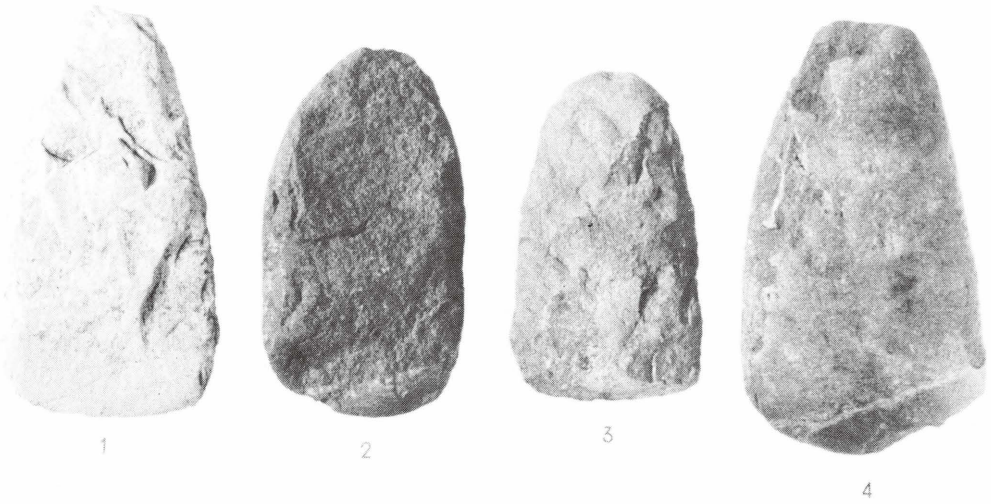
図版第29　第1地区の石器

1～3　C.2, 1下

図版第３０　第１地区の石器

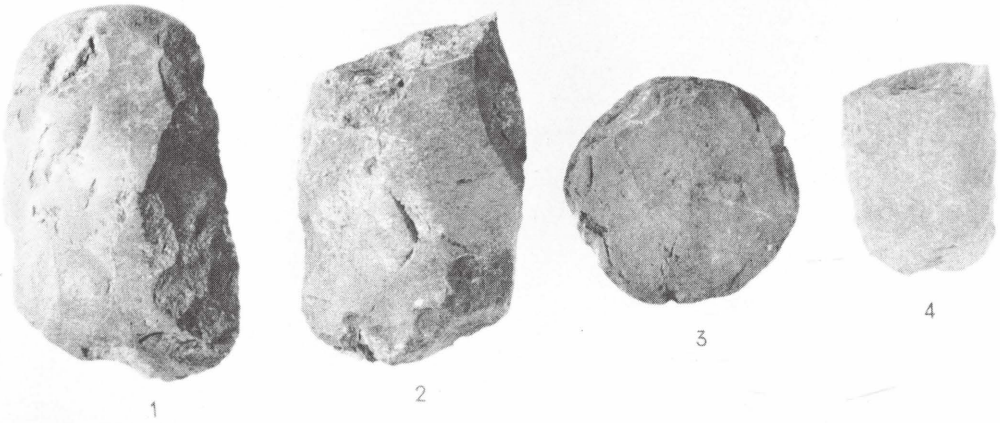
１・２　C.2，１下　　３　C.2，１

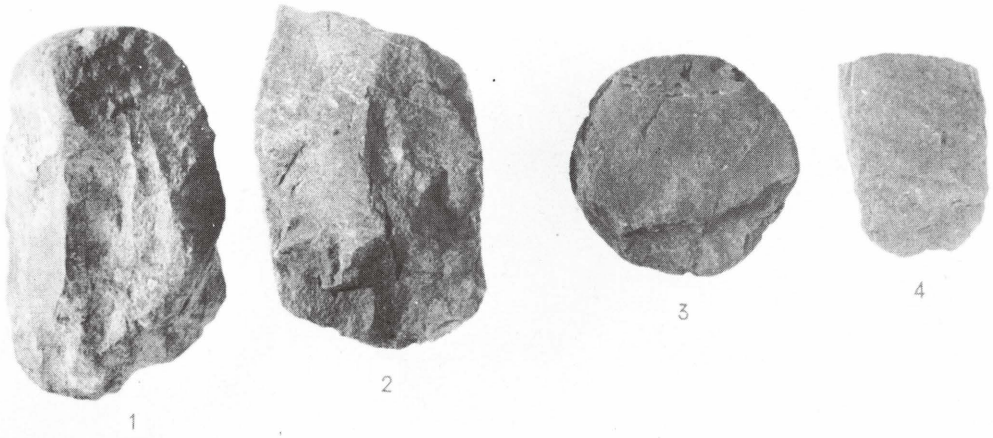
図版第31　第2地区の石器



1　C.3，1上　　2～4　C.3，1下

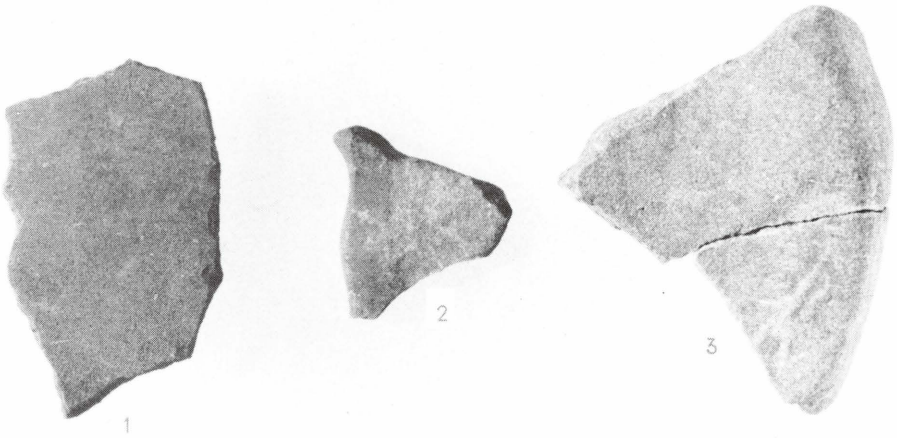
図版第３２　第２地区の石器





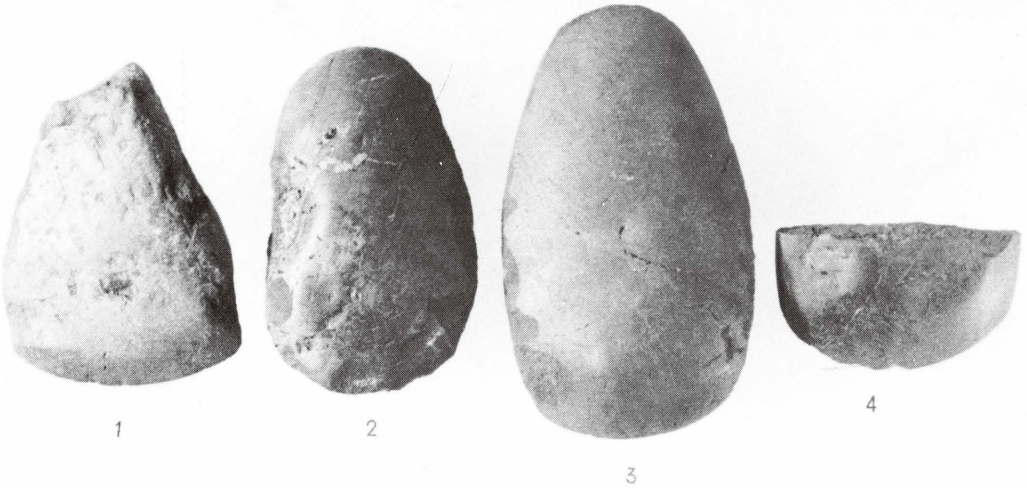
１～３　C.３，１下　　４　C.３，１上

図版第33　第1・第2地区の石器



1　B.2，1　2・3　C.3，1上

図版第３４　第２地区の石器

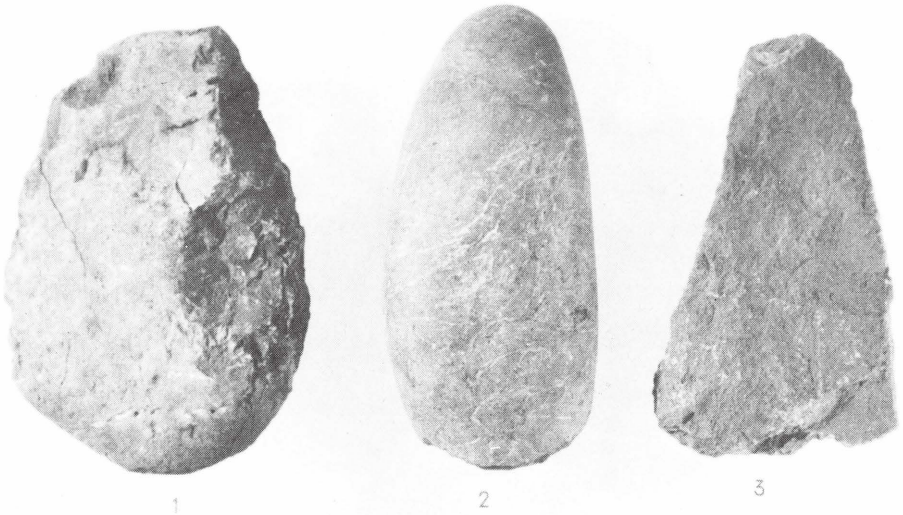


1・2　C.4，1下　　3・4　C.4，1上

図版第35　第2地区の石器

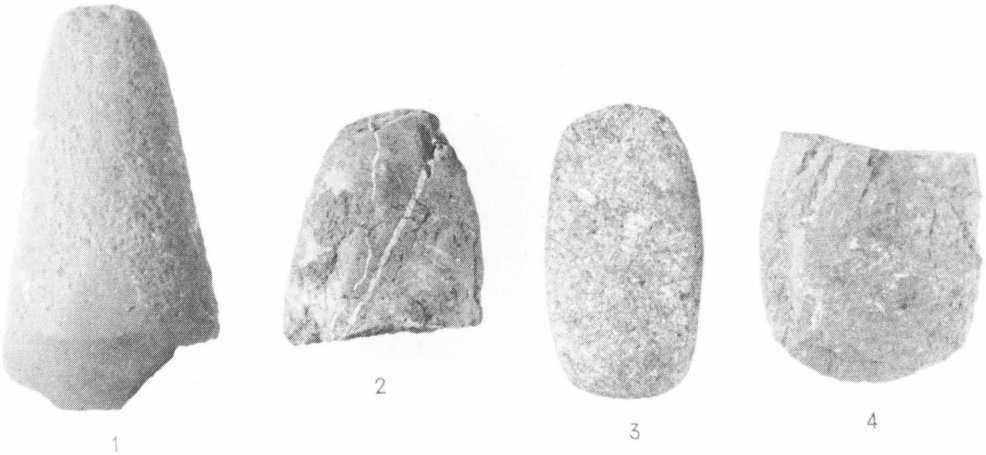
1・2　C.4, 1　　3　B. 採 取

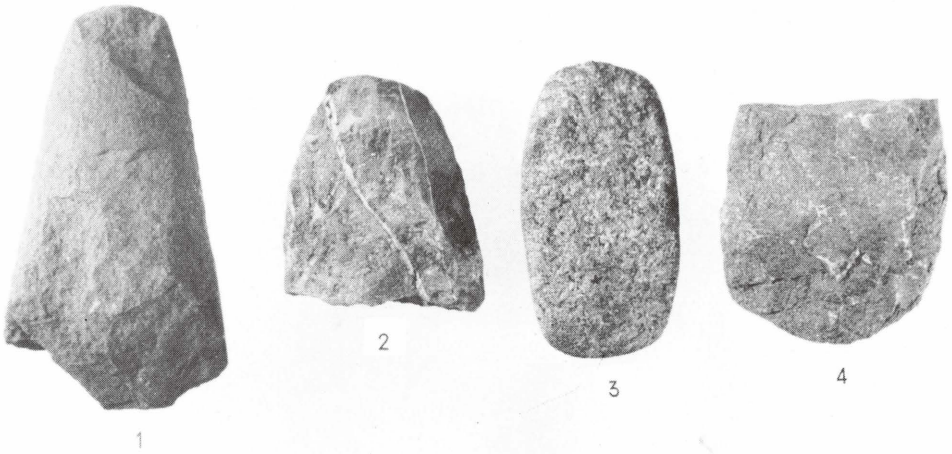
図版第36 第2地区の石器



1・2 B.4, 1上 3 B.4, 1下

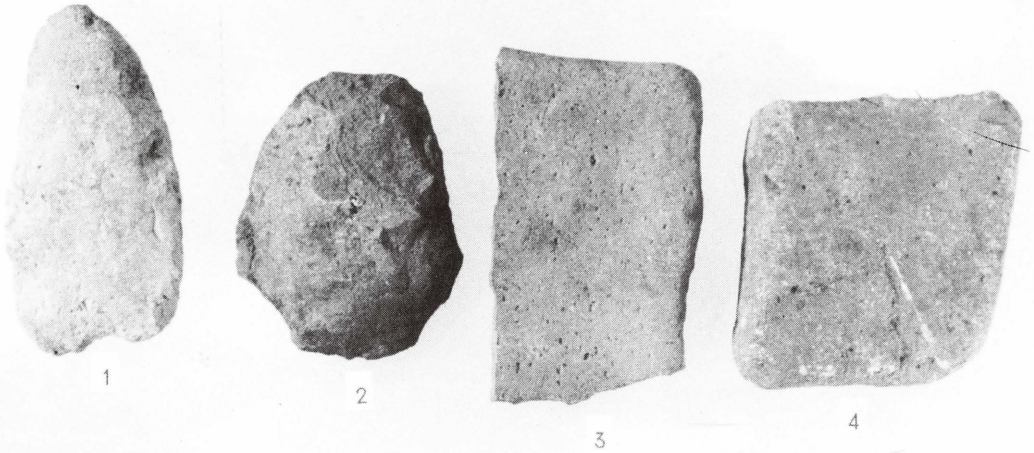
図版第３７　第２地区の石器

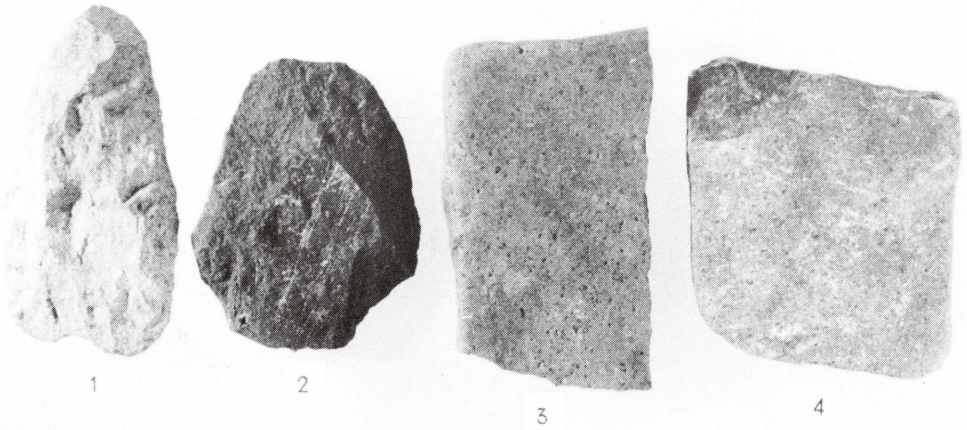




１・３　B.４，１下　　２・４　B.４，１上

図版第３８　第２地区の石器





1　B.3, 1　2　南崖　3　B.3, 1上　4　B.4, 1上

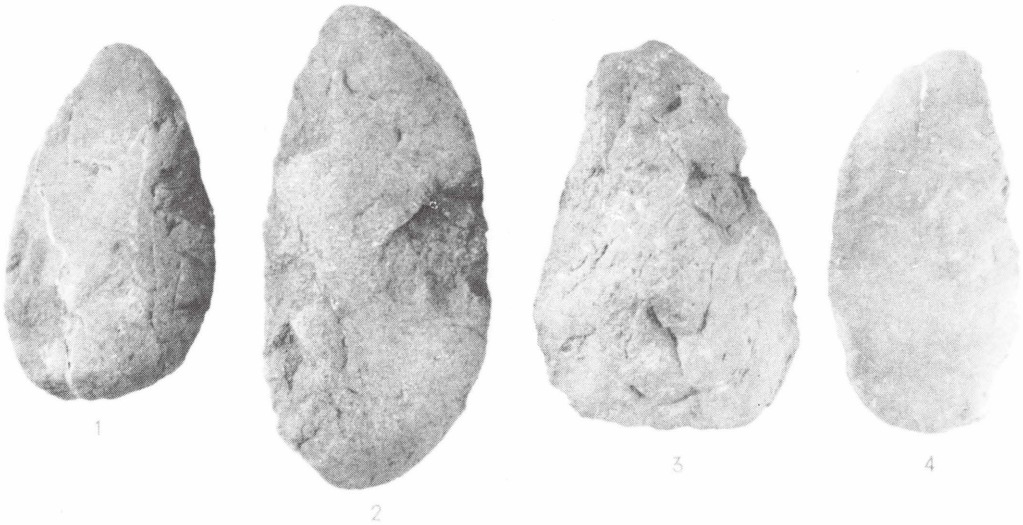
図版第39　第2地区の石器

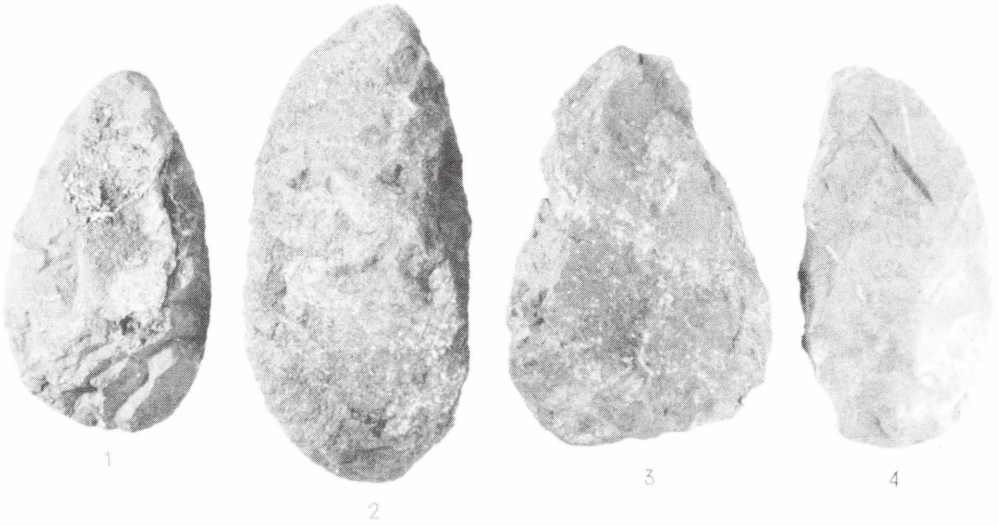
C.3, 1下

図版第４０　第３地区の石器

1・4　C.5，1上　2・3　C.5，1下

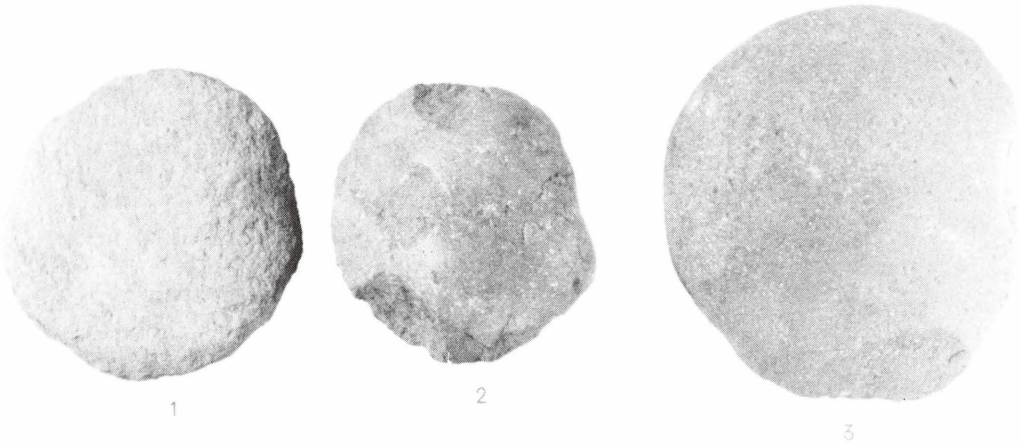
図版第41　第3地区の石器





1・3　C.5，1下　　2　C.5，1上　　4　C.6，1下

図版第42 第3地区の石器

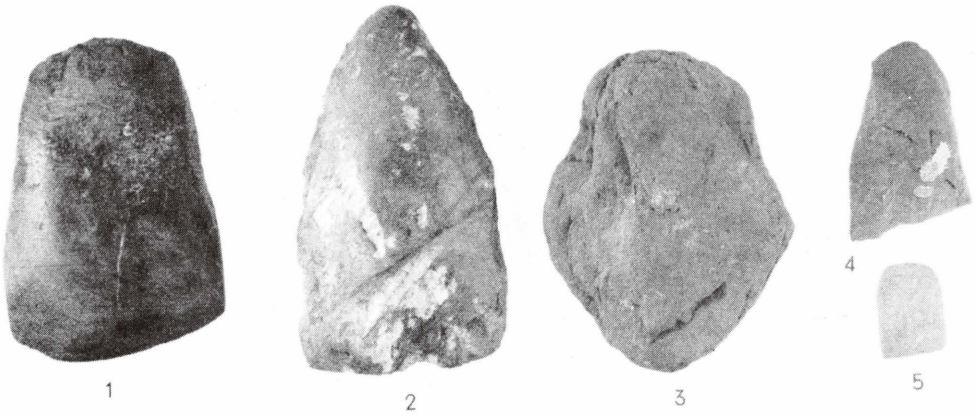


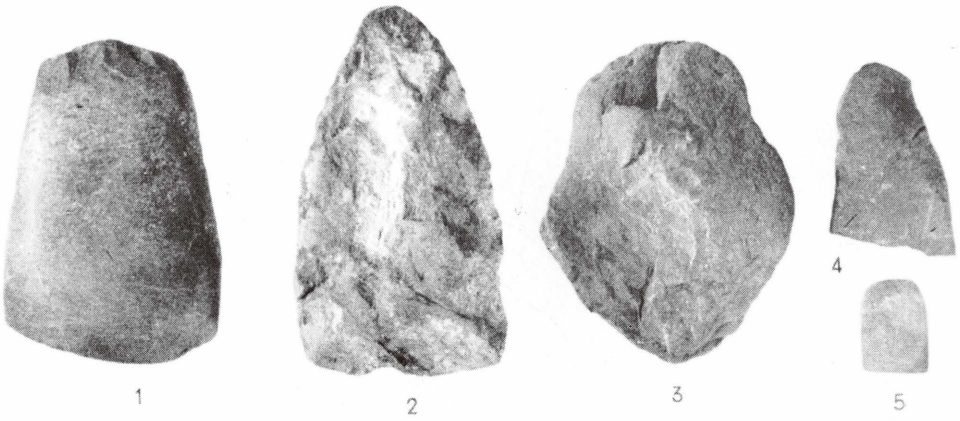
1・2 C.6, 1上 3 C.5, 1下

図版第43　第3地区の石器

1・3　C.5, 1上　2・4　B.5,

図版第44 第3地区の石器





1 B.5, 1 2 B.5, 1下 3 B.6, 1上 4 B.5, 1上 5 C.6, 1下

図版第45　第4地区の石器

1・2　A.3, 1上

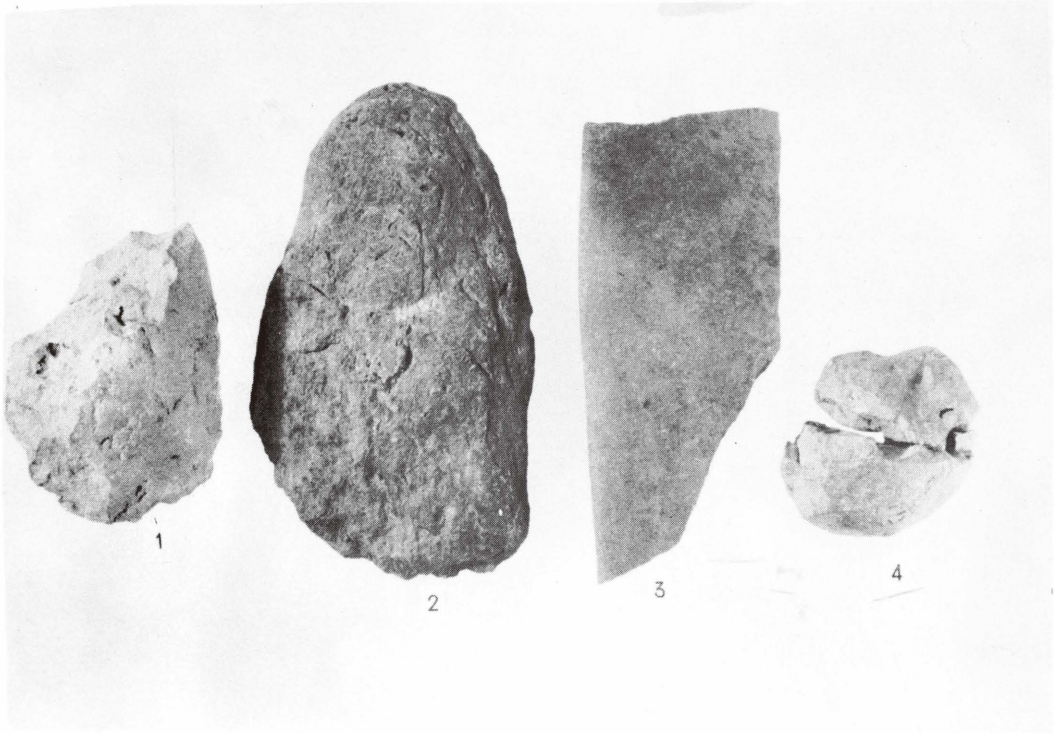
図版第46　第4・西斜面地区の石器

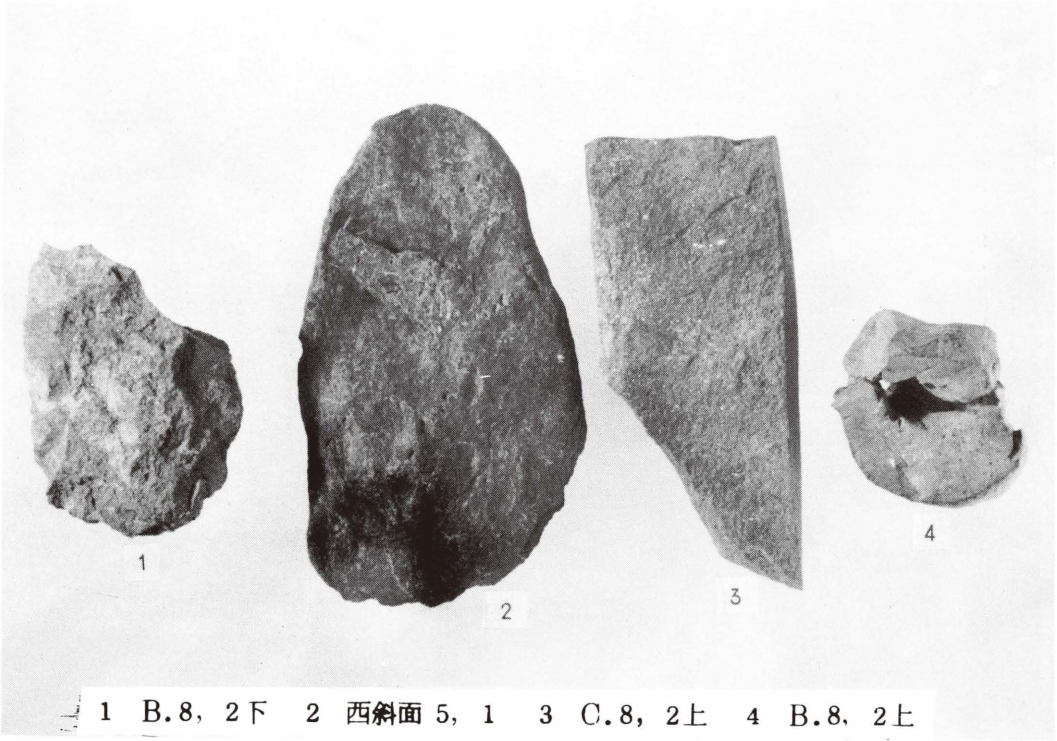
1　西斜面1，1　　2　A.4，1下　　3　A.4，1上

図版第47　第5・第1・第2地区の石器

1・2　B.7, 2下　3　B.8, 2下　4　B.4, 1上　5　C.2, 1

図版第４８　第５・西斜面地区の石器





1　B.8，2下　2　西斜面 5，1　3　C.8，2上　4　B.8、2上